

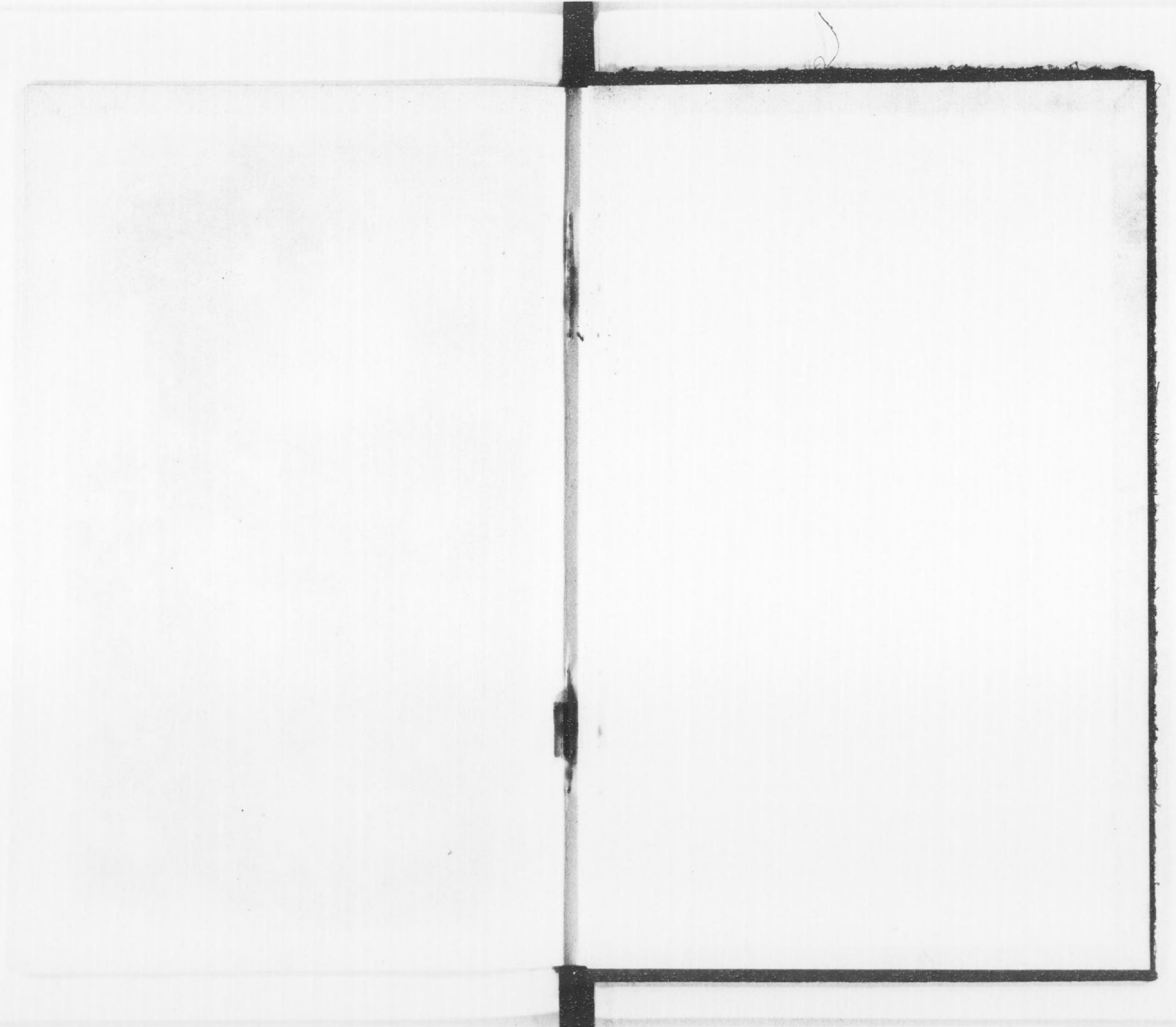
65



始









子116  
594



西參ノ事業卜人

大正  
15. 6 2  
内交







## 序

東北には山峰重疊して波濤の如く連り、西南は田園遠くひらけて廣茫涯なくその間を矢作の水逢妻の流が注ぎ、明治枝下の疎水が縦横に通じて居る、この西參の地これ徳川氏發祥の所にして、當年の三河武士は、大方此地に崛起したのである、されば到る所が古蹟であり、觀る者すべてに歴史がある。

然れども、此の光輝ある過去を、現代とは何等の連繋なしに回顧するのみに止むるは、只一時の榮華の夢を追ふに過ぎざるもので、寧ろ歴史を讀するものご云ふべきである、吾人は過去に生きたる生活の延長として、現在に於て更に有意義に生きねばならぬ、過去を根柢としてより大なる活動の歩を進めねばならぬ。

『西參の事業ご人』は光榮の歴史を背景ごしたる現在の舞臺であり、現代の活躍を示すものである之を閲讀すれば、そこに幾多の信仰があり、教訓がある、これに鑑みて將來更に大なる奮起が生じ、活躍が起り生氣潑瀾たる舞臺の現出せんことを疑はぬものである。



此點に於て、稻垣春浪氏の苦心と努力との結晶たる此書に甚大の敬意を拂はなければならぬ。

岡崎市立圖書館長

柴田顯正

大正十四年十二月

## 自序

家康は岡崎に生れて十五代將軍職の礎を築き、鬼本多亦此處に育ちて雄名を各所の戰場に馳せたものである。此事或は偶然の表徴かも知れないが、併し西三地方には由來歴史に記録すべき人士の輩出決して尠少に非ず、現に今日でも學界に、政界に、實業界に麒足を延ばすもの多數にありて、中には世界的に其名を謠はれるものすらある。けれども偉人にはソレ／＼人一倍の努力と、之に相應する時代好運及び其他の條件が伴はなければならぬ故、凡てに之を目的として邁進せしむることは恐らく識者の奨励しない處であろう。西三新聞社長稻垣氏も疾く此處に心を配して、正しき凡人を後輩に、又世に知らしめて、容易に之に倣はしむることが、内容の充實手段乃至妥當の國力發展策であるとして余に其執筆方を委せられた。

扱て起草したものが本書であるが、後より見るに、筆執る業こそ六年に及ぶも、凡者の身、假し『正しき凡者』としても、斯程の拙劣なるものが世に出せるか、奈何を先づ恥ぢねばならないものとなつて居る。固より誤字誤植等は、一由幾何の過多内在、されど只此瓦れきを包む錦として、余の師事



する山脇先生の顯字、及び稻垣氏に寄せられたる柴田圖書館長の序文を得たことは欣幸にて、内容の貧弱を掩ふに餘りがある。同事に本書の編纂上に種々材料を提供されて、拙劣ながらも、白を黒乃至男を女と書かなかつた一事は、先輩諸氏指導の賜にて、其懇切は深く感銘する處である。終りに滿岡四ヶ月大方諸氏の知遇を得し光榮を謝して序とする。

大正十五年三月一日

外務省霞俱樂部にて

# 原 卯 三 郎

## 目 次

岡崎電燈株式會社	一	吉 田 賢 男	六	深 田 三 太 夫	四
岡崎貯蓄銀行	四	本 多 敏 樹	元	早 川 久 右 衛 門	五
杉 浦 銀 藏	六	小 瀧 喜 七 郎	三	服 部 鑄 造 株 式 會 社	五
高 石 辨 治	八	岡 崎 銀 行	三	服 部 太 郎 吉	六
榮 田 顯 正	二〇	日 清 紡 績 岡 崎 工 場	三	八 田 駒 吉	六
須 藤 庄 吉	二	西 村 傳 八	三	淺 沼 銀 治	六
東 海 製 菓 株 式 會 社	三	三 龍 傳 三	三	小 野 庄 造	六
前 川 榮	五	田 口 百 三	元	額 田 銀 行	六
深 見 太 郎 右 衛 門	六	岡 崎 電 氣 軌 道 株 式 會 社	四	濱 島 一 雄	六
巴 川 灌	七	愛 知 銀 行 岡 崎 支 店	四	木 村 善 助	七
小 田 織 治	八	小 松 原 伊 十 郎	四	伊 勢 屋 株 式 會 社	七
村 田 武 二	九	木 多 憲	四	高 橋 久 松	七
手 嶋 武 司	三	太 田 松 藏	四	安 藤 久 勝	七
本 多 吉 郎	三	岩 瀨 常 七	四	杉 浦 磯 次 郎	七
小 幡 吉 郎	三	鈴 木 正 造	四	平 岩 熊 五 郎	七
河 合 松 八	三	柴 田 嘉 市	四	渡 會 儀 三 郎	七
河 村 鍵 藏	三	石 川 七 藏	五	兵 藤 壽 三 郎	七
緒 方 里 見	三	千 賀 千 太 郎	五	三 河 織 産 株 式 會 社	七











# 西三の事業と人

原卯三郎編纂

## 岡崎電燈株式會社

岡崎市籠田町  
電話五五番五〇五番

本邦電氣事業界に於ける關西の重鎮東邦及び其姉妹會社矢作の二大會社と對峙して孤城落魄の憂き目も見ず、よく壘を守つて事業の發達と基礎の確立に異數の成果を收め西三事業界の覇者として自他に之を許すものが岡崎電燈株式會社である位ひは三才の兒童も知悉する處にて今更事新しく指摘する程の要がない。けれ共、今日でこそ同社は資本金一千五十萬圓、發電能力約一萬五千六百基、而して西三一市七郡に亘る配給區域を占めた大會社であるが其沿革を検ぶれば羅馬は一日に成らなかつた事を痛切に覺へて來る。固より株式會社としての岡電は明治四十年四月の創立にて水力電氣の試練も既に十二分に盡されたる後の事故對需要者との關係以外に於ては差したる困難も味はずに濟み得たであらう。併し、そは本尊に對する單なる表面の一片鱗に觸れたるものにて當時組織こそ改正せられたれ主体は依然として取り遣されたる苦闘の面影を存しながら萬年の後迄、難行不屈の光を放ちて我水力電業史の第一頁を飾つて居るのである。而して其本尊主体とは誰あらう現岡電の前身岡崎電燈合



資會社である事も亦改めて嘸々する要はない。

回顧せば岡崎電燈合資會社は世人周知の如く杉浦銀藏近藤重三郎田中功平の故人三氏が發起して明治二十九年三萬圓の資本金で設立されたものであるが當時發電所を額田郡奥殿村（現岩津村）大字日影に選び大岡正氏之が主任技師となつて工事其他の技術方面に携り翌三十年七月完成送電の開始と共に開業式を行つた會社である。當時我電氣事業界は頗る幼稚にして専ら火力發電によつたものであるが只僅に箱根外一二箇所に極めて小規模なる水力發電所があつたものゝ之とて熟れも近距離の送電に過ぎなかつた故、遠距離送電の可否を比較すべき何の資料もなく搗て加ふるに世間の疑惑と嘲笑は相次ひで起り他面資金と物資との不足も遠慮會釋なく訪づれ來りしかば三氏の胸中慘憤を窮めて其苦辛は名狀すべき様無く爲めにさしも豪膽なる三人も時に相擁して血涙を絞つたこともあつた。されど三人死を祈願しての努力は空しからず試運轉の日煌々たる電光の晝をも欺く輝きに魅惑せられた世人は今更の如くに驚嘆して先代手島鐵司氏の如きは送電線設置の金融を故早川久右工門氏に媒介する等同情者は次第に生じて遂に事業の開始を圓滿に敢行することゝなつた然るに天、三氏の約束を履行せしむ可き時が來たのか明治卅二年杉浦氏幽界に拉致去られ同四十三年近藤氏も逝き、大正五年には残る一人の田中氏さへ尙之を犠牲に上げる可く、強制されて了ふたのである。けれ共一方三人の費を奪ふ、た神は同社をして瀧脇發電所（現第一發電所）の電力を瞬く間に消化せしむるの盛運を與へ爲めに杉浦



氏の逝去せる翌年には此處に平基の發電機を増設せねばならない情態とならしめた杉浦現社長が先考の遺志を繼いで近藤田中の兩氏を援け協力事業に携つて不眠不休の活動を續けたのは此時である。斯くする中に社會は電燈電力の眞價を認めて需要激増するの機運に逢著したれば明治四十年資本金五十萬圓の株式會社に更改し日露戦後の事業勃興に刺戟されて第二發電所の竣工が高石現常務の手によつて遂げられたのは正に近藤氏の歿せられたる翌四十四年のことであつた。而して大正三年には第三發電所の竣工。續いて第四發電所（一、五六五基）及び補助火力發電所（六〇〇基）の完成せられし大正七八年の前を承けて田中氏も此世を去つた者である。さすれば天に獻ぐ可く約せし費は最早盡して餘す處はない。今後は只々盛運を代償に授下せらる可き一途のみとなつたが果して然るか、大正七年には二百萬圓に増資し同九年には碧海電氣株式會社を合併して二百三十二萬圓の資本金を擁し、越へて大正十年には一躍五百萬圓の大會社となるを得た。更に名古屋電燈より小原發電所を買收して三百廿五基の出力に改正したのも此時である。續いて大正十二年二月には平阪電氣株式會社の合併によりて資本金五百十五萬圓になり又十月には一千五十萬圓に増資して龍大會社の班に列することゝなつたが十三年二月大濱火力發電所（四、〇〇〇）の竣工と共に循環線路の建設成つて送電上の安全を期する工事に成功した。而して今や營業年度第三十六期を算して自家發電能力八千六百六十五基、東邦矢作及び天龍より三千六百二十五基を受電して總計一萬一千七百八十五基を抱有し尙第五發電所（三、七二五）



も此程竣工したれば次は目下計畫中である、第六發電所の完成であるが之れとて遠からざる間に眺めらる可ければ他方姉妹會社の設立他會社への投資等と相俟つて順次發展向上するは疑ふ可くもなくソレにしても創立當時から拂つた犠牲を思へば實に涙ぐまじき感じがする。同時に元勳三故人の遺志を繼いで何事も誤らずよく今日の社運を隆盛ならしめたものは杉浦社長高石常務を始め其他多士濟々の賜であるが今同社の諸重役を示せば左の通り。

取締役社長 杉浦銀藏、 常務取締役 高石辨治

取締役 太田善四郎、近藤重三郎、早川久右工門、中村廣助、板倉九藏

監査役 千賀千太郎、深田三太夫、

株式會社 岡崎貯蓄銀行 岡崎市連尺町 電話二二一番

連尺町の十字街に他を睥睨して一際高く聳立する新築のビルディングを見るであらう。之が由緒深き岡崎貯蓄銀行の本店であると説明する迄もなく讀者自らにして既に先刻御承知の筈。けれ共斯くなる迄に至つた同行の沿革を検べれば、其間に銀行業と社會の變遷を知る可き資料が十分に窺はれて、興味湧出するを覺へて來る。同行は明治三十二年四月十八日資本金三萬圓を以て株式會社岡崎銀行



の預金機關と云ふ使命の下に設立されたものであるが、當時の重役は頭取加藤賢治郎、取締役故深田三太夫、小野權右衛門、小野惣七郎、監査役加藤善八郎、齋藤廣治の諸氏であつたものゝ未だ銀行利用の觀念に乏しかつた時代のことゝて業績は一向に擧がらなかつた。併し克己奮勵の結果と日露戰役中の勤儉貯蓄思想の鼓吹が奏功して漸次預金者を増し程なく岡銀内の同居的經營に狹隘を覺へて明治四十年八月二十二日に連尺町へ移轉したものである。當時の主任は小澤仁三郎氏であつたが同年十二月加藤初太郎氏之に代り、更に四十三年七月には長尾三郎氏其衝に當つて三氏何れも腕に撻りをかけて發展向上に資したから預金者も次第に増して最早貯蓄銀行としての同行は基礎確全を加へ何の動搖も起る可き隙の無い迄に漕ぎつけられたものであつた。されど四圍の事情は何時迄も資本金三万圓の固執を許さず、大正八年十月十五日之を十萬圓に増資して益々信用を堅くするに力めた。併し貨幣價值の下落と他銀行の出現イカサマ者の跋扈本庄、不動等の破綻が幾分刺戟した爲めでもあろうが、政府は貯蓄銀行法の實施を強制したから、同行も大正十一年四月一日現在の五十萬圓に一躍増資することに定めた。斯くて一方イカサマ者の終熄と共に他方堅實なる經營法が信用を愈々深ふして預金者の自覺と交互相俟ち逐次西三住民の利用を盛んならしめるに至つたのは日常の方針が一般者の意緒に投した爲めであらう。果して然るか現在同行の代理店は二十八ヶ所三河全体に跨つて散布され、預金總額三百萬圓政府供託金百萬圓有價證券百五十萬圓積立金十萬圓に及ぶが尙月掛貯金の契約者だけでも



二百五十万圓あると云ふから大した話である。さればこそ毎年配當一割二分に決したとて不思議でなく又同行株が十圓以上のプレミアムを市場に維持して居たとて怪しむに足りない。尙頭取は創立以後續いて加藤賢次郎氏であつたが明治四十二年一月千賀千太郎氏に代り、大正十一年一月千賀氏の勇退と共に深田三太夫氏其任に選ばれて現在に經過して居る。而して同行の今日に於ける重役を示せば左の通り。

取締役取頭 深田三太夫、

取 締 役 深田政次郎、深見太郎右工門、近藤哲三郎

監 査 役 近藤俊次郎、新實新十郎、深谷保之助

岡崎電燈株  
式會社社長

杉浦銀藏

岡崎市籠田町  
電話五二〇番

先代杉浦銀藏氏が、我國水力電氣の創始者であり、且つ岡崎電燈の生みの親であることは、今更新しく呶々するの要がない。只維新の鴻業なつて幾何も経ざる時。未だチョン監に未練タツブリと云ふ時代に、早くも眼を世界に配して彼の文物を取り入れると共に、身はよく殖産興業の實踐躬行にいそしみ以て岡崎市民の爲め後日大なる氣を吐いた一事は、當時の新人として、特に青年の注意を促す問

題である。此偉人が衣鉢後繼の適者と狙んで貰ひ受けたのが當主の銀藏氏、流石に其慧眼は大地を打つ槌よりも正しく、爲めに、杉浦家は當主に至つて、最早貧乏搖ぎもせざる迄の基礎完成に成功したのであつた。由來事業家の後には健全なる整理家を要請すること、昔も今と變りはないが、世間動もせば、此鐵則を忘れて、先考は斯くくの進取的な人士であつたにも拘らず、當主は餘りに保守的にて、爲めに治蹟擧らずと非難するものがある。けれ共信立は子勝頼の事業好きによつて武田家を滅ぼした秀頼と同じ臣下に誤まられて豊臣家の繁昌を一朝南柯の夢として了つたものである。獨り大事業家家康の後、秀忠特に家光の非凡なる整理家生れて、徳川三百年の基礎工事を完成した等、彼此之を玩味せば事業家の後に事業家を必要と見做す世間の批評は單なる妄斷に外ならない。然るに杉浦家には前きに事業家ありて、諸方面に種子を頒布し、後に整理家出でて之を收穫するに餘念がない。何と云ふ天與の配在であらうか。

當主銀藏氏は文久二年三月、幡豆郡横須賀村に生れ、舊姓を棚木と稱せしが、明治七年杉浦家に入りて、先考を扶けつゝ共に事業に精勵した。殊に先考が生絲輸出の今日あるを豫見して、養蠶業を鼓吹したが、氏は自ら其知識を修得すると同時に、之を他に指示して、萬人に養蠶業の技術的方面を徹底せしめたものである。併し不幸にして當時の農家は斯程の好事業にさへ、手を染むるを喜ばず、舊態依然とあつた爲め、氏の折角の指導も、初めは物の要を爲さなかつた。けれ共、一度覺へた知識は



何時でも必要を感じる時に、利用の出来る要具となつたから、農家の利益に無交渉であつたとは云はれない。更に明治二十八九年頃、電氣事業の工事起るや、資金に苦しむ先考を扶けて、水源地と岡崎の間を一日數回往復し以て日常の連絡を絶たなかつたのは、同事業の進歩上に何れ位ひの力強き絆となつたかは知れないのである。然るに之れ等の功勞を一切先考に與へて、自己を低ふ持しつゝあるのは、凡輩の眞似し得られる處でない。其温厚なる態度、謙讓なる点、一つとして、推稱の價値なきものは無く、然かも自ら無教育者と、へり下る等何處迄床しき心根の把持者か、奥の知れないものがある。蓋しアレ程の人格を作るには現代人爲の倒底企及する處ではない。

岡崎電燈株式會社  
常務取締役

高石辨治

岡崎市六供町  
電話六三九番

岡崎電燈社長、杉浦氏の女房役として、今同社に一日も欠けてはならない人が高石常務である。氏は明治十五年十二月、愛媛縣宇摩郡寒川村に生れ、縣立西條中學より、第三高等學校を経て、京都帝國大學工科に入り、明治三十九年、二十四歳で卒業、疾くも工學士の學位を得たる秀才なれば、『學士様なら娘をやろうか』と云はれた大正二三年頃より一昔前の事を想像した際、別して未だ數少い青年工學士のチャキ／＼と觸れ出されては、勢ひ世間から、もてはやされざるを得ず、爲めに校門を出

る早々右から左の手際あざやかに我國水力電氣界の始祖、岡崎電燈に招聘されたのも不思議はない。固より習つた科目が電氣學、其蓋蓋を傾倒す處が技術的方面、而して身は元氣發辣たる青年技師、扱物事も斯ふ調子が揃へば厭やでも時を刻んで發展するばかり、爲めに明治四十二年には從來の資本金三万圓と云ふ合資會社を、一躍五十萬圓の株式會社に組織變へする繁昌振りを示すに至つた。併し一寸も己惚れない。斯くて氏は杉浦社長と同じく、他人の功名さへ搔つさらはんとする零圍氣中にはもまれて居ても、決して自己の手腕を吹聴する等のことなく只與へられたる職務に最善を盡し、十數年の長年月を、然かも一日の如く働いたから、衆望期せずして一致し、大正八年には遂に常務取締役に擧げられるの榮譽をから得るに至つた。斯くして今日千五十萬圓の大會社を双肩に擔ふた氏は其後劫興したる大同電力、矢作水力、東邦電力の三面重圍を物ともせず、渾身の力を集めながら我が勢力範圍に指一本染めさせない惡闘を續けて居るのは何と云ふ雄々しき振舞であらうか。勿論斯程の光輝ある會社が、新興勢力に、假りにも厭迫せられるの過程を思へば、其間に幾分云ひ分もあらうが、併し同社は財力があり餘つて創立せられたものではない。先代三元勳の事業好きが、猪突的に組織したる難事業を然かも中途にして他界置去りにした會社である故、事業其ものは固より立派でも、組織上には可成りの無理があり、且つ欠陥がある。然るに若し之を放任して、先代の意緒に従ひ飽迄猪突を續けたなれば、何うなるか。成程世間に珍らしき電氣事業なれば、間口は相當に廣がつたかも知れない。



併し此事業の絶對有利を確信したのは、未だ日が浅いだけ、ソレだけ當時の、投資家が果して期待するような興行の固めに力を注いで呉れたかは疑問とせねばならなかつた。故に斯かる空気を前提とする時は、寧ろ猪突の危険を避けて欠陥の整理、胴穴の修理を行ひつゝ、會社の合理的發展を目論むことが妥當の手段であつたと見做す可く其爲めに採つた杉浦社長及び高石常務の方針は推賞に價こそすれ異論を挿入すべき何ものもない。只知多方面の電氣會社を合併せんとする議が熟した時、氏は餘りに正直にして、其爲めに他人に搔さはれたことを一生の恨事として居るが、權謀術數の何處にも成果を収める現代に於て、正直すぎるのも亦考ふ可き問題であるか。何れにしても岡崎市を代表する好紳士として杉浦氏と併せ稱する人格は充分にある。趣味は登山と旅行、而して此方面にては高山と云ふ高山名所と云ふ名所一つとして氏の足跡のない處は無いと云はれて居る。

岡崎圖書館長

柴田顯正

岡崎市伊賀町

學者を作ると云ふよりも、立派な岡崎市民を作ることが、目的だと稱しつゝ、理、化學特に商工業に關する書籍を盛んに蒐集して一つは父兄を説き、他は當人を刺戟して、大正八年以來理想の天地を開拓す可く、獻身努力を續けて居る柴田圖書館長の目論見は、其後、圓滿に進涉して、昨今の如きは、

宣傳法とか店飾り法とか云ふような、書物の讀者が非常に増して來た。

併し、此一事を以て、氏が商人氣質の男である等と早合つ点するのは姑らく止したがよい。何故なれば、明治六年七月岡崎市に生れて、大正八年圖書館長に就任する迄の永い境遇から、實業家としての臭味を採取する何の經歷もないからである。試みに思へ。氏の生家は祖先代々神主として仕へし伊賀八幡の境内にて、現に今日も氏は之を世襲し、何の倦怠も覺へて居ない。明治二十三年東京の國學院を卒業して、金澤中學、京都一中、而して岡崎中學と教鞭を採り廻つても、担当科目が國語漢文歴史と云ふから、實業方面とは縁遠い話しであらう。然るに世を大觀する知識の豊かな爲めか、將た學究と手腕を兼ね備へる力が、天性之を享有して居る故か、市の圖書館を經營するに當つても、極めて堅實にて、何の危険も看取する處がないのである。而して、尙餘融釋々、頭髮漸く枯るゝを覺へても郷土の研究と、市史の編纂、和歌其他の道にいそしむ現情を思つたら、儒夫も起さずには居られまい。

岡崎電氣軌道株式會社  
專務取締役

須藤庄吉

岡崎市傳馬町

今でこそ岡崎電氣軌道の延線は岡崎驛と門立を結ぶ南北八哩餘の交通機關であるが併し數年前迄は單に岡崎驛から殿橋に至るホンの申譯的な軌道を有するに過ぎなかつたのである。而して此延長工事を斷行して岡崎と岡崎近村の開發に盡したものが須藤氏であることは何人も知る處にして今更説明す



るの要が無い。けれ共今尙交通機關利用の過渡期にある岡崎市に於ては如上の計畫が利益打算の我利亡者によつて到底實現の可能性を發見することが至難であつた点を見道してはならないのである。之が爲めに當初は高橋前専務との間に拮抗を續けたこともあつた。温厚なる氏の面貌に朱をまぎつゝ、口角泡を飛ばせて電車事業の純營利化に陥る不都合を鳴らした時もあつた。されど機會を誤ることによつて擴張事業に恐る可き資金を要する理由が遂に多數株主を動かして大正十三年現在の軌道布設を完成するに至つたものである。氏は斯く事に當つて果斷ではあるが又一面綿密にして輕舉妄動は絶対にしない。先代庄吉翁がヒド庄の異名で呼ばれた程蓄財の能に長じて居つたが其翁の眼中に映じて己が衣鉢を繼がせる者氏をおいて他に無しと狙み早速養子に貰ひ受けた的は流石にはずれて居なかつた。固より投機的金儲けの手腕に至つては先代の足許へもよれないが併し氏の金儲け法には無理がない明治十八年岡崎に生れて小學を終へた儘なる身なれ共よく今日の經濟的知識を吸収して何の危い氣もない處は他の學ぶ可き活資料ではなからうか。趣味に書畫の玩賞があるが果して先代の眼に此の性格迄も映じて居つたか奈何。

## 東海製菓株式會社

岡崎市外羽根  
電話園六三番

大正五年の或日今の岡崎市會議員である柴田嘉市氏其他七名が東京の製菓情態を見學す可く岡崎を

出發した。けれ共森永明治を初め肝心視察の目的として肚裡に書いた工場は各自營業上に於ける自衛の爲めに見學を許して呉れない。固より商業會議所を始めあるとあらゆる縁故を辿つた紹介狀は幾れどもなく懷中して居たが折角の之等も宛然たる反古同様一行は何する爲めの上京かと、此許狐に訪かされたる姿であつた。然るに何んの幸かフトしたことから中央製菓の視察が許されて此處で初めてビスケット製造の情態が判明したから其喜びは斜めでない。殊に柴田氏は之を岡崎に於て行はんと決意し一行に相談したが一人として乗り氣になる者がなかつたのは何した譯か。けれ共氏の意志は罕乎として抜く能はず、遂に岡崎額田の投資家を説いて大正七年現在の處に資本金十萬圓の東海製菓株式會社を創立したものである。固より創立最初は經費の多端と、設備の不完及び職工の不熟練等が相俣つて、缺損したが八年の好況時代には利益一万七千五百圓を擧げて無慮三割の配當を行つたものであつた。併し何を云つても竈一つを設備しての仕事だから、需要に對して生産の尠少は免れない。此に於て今一個の竈を据へ附けると共に他方名古屋の櫻木町に資本金三十萬圓、三分の一拂込の第二東海製菓株式會社と云ふ姉妹會社を創立して逐次手を擴げるに至つた。されど第二東海製菓は、最初より合併が、目的であつたから、親會社の一株に對して之は三株の比率條件に従ひ、大正九年十一月愈々資本金二十萬圓の東海製菓に合併せられることゝなつたのである。而して生品の優良と柴田前、山本現常務を始め、同社當面者の活躍が全國に徹底して内地は勿論臺灣、樺太、の新領土より朝鮮、滿洲に



迄販路を開拓して晝夜兼行の姿をしながら生産に従事し一方大正十二年には四十万圓に増資したから一年の産額遂に二百万圓に及び全國無數の我製菓會社中、新銳の猛者として未來を非常に囑望されるに至つた。斯くて大正十三年には宇都宮の近傍小山に分工場を設置して此にも竈一本を据へ隣接する日本製粉分工場の生品を其儘原料として生産を初めた爲め都合四本の竈より生ずるビスケットは一日量八百函一年産額三百萬圓を突破する勢を示し十四年末には一躍資本金を一百萬圓に増資して最早我製菓界五指の中に脱れない資格を具備するに至つた。固より基礎も確實であり、且つ生品も既に定評がある程の優良品なれば、他の需めに應じ切れない姿を續けることも一再でなく配當も二割以上の確證十分なれば、昨今同社の五十圓株が九十圓を往來しつゝあるとて別に怪むにも及ばないでないか積立金は六萬圓従業員基金は一萬餘圓、又山本常務の質實なる經營振りは益々冴へて九月の爭議も無事解決したれば今後の活躍は次第に底力を加へるであらう、現在の重役は左の通り。

取締役社長 千賀千太郎、 常務取締役 山本彌吉

取締役 柴田嘉市、森七三郎、千賀右次郎、新實新十郎、早川久右工門、郡築吉重、

畔柳登市

監査役 菅野鉦治、近藤重三郎、畔柳昇三

## 軍醫監 前 川 榮

岡崎市能見  
電話四三四番

醫は仁術でも貧民救済の無料施術等をするのではない。病氣や傷を治療せしめる醫術其ものが人に對して仁的であるから此稱が生じて來たのである。故に藥九層倍を暴らうと、貧者の診察を後廻しにしようとする事は枝葉末節の問題にて爲めに仁術を毀ける何の障害にもならない……てな意見を前川氏から拜聽した筆者は『然らば命の糧を賣る米屋等は差向き醫者以上の仁業です』と訊ねることを忘れて了つた。けれ共之だけ理屈が云へれば遺憾はない。併し遺憾はなく共此筆法では社會に出ても横車が押せないから困つて了ふ。ソんな事は他人の疝氣を俟つ迄も無く氏自ら先刻御承知にて明治十七年一般社會とは毛色の變つた軍隊に身を投じ、此にて軍醫から軍醫監に至る迄二十七年間を、游泳しつゝ明治四十四年豫備役編入となつた經歷に徴しても判明出来る。氏は文久元年八月兵庫縣佐用郡平福村に生れ、明治五年十二才の時叔父前川見瑞氏の養子となつて、養父の醫業に精勵し、後姫路の山本某にも師事したが、慧眼なる氏は漢法醫の淵落あるを見越して、明治十年九州に至り小倉病院に於て専ら泰西の醫術を研究し、新進醫師の得意を滿面に溢らせつゝ、明治十五年歸郷此にて姑らく患者に接せしも西洋醫術鼓吹の必要を痛感して直に上京し刀圭上の機關紙を發行して大に劃策せしが事志と相違して何事も成らずよつて軍醫を志望するに至つた者である。軍醫としては渡臺すること



二回、又日清日露の兩役にも參加し、傷病兵の治療に従事し功名二つながら擧つたから漸次累進して明治四十二年軍醫監となるを得た。趣味は多方面なるも上達せるものは一つもない目下開業して一般患者に接して居るが往診をしないと云ふ筆法故にお商人醫師程患者の吸収は出来れざごこの横着に又氏の權威があるのでなからうか。目下茶臼山の頂上に悠々追らざる閑日月を送つて居る

岡崎銀行 常務取締役 深見太郎右衛門 岡崎市康生町

目下岡崎銀行の新進常務として、同行の堅實なる營業方針を踏襲しつゝ、高等樞議に參與して劃策大に力める深見氏は貴公子にもあらまほしい風彩と、圓滿なる性格の兼備に行員一統から可成り大なる尊崇を拂はれて居る。氏は明治二十四年一月碧海郡矢作町に生れ、大正五年神戸の高等商業學校を卒業した秀才なるが、若い時には困難を金でも出して買ふ要ありと眺めたものか。卒業と同時に名古屋の明治銀行に入して激しき執務に忙殺の辛苦を味ひ、此にて採まれる事六ヶ年銀行業務の大体を呑み込んだ大正十年に岡崎銀行の常務として招聘された者である。斯くて着任後五年、幸にして岡崎地方の金融界にも貢獻する傍々石井定七の如き曲者に放漫的貸出をするようなお里銀行の眞似もせず、かと稱して競争銀行に隙を狙はれるような固陋一偏の態度にも出でず、力を専ら預金者の吸収と株主の最少限度なる配當に満足を買ふ程度の貸出し及び儲け方に止めて堅實に無事同行の圓滿なる發達を

計つて居るのは氏の性格にして始めて出来る成果と考へる。趣味は登山、ソレも學生時代の事にて、今では只繪により書によりて日本アルプスは固より遠くカナデアンロツキー踏破の壯舉を味ひつゝ、獨り常務室の眞中に涼しき顔をして居るが斯んな早老を今日から續けるに於ては氏等の創設に係る神戸高商の登山俱樂部から不日は必ず抗議が來るに相違ない。

岡崎電燈株式會社 營業部 部長 巴

灌 岡崎市六供町



巴 灌

士族の商賣は失敗を生み易いと云ふ。さすれば商人の官吏も成功はし難い筈なれ共、何の皮肉か巴氏は此二つの難問を奇麗に解決して、今岡電營業部長たる重要な椅子を占めながら同社の營業上に關する事務一切を、手際よく捌いて居るのは一種の痛快味を覺へて來る。固より氏は商家の生ひ立ちなれば、顧客に接しても、對手をそらさないだけの呼吸は呑み込んで居るだらう。けれ共明治十五年三月岡崎に生れて、最初巡查を志願し、教



習所入りを行つたが、業を終へて警察官となつても、一向に危つ氣はなかつた。嘗に危つ氣が無ければかりか、日夜勉勵の果て年毎地歩を固めて、大正十一年には、愛知縣の刑事課長と云ふ下豪い席を占めたのは、商人の官吏たる前途に障害の無いことを示したものであつて、努力は何ものでも獲得の出来る事を雄辯に物語つたものではなからうか。然るに同十三年には、前きの行き方を反對に求めて官吏から岡電入りを行つた。併し此處でも會社の主義方針を遵守して需要者と氣持ちよき接衝を常に續けて居るのである蓋し氏は何處に於ても執務其ものに一種の趣味を覺へると云ふ程熱心に研賛に携るから何日でも此結果を生むに至るものと見做さる可く、同時に如上の難問を平易に解決した理も、自ら判明する。然かも性格容貌共に優しく、爲めに對外接衝に従ふものとして此上の適材はないように思はれる。若し前身が刑事課長だとして兇漢の五六名も手玉にとると思ふものがあればソは大なる間違であることをついでに附加して置かう。

藥劑師  
岡崎市會議員

小田 織治

岡崎市本町  
電話八〇八番

岡崎市會議員中での年少者、諧諧屋の新鋭、白面の美男子、雄辯家、等々々と頭の天邊から足の切尖迄、之は又特徴だらけで出來て居る氏が、此上更に特徴を鮮明にす可く袋と瓶以外に何の變化も無

い藥屋、藥劑師業を初めたのは、大なる皮肉と云はねばならぬ。氏は明治二十五年二月、菊池寛の火華で有名な、寶飯郡蒲郡町に生れ、同四十二年四月名古屋藥學校を卒業すると同時に、藥劑師試験に及第し、姑らく故郷に雌伏して居たが、若き身ぞらで、蒲郡に何時迄煙ばるも始まらないと、年齢相應な謀叛氣を出して、大正四年二月、岡崎市へ罷り出で現在の本町で如上の藥屋及び藥劑師業を開始した者である。併し根が無邪氣にて、熱心、且つ相當魅力にも富んで居るから、商賣繁榮家運向上と來たのは當然の歸結にて、其間不思議とす可き何ものもない。然かも轉居十年に及ばざる時、早くも人望を集めて、本町衛生組合長、岡崎市藥業組合長、岡崎市聯合衛生會理事、愛知花柳病豫防協會岡崎支部幹事と云つたような、盛り澤山の名譽職にも据へられ居るのは年少徳望家たるの性情、素質を立証したもので無くて何であらう。殊に昨午市會議員選舉に當選して、少壯議員たるの本領を發揮し又幾何も經ざる間に參事會員に選ばれて、目下氏の理想たる岡崎市の社會文化に並行する件及び、都市と保健の携行を腦裡に畫きつゝ、努力を續けて居るのは目論見の大きいだけ氣力も要する話である、何れにしても同市に於て未だ多き人士の一人であることは疑ふ餘地がない。

履物販賣業  
岡崎市會議員

村田 武一

岡崎市籠田町

氏は明治十五年九月額田郡岩津村に生れ、岡崎町立瑞念寺塾に通ふこと數年、十六才の時業を卒へ



て、先代の創業せる下駄商に従事した。生來小才の利く男だけに、商人としてもよく機会を捉へて、仕入、販賣二つの善處に、調和宜敷きを制した爲め、家連日を追ふて隆盛に赴き、今では岡崎市内の同業者中、十指に數へらる可き地位を確保して居る。他方、人となりも可成り圓熟したれば、人々の信望も次第に加つて、其結果同業組合長だとか、國勢調査員等に選ばれたことも數年前にあつた。而して昨年には遂に市會議員に當選し、目下市參事會員、下水家屋調査委員等に推されて居るが、眼先の見へるのと、眞目くしく立廻る爲め、與へられたる任務を、仕遂げないと云ふことはない。嘗て愛知、静岡兩縣の下駄同業者が、勞資協調其他の研究討議を目的に、愛靜會を組織したが、毎年一回開催する大會が、兎角空嘘に終るを眺めて、大正十二年會場を岡崎市に定めた時、氏は此原因を以て協議會場と、宴會場とを同一場所にする爲めとなし、先づ之を區分して、協議會場には市長其他の名士を臨席せしめ會員を厭やでも、眞面目たらざるを得ないようにしたから、此策略は見事に奏功して、全く劃時代的成果を收めたのは、氏の才智を物語る一挿話であろう。最近商賣の方は之を擧げて夫人委せにして居る模様だが、店頭に端座する夫人の手並みは、或は氏以上に冴へて居るかも知れないとの評がある。酒はよく飲むが乱れない處に價値がある等養子を連想しての批評ではない。

岡崎殖産株式会社  
常務取締役

## 手 嶋 鋏 司

岡崎市八帖町  
電話六五番



主義者に云はずと資産家の息子等は朝から晩迄のんびんだらりと遊んで暮すのが日課の様にて偶々身でも動かそう者ならソレは物見遊山かお茶家通ひに決めて了まつて居る。若し此筆法で行かうものなら手島氏等も先代鋏司氏から承繼せし巨萬の富を擁して日夜袖手横臥するかさらずば底抜けどんちやんの遊蕩三昧に終るのが落ちであるが事實は然らずして主義者の觀察違ひか氏自身例外を作つたのか仕事に携つてはプロ以上の精勵振りを

發揮して、下手な觀相者等には之が百萬長者の息子かと見別に迷はしめる。事程左様にブル氣分の除脱されたる氏が明治二十三年岡崎に生れて太正三年早稻田大學理工科電氣部を卒業し岡崎電氣會社の技師となつてもプロに馴染深き作業服を身から離すことなく、三年油で揚げたような服装をしつゝ十年此社に勤務した者であつた。之では階級鬭争を敢行しようにも表面的には手懸りが無い。されば部



下中心服者も尠少でなく昨年十二月岡崎殖産の常務になつても他の氣受けは非常によい。目下東海製菓、三河製粉、岡崎青物市場、三陽農林燧洋電氣各株式會社の監査役、岡崎土地の取締役と云ふ盛り澤山の肩書があるが氏は之を親の光りが七光と稱して居るものゝ十年油煙に塗みれて活動した氏と卒業早々重役のお坊ちやん育ちと混同するものはよもあるまい。昨年十月市會議員に當選し市參事會員岡崎都市計劃委員等に擧げられて未來を非常に囑望されて居る。

### 矢作町長 本多吉郎

碧海郡矢作町

由來早大の教授中には變り者が非常に多い。本多淺次郎氏も其一人にして十數年來『北朝正統論』を固持して挺でも動かす果ては之を一葉の博士論文に綴りて毎年同一のものを東大に提出し何れが根負けするかの見極めをつけんとした事があつた。併し西洋史には造稽深くして氏と四つに組める史家は餘り太してあるまいが。此人を叔父に持つ程の吉郎氏だもの何か特徴が無くして何うして、又よく出直すことが出来るであらう。果して岡崎米穀取引所の理事としても問題の多い仲買人を指頭一本で繰つり何の不満も叫ばしめなかつた手の冴へは下手な協調會何々幹部よりも遙に凄いものである。コンな經緯ものに關して解決の手腕があるばかりでは無く、矢作市場株式會社の常務をやつても、碧海

倉庫の取締役としても、將た又矢作信用購買組合長としても一つとして難がない。曾に無難なるばかりか成績を擧げることにも相當の自信があり別して信用組合等の如きは創立せられて未だ間が無きに拘らず疾くも預金八万圓に達して居ると云ふから氣の弱い男等は卒倒しよう。斯くて凡てがコンな調子だから、矢作町民として何日迄も之を利用せずに只見遁して置くような拙劣を採らうか。果然同町の町長改選期に當り町民は一致團結氏に白羽の矢を射たのも固より當然の話である。けれ共最初の程こそ、首を横に振つて一向氣乗りもありさそうになかつたが八方から拜み倒されては根負けもする。而して遂に町長となる可く承諾しはしたものの、何をやらせても普通以上に仕て退ける氏のことなれば之とてお茶の子程にも眺めては居ないであらう。尙氏の叔父に東北大學の教授理學博士本多光太郎氏のあることを序でに附け加へて置こう。

### 岡崎市立三島小學校長 小幡傳八

岡崎市材木町

今を去ること七年前大正八年の眞夏に全國一帯に亘つて蜂起したる米騒動は獨り福岡町だけを除外するよな緩慢さを示しては居なかつた。當時暴民は太田町長を袋叩きとせし餘勢を以て町内に手當り次第暴れ散かしたが之には流石の警官隊も手の施しようがない、然るに福岡小學校長小幡氏の一言



はよく此狂つた暴民を壓へて今迄の修羅場は茲に一變して潮の引いた跡の如き静浄さを保つたものである。以て其徳望に對する一端は知られるが教育者としての氏も其手腕は凡ならずして今日迄擧げられたる功績は又枚擧するに暇がない。取り別け額田郡下山村小學校長時代に村内の有力者と協力して郷土繁榮の攻究機關郷榮會を組織したことや、處女會、青年會、及び敬老會等を組織して、村内に良風習を布殖した酬ひにより明治四十五年時の縣知事に表彰せられて銀時計を贈られたこと等は其重要な一つである。又大正十一年現在の三島小學校長となつても夜間授業の農業補習教育を晝間教授の乙種農學校に改制して農村のヨリ善き向上に資して居る等も亦其一例に外ならない。蓋し岡崎市民中七百廿五戸が農家であり且つ又三千餘人の農業兼營者ある中に農業教育を無視して只中學商業計りの設置でもあるまいと見た結果であらうが、此の着眼點に對しては誰れしも敬服せざるはないであらう。第一期第二師範の卒業生、小學教員として、又校長として氏を尊崇するものは尠少でない模様である。

岡崎市立連  
尺小學校長 **河合松藏** 岡崎市雨町

明治三十四年のこと、氏が渥美郡田原町の小學校に奉職せる時、町長其他七十名の會員を集めて、

冷水養生同志會を組織し、毎朝雪、が降らうが、火が降らうが、冷水を浴びる一事だけは、之を欠かさない申合せを行つたものである。然るに同年某日會員と富士登山を試み、八合目で寢た朝、例によつて冷水浴を試みんとしたが、然かも肝心の水がない。折角今日迄連續し來つたものを、茲に中斷せねばならないかと思へば泣くにも泣かれない氣持ちがする。斯くて浮ばない、面持ちを續けつゝ一滴の水でも無いかと邊りを物色すれば、其處には千古の雪が、年々訪づるる登山客を待ち設けるように端座するではないか。氏の顔は見る間に晴れた。蓋し冷水浴の中斷を免れた喜びと、一生の中何度かは味はへない、千年の雪を浴びる痛快を覺へた爲めとである。こと程左様に氏の冷水浴は有名であり且つ廿餘年の箔をくつ着けた光輝ある歴史が存在するから豪氣な話と云はねばならない。氏は明治七年十二月渥美郡伊良湖岬村に生れ、同三十二年名古屋師範を出でて田原尋常高等小學校に教鞭をとり三十六年同校の校長に榮進して、成章館長を兼ね、四十一年田原町立技藝專修學校の創立を見れば之の校長ともなつて四十二年現在の連尺小學校長に進んだものである。而して赴任と同時に生徒の体育を重をんじ火燧に臥寢する等の風習を破つて銳意保健の道にいそしんだ爲め、動ともせば四季の自然力に脅威され勝ちであつた兒童を、却て鬼の子の如き頑強者とならしめたのは、記録す可き大事蹟であらう。性温厚にして名校長たる名を由來何處に行つても馳せて居る。



縣立岡崎  
病院院長 河村健吾 岡崎市梅園町

岡崎市内のサラリーマン中、第一の俸給取り、メスの使ひ分けも手に入つたもの、搦て加ふるに美男で應揚で男らしく、且つ社交も下手ではないと觸れ出されては、一目でもよい河村氏の風貌に接し度い等云ふ我儘ものが、無理に病氣でも作つて病院通ひを始めるかも知れない。ソレ程に氏は凡ての方面に長所を有するものであるか、併し明治十年十二月、佐賀縣の唐津に生れた九州男兒の吞氣が今も尙附隨して、自力開業と云ふ處へは一向に運んで呉れない。けれ共綿密なる研究と、熱心なる態度及び其冴へたる腕前は、縣立病院長としての名を恥かしめず、明治四十年に同院へ赴任してから二十年に及ぶ永き間、氏の爲めに救はれたる難病者は決して尠少ではないのである。故に此功勞に對しては、鼠の尻尾などを研究題材として、博士で御座い等とコケ脅しを並べる濫作竹庵等は正に土下座の禮讃を奉らねばならない。氏は明治三十七年、日露戦争に油の乗りかゝつた當時、東京醫科大學を卒業して、直に同大學の教授近藤博士の研究室であつた近藤外科醫局に研究生として、入學しはしたもので、直に兵役に徴集せられて、二等軍醫の青年醫學士たる腕を振ひつゝ、戦場の後方勤務に服したものであつた。されど其後戦争も豫定通りの筋書を経て日本側の勝利となり、氏も再び如上の醫局に研究を続ける身となつたが、四十年岡崎病院の、招聘に應じて退局し、以て今日に至つたと、云ふ

のがその略歴である。而して趣味は多方面なるも、只間口ばかりが廣くして一向に奥行がない輩とは自から其の選を異にして居る。施術上に於ても亦大手術によつて治癒の成果を擧げた時より、小手術でも理想通りに病の恢復を進せしめた際が、どれだけ愉快を禁じ得難いか知れぬと云ふから所謂氏の趣味なるものも、之によつて其内容を窺知することが容易に出来る。

岡崎病院  
副院長 緒方里見 岡崎市梅園町  
電話二六四番

河村院長が關羽なれば、緒方副院長は張飛と云つた面構へ、而して其眉宇には九州男兒の氣が躍動して居るから氣持ちがよい。氏は明治十八年十二月、大分縣南海邊郡切畑村に生れ、明治四十三年十月、東京醫科大學を卒業した醫學士にて、卒業と同時に東京神田泉橋の三井慈善病院に入り、新進學士の匙加減宜敷く相當に名聲を博したものである。而して此處に勤務すること約二年、大正二年の一月に岡崎病院へ招聘されて、内科を担当し、以て今日に經過して居るが、十餘年の永きを閱みする其間、常に人事を盡して、後天命に委ぬとの決心を固く把持する爲め研究心は燃ゆるが如く、如何なる輕微の病人に接しても、其診察を疎そかにするようなことはない。さればこそ岡崎病院が、内外科共、市内の最大權威として、水年窄手たる地歩を占めて居る理も知られるであらう。性快活にして



温情味に富み、假令張飛の如き面構へても、笑へば小兒も尙懐かしみを覺へて来る程心に邪心の無いのが凡てによい印象を與へて居る。只河村院長の年齢を少々失敬して、歳より大分老いて見へるのが痛々しいとも云へるが、ソんな事を疝氣に病むのは凡輩の御折介にて氏には何の痛痒も感じて居ないらしい。趣味は尺八の吹奏、乙な風流者とは思はないか。

額田郡長 吉田賢男 岡崎市六供町

職業に貴賤の差別等つけては、千年たつても社會問題を解決することが出来ない。又上級、下級の表面的事相を以て自己を律し、他人を律することは、人間を胃潰すの甚だしきものであるに拘らず何ふ思ふてか吉田郡長は、同輩が既に知事になつて居るにも拘らず、自己は郡長の職に依然として据はる過程を恥ぢて、時に因循姑息の聲を、表明するのは、意氣地のない話と云はねばならぬ。試みに思へ、内閣更迭毎に、スゲられたり切られたり、首の曲藝を打つ地方長官の一部が人としても、國家としても、何れ程の交渉があるかを。徒に政黨の走狗となる以外何等用なき之等と現在の位置を忠實に維持して郡治に善處する郡長と、其差の餘りに相違するは、三才の兒童と雖も尙知る處てなからうか。若し階級的進行の遅々を恥ぢるのであれば、尙一段の努力を要す可く、若し自己の是認する處に誤りも無く、然かも之に生きんとする決意が従前からあるなれば、人事を盡して、天命を待つがよい

本年四十二才島根縣隱岐の産、家貧にして就學の資途無かりしが村人は其才をおしみて共同出資の方法により氏を、東都に遊學せしめて、大に其將來に望みを囑したものである。而して大正四年東大法科を卒業すると共に文官試験にも當第し、姑らく朝鮮總督府に勤務し、後本縣に來任して、十二年現在、地位を占めた前途ある士なるも、熱心なる餘り往々誤解を招くの損失がある。然しこうした熱心を認められて、引上げられるのも亦近き將來にあらう。

岡崎市長 本多敏樹 岡崎市康生町 電話六六二番

華族の次男坊と云へば無能の総稱だが、併し物事に例外のあることは筆者の言を俟つて知らる可きでない。本多市長は岡崎舊藩主の叔父、先代子爵の令弟であつてもフロックに下駄履き位ひの田紳振りは平氣でやつて退ける。駒込農科大學を卒業して北海道廳に勤務する時好きなお茶家通ひにも此服裝だから平民末葉の藝者衆に持てはやされたのも無理ではない。されば配遇者を貴族階級に求めるような錯誤等も綺麗サツパリと打ちやつて了ひ最初の夫人を北海道藝者から拉致して來つたも、念は這入るが判らない話では全くない。けれど其爲めに親族知人から物議が起つたが、本人は最初から馬耳東風、寄りつかねばソレ迄でないかと澄ましたものである。斯くて大正七年岡崎市長に迎へられたが仕事は一切女房役の小瀧助役委せ、只大綱をグツと握つて小せつかないから役所内でも氣受けのよい



事夥しい。併し重大問題が起つて紛糾を重ねても、氏の貴族らしい又平民らしい双者折衷の顔さへ出せば直に解決するから無能によるお折介避けでもなからうが、呑氣な事は人一倍何人にも遜色する處はないのである。親の光は七光り。とは云へ鬼本多の血潮流れる氏の度量は人一倍大きくて既に生れながらにして人の長たる器を備へて居るのか知ら……明治七年二月の生れ。醉市長の異名を穢すことなくお茶家通ひを續て居るのは昔と何等變らない特に斗酒尙辞せざる酒豪振りの發揮で祖先の性癖を忠實に踏襲して居る邊りは鷹の子が鳶で無いことを示して餘りがある。囲碁を好むも金箔つきのザル基なれば他のお世辞負けが非ざる限り勝つた例はない……等一寸酷評に過すざるか。

## 岡崎市助役 小瀧喜七郎

岡崎市六供町  
電話八二八番

一兵卒から少尉になることは忍耐と小器用に立廻る條件さへ持つて居れば誰にも出来る容易の問題であろう。されば小瀧氏に此經歷があつたとして何の光も添へないが、併し氏には一役場の吏員から市の助役になつた非凡の光が躍如として輝く点に雞郡中の一鶴と万人より許されて居るのである。さらば學等もあろう筈無く、明治五年岡崎の一農家に生れて大根野菜の收穫に此許姑らく年中行事を續けて居たのが、徴兵適齡の結果偶々入營して、二等卒から一等卒上等兵等々と忠實に各階梯を踏みつゝ、

少尉に任官して軍國主義の日本に肩で風切る伊達男、子女共同の憧憬となつて居た。併し士官學校出の若輩と背丈けの高さを競ふのも大人氣ない話結局退營して明治四十一年九月一日岡崎町役場に入つたが役場入をした後の氏が軍隊生活によつて得たる紋切型の頭を一掃して各課を一巡する迄綿蜜と冷静と熱誠を吐露しつ執務上に何の滯滞も來たさなかつたのは本來の非凡者なると同時に他面不斷の努力によつて然らしめた處であらう。然らば大正三年九月遂に助役に選ばれ、五年九月市制の施行後も尙周望を担つて其位置を確保し今日に至る三期の間市の仕事一切を身に引受けつゝ、歴代市長に後顧の憂ひを絶たしめたのも必然の數であらう。殊に其キビくした手の冴へは、一面軍隊生活によりて得た果斷と相俟つて水際立つた仕事に大向ひを唸らす、又他面市議員中に敵を作ること少少なからざれど、扱て助役改選の期に至れば常に満場一致再選三選と來るから凄い話と云ばねばならぬ。趣味はなし只市政の研究に没頭するのが助役の本分であり且つ道樂であると云ふから助役としては全くの掘出しものか。

## 株式會社 岡崎銀行

岡崎市傳馬町  
電話二〇一、五一〇番

西三市五郡の金融界に貢献する銀行は、現在其數尠少ではないが、其本據を岡崎におきて、遠く



明治二十三年より今日迄四十一年に近き年月を、如上の區域に留めて、本來の使命を盡すものは岡崎銀行において、他に例は求め難い。固よりヨリ資金の豊なる大銀行の支店は澤山にある。けれ共廣く放傘形に、据へつけた之等の支店に與へられし資力は、前者に比して果して何れだけの優秀さを持つてあろうか。敢て元就の故事を引例する迄もなくヨリ小に固めし力は、之に反するものより、遙に堅實である位ひは、何人にも先刻知悉する處にて、岡銀の信用が、今日三河一帯に認められる所以も此處にある。然も終始一貫、堅實を旨とするも固陋に流れず、双者の中庸を擱んでよく土地固有の慣習を辯へ以て商工業者の利便を計りつゝ、其發展を促した功積と恩恵は筆紙に盡せざる者がある。而して同行の創立は既に述べたる如く、明治二十三年の四月のことであるが、當時岡崎の財閥中に其人ありと知られたる加藤賢治郎、小野權右衛門、千賀傳三郎、深田三太夫、元松惣一郎の諸氏が、土地の發展と商工業の關係を了得し、同時に後者の繁榮を促進せしむる援助者として、銀行業の必要を痛感し、遂に之が發起人となつて資本金五万圓の株式會社を作つたのが觸濫であつた。されど當時の幼稚なる人々には之を利用する方法を知らず、只僅に發起人を信頼して遊金の貯金位ひが行はれしものであつたが、日清戦争に凱歌を揚げて、一時に流れ込みし二億テールの償金は、直に事業熱の勃興を來して、漸く岡銀も世の一般から認められ、順次多忙を極めるに至つた。茲に於て二十九年資本金を十萬圓に増加し、尙不足を感ずるより翌三十年九月には一躍三十萬圓に増資して、地方商工業の發展に資

したものである。されど他銀行の出現すると、經營擴張の必要來に促されて、四十五年には資本金を七十萬圓とし、更に歐洲大戰の好況に連れて大正九年五月には遂に之を參百萬圓とするに至つた斯くて名實共に地方の一大銀行と許されて今日では總會を重ぬる事既に七十一回、財界の變動に際會しても貧乏搖ぎ一つしない鞏固さを續けて居るのは由來超然的信用を占有して居る賜であらう。目下西三は固より東三にも跨りて、産業の發展向上に貢献して居るが、大正十四年一月三十日現在の總預金千五十六萬圓、總貸出千二十萬圓の數を示して、地方金融界の眞鎮たる名を恥かして居ない。殊に諸積立金の百五萬九千圓は内容の益々確實なる證據として他に誇るに足るが此繁榮を獲得する現在の重役と、支店派出所の所在地を上げれば左の通り。

## 重役

頭取 深田三太夫、常務 深見太郎右衛門、同 近藤哲三郎

取締役 深田政次郎、

監査役 深谷保之助、同 新實新十郎、近藤俊次郎、

## 支店派出所

岡崎市内連尺、井田、兩町、能見、

市外 岩津、羽根、福崎、幸田、安城、矢作、西尾、一色、吉田、横須賀、米津、



中畑、平阪、寺津、新川、大濱、蒲郡、形原、三谷、足助、舉母、

日清紡績  
株式會社 岡崎工場 額田郡岡崎村  
電話七二一番

歐洲大戰中は會社さへ作れば、お金が自然に湧いたものである。故に此風潮に帆を揚げて黄金の海を走りさへせば、昨日の閑枯鳥も姿を消して、今日は舞樂の鳳凰に見舞はれると、人も信じ、吾れも疑はずして、出來た泡沫會社は尠少でない。けれ共突如襲ふた無政府風は、さしも跨つた株式船を、もの見事に巻き上げて、骨組さへも判らぬよう、木つ葉微塵として了つた。之も其一つ、岡崎財界の歴々連が、柳の下に鱈は何時も住むものとして、デツチ上げたのが資本金三百萬圓の岡崎紡績會社時は大正八年の七月と云ふ黄金湧出の全盛期なれば、先途に魔の手が待ち構へようとは知る由もない煉瓦一つが黄金の一つ。日々積み重ねらるる工事の進歩を眺めては毎日人知れず北史笑んだものである。されど如上の無政府風は此處ばかりを見通さなかつた。未だ工場の完成せざる時、機械器具の据へ付けを終らない際、テも見事に煽ぎ倒されて、思案の結果が日清紡績へ買収の相談。當時拂込は二十五圓であつたが、日清紡は三十五圓の拂込故、後十圓の拂込みをさせて、岡紡株三に對し日清株一と云ふに條件成つて、九年十一月遂に手打を了したものである。斯くて岡紡の看板は取除けられ、代る

に日清紡岡崎工場の門札殿しく揚げられて直に殘餘の工事を進めるに至つた。而して大正十年一月第一工場の建築なりて二万一千錘の据つけも終りたれば直に運轉を開始して、幸哉暗から暗にも葬られず岡崎一名物の同工場は其基礎を固めたのである。之と同時に日清紡本支店を通じての人物、西村傳八氏は工場長として赴任し、未だ完成せざる同工場を掌中に握つて、常に善處したから、何の波瀾も無く豫定以上の成績を収めて遂に十二年第二工場の起工をする迄に進捗した。而して十一月之も完成したれば、錘機三万、織機五百臺を据へ付け、更に十四年七月第三期の擴張工事を始めて同年末迄に錘機五萬三千織機千臺に増設する事となつたから、同工場今後の活躍は實に目覺しき事となつて來た。現在の製品は紡績中の大及び中手、織物は細布にて、共に東京、名古屋、大阪の營業所を経て、内外に頒布するが、前者は特に濱松に販賣せられて居る。又後者は主として輸出ものなれば、ボンベイ、カルタツタ、カラナ、上海、香港、尙上海方面の商人の手によつて南洋方面に出されて居る。原料は東京營業所より移入され印度、亞米利加、支那産の綿花を併せ使用して居るようだが、一ケ年の生産高は、現在紡績にて百三十萬、細布にて七千餘柵、第三期工場の完成せし今後は後者に於て一萬五千柵の生産が優に出来る筈である。従業員は約二千、勞資間の爭議等は一度として起つたことがない。因に日清紡績會社は明治四十二年の創立、資本金一千萬圓にて毎年の配當は一割六分、我國紡績界の重鎮たる一つである。而して岡崎工場をして今日にあらしめた功勞者の重なるものは左の通り



工場長 西村傳八、第一工務主任 水野堅吾、第二工務主任 川田常三郎、人事課長 長沼清松  
事務課長 山田正世の諸氏

日清紡岡崎工場長 西村傳八 岡崎市明大寺町

貧乏人の小伴は生れながらにして富者を憎む者に極めて了ふ。と同時に富者も貧者を特種人扱ひにすること、對岸の人種的癖見者と異らない。處が西村氏は群馬縣境在大根村の素封家に生れた身にも拘らず、此種の色彩が僅か程も無いのは、ソレ許りにして既に非凡者たる資格があるが、更に手腕と人格とが、日清紡本支店を通じて、並ぶもの無きに於いては、氏の人となりも、容易に窺知する事が出来るであらう。さればこそ岡崎紡績が半途に倒れてより日清紡に買収された後仕末の難事を双肩に担つて、何の故障もなく操業を開始し、而して大正九年より現在に至る七年間を、専ら基礎の確立と、業績の發揚に致すことが得られたのである。併し決して之を誇りとする如き口吻を不用意の間にも用ひない。故に全員二千一人一人として心服せざるはなく、何れも氏の爲めなれば水火さへ尙辭せざる決意を以て従業する爲め能率も支工場中優位の地歩を占め、未だ嘗て怠ましき紛糾等は起つたことがない。されば本社も痛く之に矚目して、未來を非常に頼もしがつて居る。本年四十四才明治四十

二年の帝大法科出身にて、卒業と共に上毛毛斯に入社し、庶務課長から支配人となつて、技能の程を示して居たが、大正六年日清紡に招聘されて、本社工場の事務主任となり、又營業部調査係りとして常に尖端を表して居つた。後青島工場の營業所長として赴任せしが大正九年岡崎工場成るに及んで此處の工場長となり今日に及んだものである。

株式會社 三龍社 岡崎市六名町 電話 三、三〇〇、三〇〇番

西三切つての大製糸會社として、又蠶種中の優良品黃石丸、三龍又の製作所として、全國に其名を賞へられる三龍社は、沿革に於ても相當古い歴史をもつて居る。而して同社は田口百三翁の創始に係つた合資會社三龍社の後身であるが創立は明治卅年の六月日清戦争後の好況時代に横濱の茂木中津の勝野兩商店及び名古屋の瀧定助氏と、田口氏の出資金六万圓で練業を開始し専ら對米輸出品の製出を目的としたものであつた。當時は百數十釜を設置して、製産に従つたものなれば、出來高に於いても知れたものにて、地方の一小會社と云ふに過ぎず、其存在さへ認められて居なかつたが、代表社員の田口百三氏が寢食を忘れての製作改良と、優良蠶種の發見とによつて幾何も無く名を全國的に馳せるに至つた。即ち黃石丸と三龍又とがソレにて、今日こそ差して珍らしきものでない交配種であるが、當



時は此発見が我國の養蠶界に、一大革命を齎らしたものである。爾來苦闘と惡戦とを交々重ねて、次第に内容の充實を計り、釜數の増加に伴つて生ずる多量の生品は、實資の優良と相俟つて取引を申し出る間屋も尠少ではない模様であつた。けれ共決して綱を緩める如きことを行はず、銳意堅實を旨として投機的謀叛氣等は夢にも起さず、終始一貫方針を變へなかつたから、同社の前途には何の危険さへ挿入するの餘地なき迄に安泰を保證せられたのである。然るに大正九年、茂木商店の破綻によつて可成りの穴を明ける不慮の災害を被つたが、流石に日常の行動を十分鎮重に續けた關係上、同社は爲めに尻尾を出すような不体裁も無く、内心こそ苦しくあつたれ、よく之に堪へて、全員一致復舊に力めたから、外部に差したる影響も與へなかつた。併し事業の發展と、基礎の確立に従事せんと欲せんか、合資組織の欠陥は日常に生じて仕方が無い。此に於て十二年五月遂に資本金二百萬圓の株式會社と改め、以て將來に善處せんとするに至つたが、傳統的堅實は決して之を捨てず搗てて加ふるに頭腦の明折な田口東一氏を常務に据へて、よく業績の發達に盡したから、昨今メキ／＼繁昌して、現在設置する二千釜より練り出す産額は實に六百萬圓を突破する情態となつたのである。尙同社には製糸部以外にサナギを原料として油と肥料を製出する精練部があり、又例の黃石丸、三龍又を作る蠶種製造所を設けて十五萬枚の蠶卵紙を造出し、更に養蠶部及び、養蠶教師を養成する技術所迄設けて既に千人の卒業者を出した等、蠶業界にも貢獻する處は尠少でない。更に支工場を針崎と龜崎に置く以外多

數分工場を設置して、之等が茲に本社之恩恵に浴しつゝ、活動する様は他の眼にもいじらしき處がある。されど配當は五朱に過ぎず、積立金も日尙淺き爲めに尠少ではあるが、將來のあることは敢て囁々する迄の要はないと思はれる。因に同社の重役を示せば左の通り。

社長 田口百三、常務 田口東一

取締役 河合音平、加藤友次郎、

監査役 杉浦銀藏、鈴木亮介

相談役 瀧定助、田中新七、千賀千太郎、

三龍社長 田口百三 岡崎市六名町  
電話五七〇番

三龍社と云へば製糸を連想する程、全國的に名を成して居るが、其社長田口氏が、此處迄に漕ぎつけた奮闘振りや青年の血を踊らせずに置かないものがある。氏は明治元年岐阜縣東濃中津の勝野家に生れ、幼にして田口家を樹つ可く分家をしたが、勝野家は勝野商店の名によつて生糸業を營む爲め、若年にして疾くも之が呼吸を會得し、明治二十九年獨立斯業に従事せんと養蠶地として將來ある岡崎に居を移した。併し居を移すと云ふよりも裸一貫で流れて來たと云ふ方が或は當を得て居るかも知れ



ない程に、身邊は豊かでなかつたのである。けれ共頭腦に秘める製糸術と、鉄の如き意志は、來岡と共に従横無盡の活躍を續けて三十年、茂木、勝野、瀧定助氏等の出資を求め此に合資會社三龍社を創立して、製糸業を開始するに至つた。當時氏の活動は目醒ましきものにて、夜間床中にあつても尙思ひ浮べることあれば、布団を蹴つて起ち直に仕事に携つたものである。同時に蠶種の製造から、養蠶に至る迄の研究にも努力して、交配による黃石丸を發見したが其爲めに我養蠶界に一大革命を齎してどれ程の利益を興へたか知られないものがある。性無口なれ共大膽且つ全身事業其もの、如き觀あるも、決して利己的打算にのみ走らず、他の難事を救ふに私財を投じたことも尠少でない結果として氏の恩恵に今も泣く人は尠くない。目下大日本蠶種會委員、岡崎商業會議所副會頭等の要職にあるが趣味は酒、ソレも斗酒尙辞せざる猛者にて、爲めに幾分健康を害したが、最近は大に節酒して保健にいそしんで居ると云ふ。

## 岡崎電氣軌道株式會社

岡崎市康生町  
電話二四六三(四)七二〇番

驛と云へは普通市内か、町はずれに設けられるものだが、岡崎市民の先輩連は、妙な處に親切氣を出して御丁寧にも市から一里も二里も距つた岡崎村に設けて天晴先覺者顔をしたものである。お影で

東海道線岡崎驛に行くには歩行一時間半笑ふに笑へず、泣くに泣かれず、よつて此不便を除く爲めに明治三十一年二月出來たものが岡崎馬車鉄道株式會社であつた。當時資本金は二万五千圓、されど如上の不便と冗時間を除くには又無き文明の一機關であつたことを疑ふものはなかつた。併し文化は日月の如くに進むこと當時も今も異りがない。さすれば馬による動力が電力に劣る位ひは、直に看取せられて大正元年九月電氣軌道單線式に改正し、資本金を十二萬五千圓に増額して、其名も現在の岡崎電氣軌道株式會社と改めたのである。けれ共結ぶ處は殿橋と岡崎驛間二哩餘の交通機關に過ぎなく、尙長帶の岡崎市には最善の利便と稱することは出來なかつた。其爲めに大正九年四月資本金を一躍八十五萬圓に増し、十一年七月從來の單線に直すと共に、十二年九月殿橋より井田町に至る單線軌道を新設すに至つた。斯くて市内電車としての設備は略々整つたが、尙地方鉄道法に則りて井田町より東加茂郡松平村に至る七哩の交通線を設けんと資本を百万圓に増加して十三年四月工事を起し同年十二月井田及び岩津村間立間四哩の竣成を見ると同時に運轉を開始することゝなつた。

一方岡崎驛構内貨物引込線を竣工し、省線に對して大正四年二月旅客及び貨物の連帶運輸を始め、同時に西尾線とも結ぶ外、九十九月三河線、同年十月豊川線、其他全國私設鉄道各會社線と相互に連帶を取ることをし、十三年一月全國に亘つて如上の運輸を開始した。又十四年には起工中の松平村線も竣工したから全線十哩岡崎附近の交通に物明の鐘は全く打たれて、地方産業に與へる利益は實に



尠少でない。それにしても會社設立の發起人たる高橋源吉、樋口松太郎、伊藤小文司、梶川新三郎、田中真次郎、新實新十郎、清水半次郎氏等の功蹟は固よりながら、明治四十四年取締役とし就任以來今日に經過する清水利太郎氏及び、明治三十三年一社員として實務に携り、大正十一年七月常務に推されて現職を維持する鳥居又作氏等の功勞も等閑には出来ないものである。特に万難を排して額田東加茂の交通を結んだ専務須藤庄吉氏の果斷も見遁してはならない。而して目下電力は四百馬力利益の配當は八乃至九朱基礎も次第に鞏固を加へつゝ、あれば、同社の將來は益々多忙を加へるであらう。因に重役及幹部を示せば左のり。

重 役

専務取締役 須藤庄吉、常務取締役 鳥居又作

取 締 役 清水利太郎、鈴木丑三郎、瀬戸庄太郎

監 査 役 村上一學、田良三郎

相 談 役 高橋源吉

主 任 電氣 久田芳治郎、土木 山田吉三郎、運輸 小原九一

調 査 羽室良次郎、庶務 富田嘉一、變電 太田銀藏

驛 長 殿橋 稻吉應之助、井田 加藤六市、岩津 成瀬綱吉

### 愛知銀行岡崎支店

岡崎市籠田町  
電話 二〇八、五〇二

尾張の殿様徳川侯を大株主とし、之を圍繞する舊藩士の歷々を以て組織せられた愛知銀行は何と云つても中部日本の銀行界に一入高く頭角を上げて居る。固より創立の古きものは他に澤山あるであらう。又資本金のヨリ大なるものも無いではない。けれ共總預金の大小、信用の厚さは他に比較するもの無く宛然大道獨歩の觀ありて、名古屋、明治二大銀行に比するに株價が常に上位を保つ一事でも内容の堅實味が知られるのである。殊に株主總會に所謂會社ゴロの出沒もなく、又貸出し方面に於ても例の石井事件にさへ引つ掛からなかつた程の石部振りを續けて居る處恰も石橋叩く文字通りの綿密さを其儘實行して居るような觀がする。されば此本店と同身の岡崎支店に何の危つ氣が発見せられるであらうか。明治三十三年籠田町に始めて岡崎支店を設置された後は、歴代の支店長共に、本店の意緒を体して危きに近よらざる君子を氣取り以てお客を大事にしても決して阿らず、固く引しめても金融界に貢獻することを忘れないで今日に經過して居るが、畢竟堅實一本鎗が同支店の經營振りを表示したもので、今でも加茂方面の銀行が其遊金を時々預入する現情に徴しても判明するのである。現在の支店長は河野武太郎氏、温厚なる好紳士にて如才もなく、部下の氣受けも非常によい。



岡崎師範  
學校校長 小松原伊十郎  
岡崎市六供町

小學卒業者の二割は、中等學校へ收容され、八割は其儘社會に放り出されて自活する。之が最近統計に現れた數字なそうだから教育者で無く共、義務教育の大事な位ひは判つて来る。扱て斯く事實が周知だからと見た譯でもなからうが、小松原校長は何れは國民教育の當面者となる、小學教員に一日二回重復しようが、三回ダブろうが、暇さへあれば如上の大事をヨリよく徹底せしめる爲めに訓話の手をば休めないけれ共ソレ程大事な義務教育を如何にして授けるかと云ふ具体案に至つては、三年日光に晒したボロギレ同様の文部省指定に係る方針に據らねばならない意嚮のようだ。ソレにしても教育の眞義を社會が用ふると否とによつて、直に成敗の岐るゝ時代の來る迄は、國民教育も亦至難なる哉と嘆聲を漏らすもの當に氏と筆者とのみではあるまい氏は明治四年水平運動で喧しき埼玉縣大里郡御正村に生れ、明治三十三年、東京高等師範の理科部を卒業したと云ふから、本年正に五十と幾才になる筈だが、併し面と向つて對座しつゝ、顔の皺一本見通すまいと力めて見ても、一廻り掛け價がある程に若く見へるは多年中學生の心を心としてはしやぎ廻つた爲であらう而して最初教鞭を握つた處は秋田縣の横手中學にて、後大館中學、静岡師範を経、大正元年に小倉師範の校長に榮轉し、大正九年

五月に岡崎師範學校長となつて今日に經過して居るものである。性温厚にして人格は非常に高い。

岡崎市會議長 本多 憲  
岡崎市六供町

老人は四書五經を後生大事に抱へて我身を修める間は至極無事だが、扱て之を他人殊に青年に實踐せしめようとするなれば、厭やでもソコに小浪位ひは立つものである。此に於て本多氏は、新書を盛んに讀破して、ものゝ中庸を得んと下手な書物屋程に書籍を備へ附けて居るが道理で氏の行動には人を首肯せしめるものが非常に多い。就中只一人の愛嬢を可愛ければこそ養子取りさせないで他へ縁づけて了つた等、流石に婿本位の達觀に眞の慈父たる心を吐露したもにて他の眞似し難い大逸事である。さればこそ明治四十二年岡崎に永住地を据へてから人望一時に加はりて町會議員から市會議員に連續當選して後參事會員、副議長議長、と重要な席を持して居るのも當然ではなからうか。更に又青年團、少年團の副團長となり、又其顧問にも推されて、年若きもの對手にはしやぎ廻つて一向嫌氣をさゝせないのも不思議ではないのである。然かも氏は外部に於て青少年と接するばかりでなく内部に於ても常に書生を養つて種々面倒を見る許りか前身が軍人であつた關係上氏の世話にて士官學校を卒業した者には一々軍刀を寄與してせめて自己の身代り丈でも之等に接觸せしめて置こうとする



等。餘程若い者が好きと見へるようである。慶應三年一月岡崎に生れ、十八才の時教導團に入りて後日清、北清日露の役に参加し歩兵大尉となつて、旭日章甲格の年金と功五級の金鷄章年金及び其他の恩給とを以て何の野心も無く目下夫人と二人平和な日月を送つて居るが趣味は讀書と書畫いちり、金儲けは別して嫌ひの方であるらしい模様のように見受けられる。

魚會社専務  
岡崎市會議員

## 太田松藏

岡崎市能見町  
電話二七五番

氏は安政六年五月豊橋市の稲田家に生れたが、廿才の時頃岡崎の太田美代造翁に貰はれて、太田姓を名乗るに至つた。養家は魚美の名によつて既に百數十年間生魚業を經營して居るが、氏の代に至つて之に料理業を兼營し庖丁の冴へど、生魚の新らしきを自慢に濟々お客大事と力めたから、繁昌は日に加はりて市内有數の地歩を占め、魚美の名は遠く縣外に迄知らるに至つた。而して二十數年前魚會社の創立を見るや選ばれて重役となり、専務となつて、今も尙半日は此會社に送り、家業は一切息松次郎氏に委ねて専念天賦の事業に精勵して居る。然かも既に七十に近き老齡を以て、意氣尙壯者をしてのぞ威勢のよい肴屋對手に賣つた買つたの日常を續ける傍ら、又多年名譽職にも携つて市町政、郡政にも盡した功勞は尠少でないのである、殊に岡崎市會議員としては町制時代より連續當選して今日に

經過して居るが、本多議長の後には議長の位置を氏に擬するは、市會全体の空氣にして、人望の程も之によつて窺知せられるではないか。若し肴屋をして氣短かき男の専有商賣と見るならば、俳句を好み歌を愛する氏等は差向き同業人中の異端者として取扱はる可きか。何れにても霸氣ある中に床しき處あり。温厚なる處に威容もある。蓋し岡崎市内に於ける得難い人物の一人なることは疑はない。

岡崎市會議員  
綿布業

## 岩瀬常七

岡崎市能見町  
電話六一四番

明治六年十一月碧海郡安城町に生れた稻垣幸吉と云ふ一少年が寺子屋もどきの小學校と終へて十二才の時東京日本橋本綿商の豊倉へ小僧と公にと住み込んだ。此鼻つ垂れ小僧が誰れあろう岡崎市會議員として衆望を担ふ二代目岩瀬常七氏其人であるから他處目に奇異を感じるのも無理ではない。根が小りこう故に豊倉でも重寶がられて東京名古屋の兩支店に勤務すること十二年着々と頭角を現したのが先代常七翁に惚れられる處となつて二十四才の時厭や應なしに之を貰ひ受けて了つた。併し先代とて豊かな身分では決して無い。けれ共意氣に感じた氏が岩瀬姓を名乗るや朝から晩迄養父等の經營する成源社の中に入りて賃機へのマルを農家へ盛んに運んだ者である。併し織物業が投機に準ずる商賣だけに碎心活動しても天の偏愛非ざる限り失敗は免る可くもない。果して明治三十二年日清戦後の反動時



代に逢著した同家は氏等が折角脂の結晶として蓄積したる資産をば消滅せしむるの不運を味ふに至つたものである。併し享樂す可く養子となつた氏ではないから貧乏なんの屁でかつ破して、爾後更に努力を續けつゝ産を築き上げた結果漸次家運伸長して歐洲大戰中には十萬圓と稱する利益を擧げ此に始めて奮勵に酬はれる日が來つたのであつた固よう戦争終焉の反動時代には如上の儲けを幾分削減されしと云へ過去に比すれば隔世の觀がある。昨年秋市會議員に當選し家屋税調査委員に擧げられる等忙がしき身を苦ともせず笑つて之に従事しつゝ何の失態も演じないのは蓋し凡人で出來ない藝當ではなからうか。酒は相當にたしなむが惡酔しない處に價値がある。

岡崎市會議員  
蒲鋒 業

## 鈴木正造

岡崎市島町  
電話四五一番

蒲鋒で有名な蒲正の主人鈴木氏が、雨が降つても鎗が降つてもゴマ塩頭に捻鉢巻、威勢のよい姿で數名の若男對手に仕事を續けて居るが其手つきのキビ／＼した邊りは流石に卅年此方固めし豪ものだけあつた眼さへ醒める趣きがある。此水際立つた腕前を作り上げる迄には容易の修養でなく、幼少より全力を料理業に注ぎ、其間決して二兎を追はなかつた賜であらう。果して氏が明治十年八月岡崎に生れて小學を卒へると同時に直ぐ料理人としての志を立て奮勵努力日夜其研究を續けたもので

ある。されば技倆は日々メキノ／＼と上達して二十才の頃には最早押しも押されぬ立派な料理人となることが出来た。併し職人根性は氏にも附き纏ふて宵越しの金を費はない。儲ける傍から費ふて了つた後の懷中に半錢とて残つた例がないと云ふから相當入念の方であつたらしい。處が何でも日清戦役の後台灣の土匪征伐に渡臺して其儘此に居を止め得意の料理人たる腕を發揮しながら例により例の如く蕃地に儲けては費ひ費つては儲ける生活を續けて居るが此だらしなき態度に氏の愛人は疾く愛憎を盡かせて一日後白浪の風を喰つて了ふた。此に於て始めて目醒めた氏は爾後専ら貯蓄の方法を講じ以後南支南洋に滞在すること十餘年、尠なからざる金錢を持して明治四十二年木枯吹き荒ぶ霜月に十數年振りて故郷の土を踏む身となつた。さすれば支那商人の呼吸を覺へた氏が其後の金儲けに神技を現したのも無理ではない。而して昨年秋押されて市會議員となつたが、氣持ちよく、如才も無いから市議共同の知己となつて居る。

岡崎市會議員  
東海製菓取締役

## 柴田嘉市

岡崎市材木町

岡崎市會議員中に和製デブの三人男がある。菅野經三郎氏、と稻垣久吉氏及び柴田嘉市氏の三人がソレだと極めたさて誰一人筆者に異議を提出するものもあるまい御多聞通り三人共見掛けは堂々とし



て下手な角力衆等は手玉にとられ全く手も足も出そうにない趣きがある。又事實三人共宮角力でもどらうものなら三役處の味がある……なんかんと、請け合はれない、辞令は抜きにしよう。併し只一つ身体はデブつの居ても、三人共に人間は上の上、此點だけは筆者も太鼓を叩いて保證する。とり別け何時見ても嬉しいことが詰めかけて居るようなのは柴田氏にて、ムツツリ屋の高明サンでも氏に面してはツイ釣り込まれて、双頬を崩すと見たのは僻目でもあるまい。氏は明治十三年岡崎に生れ高等小學校を卒業するや直ぐ製菓の徒弟に住み込んで斯業研究と社會的に一步を刻んだ邊り差して豊かな資財があつた爲めでもなからうが明治三十二年獨力製菓業を開くや如才なき氏の態度は瞬く間に多數の得意先を作つて年毎舊店を抜きつ、繁昌を重ねたものであつた。而して同四十二年には岡崎の同業者中何人にも遜色せざる地位を築き上げたが爾後何時でも自家製品の賣上高は他を壓して第一位を示し今では八人の職人を使用して尙且つ需要を満たし切れぬ經營振りを續けて居る。殊に大正五年岡崎商人を以て東京の視察團を組織し歸郷と共に、東海製菓株式會社を創立して、自は之が専務となり終日不眠不休の活動を續けて同社の基礎を確乎たらしめた等、特筆す可きものも相當にある。大正九年選ばれて岡崎市會議員となり今日二期を重ねて居るが其間市政に盡したことも尠少ではない模様である。趣味は旅行併し二三年前滿洲踏破をきつかけに廢止したと云つて居るが一時的の廢止でなければ幸であらう。又酒を飲む。三福揃つて茶目氣を發揮する處之も御多聞の通り公知の事實。

料理業  
岡崎市會議員

石川七藏

岡崎市材木町  
電話四二六番

氏は明十六年四月、岡崎の材木町に生れ嘗て、藤川村の村長たりし小松氏の塾に漢學を學ぶ可く通ふこと八年に及びしも、之を以て世に立つ目的が無ければ、遂に廢學を決行して、爾來、先代の經營する米穀取引所の仲買業に携ることとなつた。併し誰しも同じ事ながら營業が營業であるだけに、賣つた買つたの一聲が、産を倒し、産を興す絆となつて、其爲めに先考は、三度倒産の憂目をなめる境遇に陥つたこともある。固より氏とても此渦中に卷添へを喰つたことは當然にて、時に悲惨の日を送らねばならないこともあつたが人生は七轉び八起きの輪へ、其後瘠瘦もスツカリ癒へて、従前以上の恒産を抱擁する身となつた。此に於て取引仲買人は、漢學で固めし氏にとつて必ずしも適當の商賣でないと考へたものか、三十才の時、之を廢業して藝妓置屋業兼料理店と云ふ、前よりは稍々波瀾少き營業に鞍換へした。而して智恵もあり、正直でもある處から、五六年經ざる間に早くも人望を集めて遂に松榮連組合長に選ばれ、以後重任に重任を重ねて九年の永き間此位置に据へられたものである。斯くて次第に信用を獲得し、昨年の市會議員總選舉に見事當選して今日に經過して居るが趣味は書畫骨董の玩賞なそうだから、氣持ちの程も知れるであらう



## 千賀千太郎

岡崎市康生町  
電話四四番

西三切つての大資産家にて、又岡崎附近の大實業家と云へば、誰しも千賀氏を聯想するが併し氏自身は前者は兎も角、後者に至つては、世間がもてはやす程、若く自信を持つて居ないから、世評も案外に眉唾ものである。されど事業に對する投資高は恐らく他の比敵を許さない底に多額を占めて居る筈なれば、此点を以て大實業家と見做さば、せられないでもない。蓋し現在では、資本家を實業家と混合して眺める慣習に馴れると共に、又事實資本さへ投下せば、結構後者の任務を全ふする可能性に満溢せられる故兩者の開きを強いて求めても、濟々労働者とプロ以上には出ない事情にある。さすれば氏が外部より斯く眺められても、別に遠慮は要らないが、さりとて嚴密なる實業家に非すと知りながらも、尙且つ自らをヨリ多く意義づけん爲めに、天晴社會に血税を支拂つて居る如く、てらふ者より遙に正直と云はねばならぬ。氏は明治十五年十一月、早川久右衛門氏等と相前後して生れ、岡崎中學も確か同期出身にて、實業界に乗り出したのも、略ぼ同様の時代、性格又類似してよく對照に上げられるが、野心の無いのと、暇さへあれば、誰れ彼れなしに面談する美点を有するから、其碎けた態度に尊崇の念が自然と湧いて来る。さればこそ故手島代議士の補欠選舉に、普通なれば從來同様激甚

なる競争場裡を表現するに拘らず、氏の出馬によつて、全有権者一致、之を下院に送る等、劃時代的清票の蒐集が行はれたのも當然である。併し此理解多き大家の主人も、其純真なる精神が、時に邪人の爲めに禍せられて、思はぬ迷惑を醸もす場合がある。彼の尾三銀行が不正貸出によつて破綻せし時夫人の令兄内藤社長との關係から、同じく重役であつた事清に責任が繋がれて、百万圓の手腹を切つたことがあるが、之等は紙片の一句に準授した夥しき犠牲であつて、氏の立場を洞察する時は其處に一掬の同情が湧く。而してソレあつて以來、無情を感せしものか、西三の事業と云ふ事業に投資せる關係上、現在擧げられつゝある重役の位置を辭して、單に千賀合名會社のみを護らんと決意せしが、強いての勸告に我意も張り兼ねて止むるまゝに、留住して居るもの筆者は各關係會社共氏の心情を諒して、絶対に輕舉妄動せざらん事を望むものである。目下事業は令弟健次郎氏に委して、自身は遠く之を監視するに過ぎざれ共、東海製菓、岡崎瓦斯、岡崎土地等に社長となり、又其他の關係會社が多い爲め、日常多忙を極めて、月の中の二十日は旅行して、内に居ないと云ふことだ。趣味に書畫骨董の愛玩があるが、資産家共通の御座なり程度、應擧と、元信の間違ひ位ひは平氣でやつて退ける掌の中なれば殊更擧げるの要もない。



## 深田三太夫

岡崎市若宮町  
電話三三三番

三洲岡崎を代表する資産家は、千賀か、深田かと好事癖者の口争材料になるだけ、それだけ深田家の資財が豊かなことは知られるが、併し前者は昔から、西三一の大立物として許されし關係上、蓄財も徐々に行はれたから、他を刺戟することは大でない。けれ共後者は百数十年の歴史こそあれ、當主三太夫氏の努力が、今日の位置を大部爲したから、其行程にも相當に華なものがある。かと稱して裸体一貫、巨万の富を作した立志傳の人でも無く、又投機流の商人でもない爲めに、殊更突飛な儲け方もしなかつたが只一つ氏は一萬圓を一萬圓以上に使ふ方法を知つて居た。否な自己の金を用ひないで他人の金を利用しつゝ、貨殖する道を知つて居たのが、今日の富をかき集めた原因である。明治二年深田家の繼嗣として生れ、單に小學を出たゞけの身にも拘らず、西洋文明の綺羅びやかな物質を眺めては、何事かと心に書いて居たものだ。嘗に西洋の文物ばかりではない。眼に觸るゝあるとあらゆる神羅万象を捉へては、思考を重ねて見る。而して儲け事以外のものには何事にも見向くのさへ厭やと云ふ徹底したやり方に、政治等は何うあろうと、全く對岸の火災程にも考へて無い。されば六十年の一生を通じて町會、市會は固より、縣會國會の何一つにも關係せず、まして新聞記者相手の對談等は毛

蟲以上に嫌ひと來ては無冠の宰相たるものも正に卒倒しよう。それでも商業會議所の會頭には、前後三回押される、儘に執任して居るではないかと訊ねるか。此會議所程理財の道に好都合の寄り合ひ場所はないと聞かされては、尙續いて執劫深き質問も行なはれまい。けれ共面と向つた氏の表情は巧みなものだ。心に權謀術數をこらして居ても、外部に其色さへ見せない老練振りには到底岡崎在住の實業家中、一人として四つに組めるものはない。目下深田合名、丸石合名の代表社員たる以外、岡崎銀行の頭取を始めとして、多數の會社に關係して居るが、單なる月並みの投資家ではなく、腕の牙へは、資本以上の仕事をして退けるから氏を以て西三一の大實業家と稱しても、嘗に筆者獨りの過信ではあるまい。氏も亦月の中三分の一は旅行をする。固より遊興等と洒落がましきことにて、行ふのではなく、動けば黄金が身体一面に附着する成算を得てこそ、旅立ちするのである。併し何と云つても六十歳には今一步のごと故、近頃は利益打算外の保健に携はる時間を作る場合がある。園藝趣味をとり入れること、又冬期中豆洲修善寺に遊湯氣分を養ふこと等かソレだが、命あつての物種、未だ岡崎市としては、氏を殺す可く時期尙早故に、濟々保健に盡して貰ひ度い。



八丁味噌  
本家

## 早川久右衛門

岡崎市八帖町  
電話九十番

岡崎市に於ける素封家、千賀、深田家等に次いで、早川家が由緒多き傳統を持つことは、筆者の説  
明を要すまでもない。されど同家は八丁味噌の醸造元として、全国的に馳する名は、由來相當の年月  
がある爲めに、此点では前二者も遺憾ながら一步を輸せられるのは、已むを得ない次第である。こ  
程左様に同味噌の聲價は噴々として、國內津々浦々に満ちて居るが、何分少々高價なる爲めに、中産  
以上の家庭にて、其食膳を賑やかすも、ソレ以下では單に名を食べる程度にて、普遍的に用ひられな  
いのは、珠に毀と云はねばならぬ。だが併し、又若く世の商賣を單純化することも出来ないから、上  
流階級常得意の専門業も無しでは濟まず、よつて、假し一般的ではなく共社會から此味噌を葬つて了  
ふことは只淋しさを得る以外何の果實も得られぬれば同家は疾くより此處に着眼したと云ふ譯では  
あるまいが、價よりも寧ろ、品質の改善に全力を傾注して、其聲價を益々高め、銳意粒選りに邁進す  
るのは、勢ひの己む無き處、其本來の性質として、斯くす可きが當然である。而して結果は遂に奏功  
し、現在では、岡崎は固より名古屋、大阪、特に東京に多數の需要者を有して、醸造の半ば以上は此  
處に輸送し、以て貴族、資産家階級の台所に須叟の間も無くてはならない資料の、一つに數へられる

こととなつて居る。ソレ計りでは無い。此頃では更に雲深き大内山の御召料にも、御採擇せらるゝの  
榮譽を担ひて、一入色彩を添へるに至つたのは、同家及び八丁味噌末代の光榮にて、品質の優秀も此  
一点によつて、窺知することが出来るのである。正保二年、今より二百九十年前の創業當主久右衛門  
氏は八代目の孫にて明治十五年十一月呷々の聲を上げたが、折角手塩に掛けて育れられたる効あつて  
、邪心無く、岡崎中學を出るから、先考の關係せる種々の事業を承繼して、何の倦怠も覺へないのは  
、所謂ち坊ちやんと、少々趣きを異にするも、他人の面會を拒否して、常に逃げ廻ると云ふのは如何  
なる譯か。又假し面會しても、談話半ばにして、コクリ／＼の夜舟遊び、此武器にかゝつては、大抵  
のものも避易して、其場を直に辞し去ると云ふことだ。併し昔から英雄豪傑は、暇さへあらばよく居  
眠りをする。人間の睡眠五時間を提唱したナポレオン、閣議黨議、大會、折衝等に不眠不休の態度を  
續けて、常によく難境を打開し或は黨員を一時も倦ましめなかつた原敬、之等は座せば直く眠ると云  
つた態たらくの怪傑故に、氏も或は深く洞察せば、案外の怪物であるかも知れない。大正九年推さる  
、儘に市會議員となつたが、此新議員を滿場一致議長に擧げ、尙二年交代の恒例を破つて、四年繼續  
せしめたものゝ、何の支障も起さなかつたのは、假令素封家を敬ふ、因習に捉はれた空氣中での、出  
來事とは云へ、又他面只物でないことを、立証したもので無くて何であらう。目下政治的には憲政會  
に屬する外額銀社長を始め滿電其他多數會社の重役として、實業界に勢力を布殖し、他日雄飛の地盤



を固めて居るから、千賀、深田氏等にとつては恐る可き強敵であらうと思ふ。

## 服部鑄造株式会社

岡崎村羽根  
電話園三二八番

東海道線岡崎驛から程遠からぬ北東に、廣汎一万三千坪の地域を占めて、八千餘坪の大工場を擁し鉄製大煙筒の天に伸する中から黒煙濛々として四時間断なく立ち上る偉觀の一大鑄造會社を見るであらう。服部太郎吉翁を社長とする斯界の權威、服部鑄造株式會社が其本尊であるが、此處が改良三洲釜、山サの商標で以て全國に鳴らす鍋釜類の鑄造が行はれると知れては、他國人も今一度のひとみを注がずには居られまい。事程左様に同社製造の商品は今日天下を獨歩して居るが、其沿革を訊ねた時決して偶然に生れたものでないことを何人も看取するに至るであらうと思ふ。

話は明治二十七年頃。日清火華を散らす眞最中に逆のぼつて、當時の岡崎を考べて見よう。昨日迄一介の鑄かけ屋か、何を發心してか寒中に薄衣一枚を纏ふて鑄造業を始めたもの、假し戰爭に夢中とならずとも、人は誰一人之を見返へるものとてある可き道理はなく、戸外に捨てられた古號外の塵程にも注意は拂はれて居なかつた。されど此鑄物師、身には薄衣を纏ふとも、心に包む成算は、隆々今日の服部會社を劃いて居たのだから、恐ろしき譯である。姑らくの後御用鑄物師安藤家の長所に、野

洲の特徴をこき混ぜて、練り上げた服部獨特の鑄物が、市場に現れたが手に觸れる程のものにて之に何で厭や氣を起さそう。左はさりながら、當時の人は斯かる改良品を宛然異端者と同視して、食はず嫌ひの我儘を飽く迄も押し通そうと試みたが、其處に腕利きの淺沼氏が現れて、販路を次から次へと開拓する。之に負けては末代の恨事と八田氏が工場に夜を徹して、生品の改良に身心を傾倒する。此兩翼が服部氏を献身的に援けたのだもの、鬼に金棒とは全く斯かきことを稱するのであらうが、然らば昨日と打つて變つて、氏の身邊が漸く豊となつたのも當然である。而して幾何もなく六百五十年の昔より連綿と傳はり來つた由緒ある安藤家の事業を承繼し、此處に外面上の光輝も加はりたれば、店運日々隆盛となりて、三洲釜の十中八分迄は同所の手によつて生産するに至つたのも必然である。

其後文明の利器と名づくるものは、一切之を採用して、大量生産の方法も講じたれば、品質の優良と價額の低廉とは、完全に一致して山サの商標あるものに非ざれば、之を避けんとする情勢さへも生み、全く過去に比すれば隔世の觀を催さしめることとなつた。特に醸造用の大釜が大藏省醸造試験所に採擇せられてより、其眞價は一度に認められて、今では全國の醸造家に用ふる九分迄、服部鑄造の手によつて製出すると知れては、常に同社の名譽ばかりではなく、岡崎市の又大なる譽ともなるのである。更に他業者に卒先して、動力による削磨機を設置し、生品に光艶を添へたり、近くは輕銀鍋の鑄造所を起して、文化生活の家庭を潤したり、時代の趨勢を捉へることも又極めて敏速にある。而



して年額五十万圓を越へ、尙將來ある經營方針を採用して居るが、大正九年服部翁の自發心に基いて組織を資本金五十萬圓の株式會社に改め、由來氏と起居を共にした人々に多數の株を與へ以て利得を獨り壟斷せずして従業員の全部と共に頒つことにした。然るに經濟界の不況は此處をも襲つた爲め半額拂込みを幸に積立金より五萬圓を抜き來つて、一株三十圓と改め都合一萬株を以て、資本金三十萬圓全額拂込みの減資を行ひ、今日に經過して居る。尙配當は從來二割を續けしが、一割五分に低下し、又昨今は一割に決して、利益の多くを積み立て、居るが、之以下に下ることは、同社の確實なる基礎に徴する時、先づ無いと稱しても過言ではあるまい。販路は日本全國と朝鮮滿洲方面の廣汎なる區域に亘つて居るが其の聲價は隆々日進月歩の勢にある。因に重役の氏名を示せば左の通り

社長 服部太郎吉、專務取締役 森七三郎

常務取締役 八田駒吉、淺沼銀治

取締役 万年九平

監査役 服部富三郎、近藤重三郎、中根鶴藏

服部鑄造株式會社社長

## 服部太郎吉

岡崎村羽根 電話三三八番



服部氏は万延元年生れ、本年六十六歳であるが幼にして服部家に養嗣子として入籍し、傍ら岡崎藩の御用鑄物師廿六代目の後を継ぎ安藤金得翁に師事して鑄造業を學んだものである。併し一家貧にして直に事業を起す可き資力に欠け、僅に鍋釜の修膳に従事して、其日の糊口を凌ぐと云ふ有様であつたが、斯くする中にも、氏の眼中には今日の事業を企劃する成算ありて、一日一刻の間も仇に過さず如き拙事は行なはなかつた。されば幾何も無くして相當の貯へも出來、九尺二間の小店位は優に開業の可能性を得たから、明治二十五年頃夫人の爲めに鍋釜の販賣業を開き、自らは依然として修膳要具を担ひつゝ、岡崎附近を訪ねたものである。併し營業方針は氏の腹いから練り出すことなれば、其方法が他に出色して居ることは勿論にて、



特に春秋日岸には購買者に酒をふる舞ひ、或は甘酒をもてなして、只管情實を作る手段を怠たらなかつた爲め客人殺到して、其數數百人に及ぶことは敢て珍らしいことではなかつた。さすれば修膳業を營む餘融も次第しくなくなりて其爲めに以後は、専ら販賣業に従つて居たが、家業の繁榮に連れて同業者の疾視は免れず果ては仕入先の不賣同盟さへ行なはれるに至つた故、己む無く、商品を野洲に仕込む情態に餘義なく陥れられて了つたのであつた。けれ共天は正義に與するものか、野洲の製品が三洲物に比して、遙に優良であつた爲め顧客は以前に倍加して、仕入れに日夜逐はれ勝ち、斯くては顧客に對しても不都合であると共に、折角天與の金儲けを逃がすことにもなれば、遂に多年の宿望も附和して二十七年一大決心の末、恩師安藤翁に鍊へられた腕を基礎として、之れに野洲釜の長所を加味し、服部氏獨特の鍋釜を鑄造するに至つた。固より相當儲けを擧げたと云つても、元をたぐせば無一文者、されば鑄造業開始と共に資金に逐れること一再でなく、其の爲めに氏及び夫人の身の廻り一切を入質して金融の道を開いた時もある。又嚴寒の頃煎餅布團一枚の中に氏と夫人及び徒弟とがザコ寝を續けたこともある。まして三食を減じた事等は殆んど常態にて、凡そ人として限度的苦心は十二分に体験し、土に喰ひついても此事業を達成せすして置く可きかと悲壯の決意を胸に込めて日夜苦闘を絶たなかつた。併し漸次小康を得たが日々増出する製品は、店頭に販賣す可く剩餘を生じて、勢ひ他に卸賣をせねばならない。然るに多年の因習は質よりも名を尊びて、各店共服部製を販賣しよう等

とは恬と問題にせざる爲め、茲に近縣を斷念して、遠隔地域に販路を求め、漸次近くに及ぼすと云ふ普通の方法を逆にとつた方針に歩を刻んだものである。斯くして此方法は見事に功を奏して、内容の確實なると共に顧客も激増して注文日に殺倒し、他方事業の擴張も毎年續けて、遂に大正初年には一ケ年の産額五十万圓に及ぶと云ふ恐ろしき大事業者となるに至つた。而して大正九年利益を獨り壟斷することを非人道と解して、職工店員に多數の功勞株を與へ、株式會社としたが、性極めて堅實にして生品の内容に常に注意し、其改良に身命を賭して居るのは今日も昨日と變らない。又情宣にも濃かくして、安藤家の事業を承繼した後、未亡人に仕へること極めて懇切にて、血縁者も尙及ばない態度を示して居る。凡て報恩には心の全部を傾倒するから、兎角立志傳中の人が、次第に育められる高慢に他の慷慨を買ふ如き事があつても、氏に微細と雖も其面影の無いのは、長幼通じて見習ふ可き点であらう。

服部鑄造株式會社  
常務取締役

八田 駒 吉

岡崎村羽根  
電話三二八番

服部鑄造株式會社長服部太郎吉翁の片腕として、又其女婿として、同社の工場方面を担当し、職工長職工と起伏を共にしつゝ、製品の改良に腐心するものが八田氏である。氏は明治十四年、岡崎に生



れ、服部翁が未だ金物販賣の傍ら、鑄掛屋を復業とする明治二十七八年の頃より、其の腹心となつて困苦を共にしたるもの、爾後四十年の長き間、一日の如く翁に盡した功勞は尠少でない。

回顧せば今より三十數年前、服部翁の經營せし金物販賣業が、八田氏等の努力によりて、盛んに繁昌したが、嫉妬、岡焼は何處にも絶へないものにて、此の情勢を眺めた製造家等は、一日不賣同盟を締結し以て、如上の繁榮を根本から覆へさんと目論見た。よつて己む無く八田氏は行程十里の腕車を引きつゝ、豊橋の某製造家に懇願して、鍋釜の仕入れを行はんとしたものである。處が先方では遠路の仕入れを謝するは愚か『鑄掛け屋風情に賣る品は作らない』との御挨拶に、折角の希望も消へうせて、姑らく悲憤の涙にむせんで了つた。其後野州釜を販賣するに及んでも、仕入れから販賣の一切を、手際鮮やかに捌いて退けたが、一度恥かしめられたる怨恨は、腦裡にこびりついて、離れない。斯くて市内の某、豊橋の某にて製造する品物に、數等優るものを作り以て、前きの恨みを晴さんと、服部翁を促して、不眠不休、肉体の一部を割きつゝ、込めたる鑄造は、幾何ならざる間に、疾くも附近の競争者を壓伏して、今では遂に天下に冠たる絶好品を出すに至つたものである。されど氏は之れを以て一向に誇りとはせず、却つて身を工場内に深く潜めつゝ、改良研究に腐心をする。蓋し氏の生ある限り、他品に市場で打ち負る如き拙事は絶対に避けんと悲壯の決意を胸に畫いて尙且つ勝つて兜の緒を緩めないであらう。何れにしても同社の今日を築いた一人として、氏をらつ外に置くことは出來ないのである。

服部鑄造會社  
常務取締役

淺 沼 銀 治

岡崎市六供町

服部鑄造會社にて八田氏と共に、社長の双翼と唱はれるものが淺沼常務であることは、同社を知る人の皆一様は抱く見解であらう。氏は明治二十年岡崎に生れ、高等小學を出る早々、十五歳にて同社に入り、最初工場方面に勤務せしが、其の商才の豊かなるを認められて、半年の後營業方面に移されることになった。固より初めは單なる見習ひに過ぎなかつたが、天才的の商略は大人も舌を巻くことばかり、よつて新販路の開拓に携はらしめたが、氏は此の任に服するや、地方一流の金物店を狙つて、他を一向に顧みない。而して之れを口説き落すに一年以上三年を費して、克己忍耐の果て、相手が根負けする迄に訪問する。されば木佛であらざる限り此熱誠に等しく感動して、後には心より第一の仕入先きを同社に選ぶ情態と迄なるに至つた。其の爲めに氏が得意先より受ける信用は、極めて厚く最近では何れに行くも百年の知己を迎へる如き態度で待遇せらるるのも當然であらう。大正九年株式會社に組織變へせられるや、八田氏と共に常務取締役となりて、營業方面を担当し、微細の隙も呉れない



で第一第二第三と販路の擴張に従事し、朝鮮滿州に迄手を延べて今では内地は固より新領土に至る間服部製の足跡無き處は無い迄に發展せしめた功勞は、持筆に價する。而して夫人は八田氏と共に服部翁の息女、常に背の君を援けて同社の營業所に手際よく事務を捌いて居るが、其應待振り等は頗る手に入つたものである。

陸軍少將 小野庄造 岡崎市伊賀町

氏は明治十年二月岡崎に生れ、郡立隨念寺學校を経て、愛知一中に入り、後上京、中央幼年學校より、士官學校に入學して、卒業したのは明治三十二年八月、卒業と共に守山聯隊に屬して、青年少尉の指揮振り宜しく、直に中尉に進みて、三十五年陸軍大學に入學したが、在學中日露兩國間に戦端を開いた爲め校内より俄に滿洲へ出征せしめられるに至つた。何うせ戦ふのが軍人の職務、固より未練等の起ろう筈なく、第二軍第三師團は大隊副團として、先づ南山に初陣の功名を挙げ、次いで得利寺蓋平、大石橋、首山堡、遼陽、沙河に進出して露軍の心膽を寒からしめたが、卅七年の十月十三日敵の砲兵陣地に夜襲を試みた際右肩に砲彈を浴びて、關節の骨折と云ふ名譽の負傷をした爲め、三ヶ月の療養後内地に歸つた。而して陸軍省の出仕となり、四十年平和恢復と共に再び陸大に復歸して卒

業したのは翌年の八月、斯くして參謀本部員兼山縣元師の副官となつたが、四十三年少佐に昇進すると共に英佛獨に留學を命ぜられて飛行機自動車等の交通機關を調査する身となつた。後歸朝と共に陸軍歩兵學校の教官となり、中佐に進みて日獨戰に青嶋守備軍高級副官となつたが八年大佐になると共に堺聯隊區司令官歩兵第四十七聯隊長の要職を経て十一年遂に少將となつたが姑らして豫備編入。歸郷して『思ひきや、また郷里に歸り來て、昔ながらの月を見むとは』と歌ひ回顧一番無量の涙を拳で拂つた。號を龍城と稱し英獨佛語に堪能である。

株式會社 額田銀行 岡崎市康生町 電話四六三番

西三銀行界の重鎮として、創立の年代こそ一步を輸せられても、基礎の鞏固と、其堅實なる營業方針とは他の何ものにも遜色しない額田銀行の存在を、忘れるような健忘症は三河切つて、誰れ一人もあるまい。扱て若く慷慨する開業年代として、明治二十九年十二月一日と云ふ三昔前のこと、さすれば相當の苦もむして居る筈にて、爲めに新參呼ばりも出来ない譯であらう。だが併し其創立の動機は日清戰後の好況時代に、御多聞通りの事業慾に煽られて、出來たと臆測す可き理由があるも、左様な事を詮議だてするは、死兒の齡を數へるよりも尙愚な話、只創立者齋藤廣次、加藤善八郎、成瀬林右工



門、附柴恒太郎、野村榮喜知の諸氏が三万圓の資金で生湯をつかはせた後一切の經營に従つて居た間は極めて幼稚のものであつたらしい事實はある。けれ共其後變ふた不景氣風にも屈せず、三十五年五月には資本金を十萬圓となし、又營業上の成績も遅々ながら、世の進連には後れて居なかつた。然るに四十三年深田三太夫氏が頭取となるに及んで、同行の信用は一時に大を爲し、取引者は門前常に市を爲すの盛況を續けて日露戦後の不景氣風等、何處吹く風かと獨り悦に入る程の業績を挙げたものである。斯くて四十五年の一月には、三十萬圓に増資し、預金も他行に劣らざる數字を挙げると同時に勝つて兎の緒を解かず、銳意邁進したから、其結果は恐る可き加速度を以て、現在の基礎を容易に作ることとなるに至つた。然かも堅實を主として、岡崎及西三の進歩に伍しつつ、其發展を期せんとする覺悟は、全行員の眉宇に等しく現れて居る爲め、大正八年八月には百万圓の資本金を擁して地方大銀行の班に列し、十一年十一月には之を増加して、二百万圓とするの繁昌をから得たのも、努力に恵まれたる當然の果實であらう。而して石田良三郎氏の常務となるに及んで、其細密なる頭腦に映する財界の諸相を大膽なる善處によつて手際鮮かに解決する處技倆は他の脅威的焦点になつて居るから同行の將來は實に恐る可き者と云はねばならぬ。現在の積立金は四十四萬圓、総預金は一千万圓に近く配當も最低六朱の事はあつたが、近來では平常一割を低下せずして、時に一割二分を行なふこともある。斯くして今では西三河の二大銀行として、地方金融界に貢獻して居るが、重役及び支店を擧

ぐれば左の通り。

頭取 早川久右衛門、常務取締役 石田良三郎

取締役 元松昇藏、千賀平四郎、

監査役 澤田源藏、藤井弘次郎、新實新十郎、

市内支店、傳馬町、中町、伊田町、

支店、 舉母、松平、知立、大濱、西尾、福岡、音川、羽根、豊橋、新城、

出張所、 三河要部に亘つて二十二個所、

岡崎師範  
學校教頭 **濱 嶋 一 雄** 岡崎市康生町

書生は幾何立派なことを云ふようでも、實際の社會生活とは縁遠ひ場合が多い。まして校内の寄宿舎に隔離して、世の人々、接觸せしむる機會を、より少にした昔の師範學校出の人々が、特に此傾向を甚だしく背負つて居たのも當然である。よつて最近では、通學し得るもの、悉くに、起臥を校外で行はしめる原則を樹て、只僅でも多くの常識を看取せしめんとして居るのは、師範學校教育の進歩であらう。而して濱島教頭は此精神を体して、生徒に眞の實力を充實せしむ可く、教鞭を握つて居る



が、兎角詰め込み主義に嫌厭たる被教育者には、之れが又非常に有難いことに思れて、氏を思慕するもの年毎明僚に増加する。然かもソは最近の現象ではなくて明治十九年、名古屋に生れ、愛知一中を経て東京高師に入学し、四十二年國漢科を卒業すると共に、濱松商業に奉職した青年教諭時代から、既に生徒の間に此種の空氣が漂ふて居たのである。後大正元年、岡崎師範に赴任して十四年になる其間一日の如くに堅い國漢を教へても固陋に流れず、其妙味を會得せしめて、よく爲す可き責任を果した爲め十四年七月教頭となるに至つても不平の空氣は微細程もない。其温厚にして半途退學生に迄心を配る親切さは、世の師表たる人格を十二分に具備した証左にて、筆者も自ら頭の下る思ひがした目下小松原校長を輔佐しつゝ、餘段には好きな運動に疲れし心を慰めて居るが、昔の漢學者流な面影は何れにも探られ無い。

三洲釜  
鑄造業

木村善助

岡崎市菅生町  
電話二〇七番

三洲釜鑄造元として寛永三年から今日迄十六代に亘る年間連綿として鍋釜農具類を鑄造して居る木村善助氏の工場は實に由緒の深きものにて曩祖が近江の國にあつた時元明天皇の御宇に和銅開珍を鑄錢して名をなしたが寛永の頃末孫三河に定住して、今日の業を開いたのが始まりである。爾來悉くを

邦産鐵の原料もて、鑄造したから製品は茲に堅固にて、永年使用するも何の故障さへ生ぜず、爲めに一般からは非常の好評を以て迎へられたものであつた。されば此名此地盤がある限り袖手しても尙繁榮は期せられるが現主木村氏は一向左様なことを満足とはせずして、日夜奮闘の後逐次新販路を開拓して今では全國津々浦々に同所の製品を見ざる處無き迄に發展せしめた。されど尙擴張を續けるに餘念なく、最近には網鐵底の改良品等を出して、天下を獨歩せんと目論見て居るのは、他の一大脅威と云はねばならぬ。氏は明治二十三年生れ、岡崎中學を出て直ちに家業に従事したものであるが、流石に大家の生れとて、おう揚にして正しく、辣腕は無けれ共堅實にて、祖先の信用を失墜せしめるようなことは無いようだ。目下の生産高は約二十万圓、今でも邦産鐵を用ひて昔と異なる處はないが道理で家運は日に月に進みて同業者中産額に於ても遜色するものは餘り澤山あるようにはないらしい。

味噌溜  
醸造業

伊勢屋株式會社

岡崎市兩町  
電話一二三番

同社は大正十年資本金五十萬圓、三分の一拂込みによつて創立したる味噌溜の醸造會社であるが、其前身が近藤重三郎氏の經營せし伊勢屋であるから、其沿革を訊ぬれば相當に古い。即ち當主重三郎氏の出世する二年前、明治十七年に先考重三郎翁が、單獨如上の醸造を開始したのが始めにて、爾來



浮沈は交々来りしが、翁が岡電を創立した當時資金の大部を之に投下した爲め、伊勢屋の前途は可成りの悲觀說に閉繞せられて居た。けれ共豪偉一代を歴した翁のことなれば、斯かる聲には全く無關心只管岡電に全力を盡した効ありて同社はメキ／＼發達し、爲めに其後之れより生ずる利得を幾分伊勢屋に注ぐことが出来るに至つた。斯くして岡電の發達と共に、伊勢屋も發達して當主重三郎氏の承繼した後は、明治六年以來、同家に忠勤を抜ん出る家寶坂口富作氏の補佐宜度きを得て造石高も年毎増加し、販路も東西に擴張して大正元年には其組織を合名會社に改めることゝなつた。而して十年従業員及販賣店に株を分けて、之を株式會社と改めたが、之と同時に五千石醸造の倉庫も竣成したれば其將來は非常に囑望せられて居るが、現在では二千石内外の製造を續けつゝ、毎年一割の配當を行つて居る。積立金六千圓、味噌では八丁味噌、鳩味噌に劣らないものを出して好評を得ると同時に、溜も其優秀なる品質を維持する爲め、共進會品評會にて得たる賞状は尠少でない。因に現在の重役を示せば左の通り。

社長 近藤重三郎、専務取締役 阪口富作、  
取締役 岩附謙太郎、安藤藤吉、中村憲吉、  
監査役 金田喜作、左右田嘉一郎、手島秀吉、

### 辯護士 高橋久松

岡崎市六供町  
電話八〇五番



氏は文久二年八月、岡崎に生れ、明治三十一年十二月辯護士試験に當第して、翌三十二年二月當録岡崎に開業せしが、日常の温善を傾倒しての辯論振う宜敷く、三十四年四月破産監財人に命せられて、其の存在を凡く知らしめるに至つた。然るに三十五年三月、名古屋控訴院長は、氏を民間に置くのを惜しみて、官途に就く事を盛んに勸告したれば、其の勧められる儘に判事となつて、爾來十三年間、名古屋區裁判所、同地方裁判所及び控訴院に勤務す、其の身となつた。後大正三年、金澤區裁判所の監督判事に任ぜられて、姑らく雪の國に過ごせしが、四年七月、關東都督府法院官となつて、高等法院裁判長の要職を與へられること七年其間に例の古賀拓殖局長官を閉繞せし呵片事件がひき起つて、其特別豫審事務を取扱ひ、遂に長官を刑



に附す等の雄名を馳せたことがある。けれ共古賀氏は、氏の愛せし辯護士試験の委員であつた關係を想ひ、假し國家の爲めとは云へ、又私情に於て一掬涙無しに経過せられず、遂に之等が關連して十一年八月三十一日依願退職して、三十年目に故郷岡崎に歸省し、又再び昔の辯護士業を開くに至つた。正五位、任官中は奏任官一級俸を授けられて居つた爲め、恩給も相當にありて、餘程内福であると共に、謹直なる態度が、他の崇敬を買つて居る。

岡崎市議員 安藤勝

岡崎市康生町

自身は養蠶教師として三十數年間農家に貢獻し來つた安藤氏は、昨年秋岡崎市議員に選出されても、其眞面目と眞摯なる態度は、一般崇高の的となつて、市民に氣受けが餘程よい。されば學務委員に選ばれても、何の落度もなく、責任を完ふして居るのは當然にて、誠心誠意市政に盡す胸臆は、宛然封建時代の城主に對する家臣の趣きとする。斯くて全身忠實の血を以て覆はれて居ればこそ明治卅三年以來今日迄縣下に或は岐阜縣に足跡を印して何の倦怠も覺へず養蠶業に指導善處することが出来たのである。氏は明治十年東加茂郡大坂村の農家に生れ、小學校を卒へるや養蠶事業の將來に着眼して其飼育法を修得し、二十三才にして之れが教師となつたが、其技は多年の經驗上無駄がなく爲めに郡村等の農會に招聘されることも十數回に及んだのは如何に世の常のソレと相違するかを知るに足る可き何ものかがあろう。されば其間に感謝狀を得たことや銀盃を貰つたことも一再でなく、又縣蠶種検査場へも採用せられしこと等ありて年數と技倆は既に一家を爲し、今日養蠶教師仲間でも相當重きに任じて居るのは無理でない。最近十年間は専ら岐阜方面にて指導の任に携りつゝ、令名を馳けて居るが趣味は俳句と囲碁、但し程度の問題はツイ聞き漏して了つた。

石材業 岡崎市議員 杉浦磯次郎

岡崎市中町

三河別院の直ぐ東側に杉浦石材工場がある。岡崎市の同業者中五指に數へられる位置を占めて居るだけに數名の職人はトツカントンと玄能の音勇ましく立働いて居るが中でも燈爐は同所の得意とする處にて、其出來ばへの見事なることは素人の眼にも容易に判る。主人は杉浦磯次郎氏、明治二十二年岡崎に生れ、舊姓は今井と稱せしも十九歳の時杉浦氏の養子となつて、此に始めて杉浦姓を名乗る事となつた。性極めて温厚、家業にも熱心にて今日の繁昌を示したのも畢竟氏の努力に負ふたものと見て然る可きであるされど經營の基礎を作つたのは令兄今井金太郎氏にて其讓渡を受くるや之に精勵して令兄の名を恥かしめないう盡した處に今日の隆盛が湧いたものであらうと思ふ。氏は家業に力を



傾注する傍ら、疾くより岡崎石材組合委員に選ばれ、又中町曙の總代にも推されて七年に及ぶが、其間よく職責を完ふする故人望日に加はりて、昨秋の如き遂に市會議員にも選ばれるに至つた。而して此方面に於いても相當に活動して市政に貢献する處は尠少ではない。趣味はなく、只天恵の仕事に善處するのが樂みである。

綿絲業  
岡崎市會議員

平岩熊五郎

岡崎市若宮町  
電話六五〇番

平岩氏の平常に於ける面貌は蟲も殺さぬやさしさを持して居るが、併しアノ顔で一杯きこし召すが最後、冬でも手離さない扇を大上段に構へて机上をパチリ、文樂の操り人形でも出て來たかと思はれるような口を頬べたの傍り迄釣りゆがめて『諸君！』と來る。されど此『諸君！』の後には假令十時間待つても、何にも來ないのだから、始めて列座したもの等は、面喰つて姑らく呆つ氣の光景を續けるのも無理ではない。其酔つてさへこんな變つた藝を打つもの、まして素面で凡俗の眞似が何うして出來よう。果して然り、僅か小學校を出たばかりの素寒貧小僧が。一年數十萬圓の賣上を爲す大商店の主となつたこと、單に此の一事に依つても、凡人でない点が容易に了解出來るのである。氏は明治十六年四月、碧海郡矢作町に生れ、高等小學校を出るや直ぐ深田商店に入りて見習小僧とな

つたが、商賣熱心にして如才なく働く爲め、次第に信用を借して幾何ならざるに疾くも、同店に無くてはならないもの、一人となるに至つた。けれ共何時迄奉公でもあるまいとて四十二年ガラ紡綿絲製造の獨立開業を行つたが、多年の信用は此新規商店に色彩を附し、第一年度賣上三萬圓から年毎其額を増して、今では數十萬圓に及ぶ大商店となり、最早深田等を除けば畔柳、岩瀬等と共に市内有数の綿絲商として押しも押されぬ地歩を占めて居る。されば趣味等を取り入れる暇なく、只勞資協調の研究に志して數年前から製品請負者に利益の配當を行ふ制度を樹て以て相互の利益を計る方法を採用して居るが、社會政策を云爲するもの達は一度氏の門を叩いて教へを乞ふ必要がないか。市會議員に當選した氏は名譽職參事會員となり、岡崎都市計劃委員に任命された。

岡崎市會議員  
藥劑師

渡會儀作

岡崎市傳馬町  
電話四二三番

あの聲でトカケ喰ふかや時鳥、人は見掛けによらぬもの……なんのと俗謠氣分のしつとりする世間に之は又歌の心を逆で行く渡會氏の性格等は啣めば啣む程啣み味豊かに溢れて氣持がよい。併し誰でも一見した時は色の黒い筋骨のたくましい退役軍人でも佐官處と相場のつく、加藤高明サンでも退却しそうなムツ、リ顔は、一寸寄りつくにも遠慮を要するのは何うしたことか。だが肚裡は奇麗なも



のにてよく斗酒きこし召した後に擧げる啖可でも、理屈でも、ソは氏の真意に出するものでなくて酒の悪戯だから可愛い、ではないか。現に藥屋等と云ふ殊勝な商業を始めて居るのだから。直に肚の黒からざる事は何人にも判明しよう。氏は明治二十一年握美都赤羽村に生れ、四十年東京藥學校を卒業して直に檢定試験に當第し、藥劑師となつたものである。而して明治四十四年に藥局を開業したが、藥九増倍を貪る如きこともせず、安價供給と觸れ出したから、商賣はメキ／＼發達して市内同業者中でも相當の地位を占めるに至つた。昨年秋市會議員に當選し、參事會員にも選ばれて熱を擧げて居るが趣味は獵銃と、酒、角力も相當好きらしいが、時に艶間の漏れることもある。

醬油醸造  
酒類業

兵 藤 壽 三 郎

岡崎市松本町  
電話二六八番

氏は文久三年碧海郡上郷村に生れ、明治十七年教員檢定試験に合格して小學教育に従事した。けれども其時々刻々變轉する資本主義の社會に處して金儲けによらずば今後の處世上困難であるを解したものが、三十年には肥料米穀業を始め、三十三年には煙草の製造業に任じる等、當時の活社會に於ける有望なる商賣に手を染めつゝ如才なく生存競争場裡を游泳したものである。併し前者には同業者多く又後者は政府の專賣制度布かれるに及んで明治四十一年遂に現在の味噌醬油醸造業茲に酒類の販賣商に

變更するに至つた。因より綜合的先見の明ある爲めに小學教員を辞したる時は壽惠野村の村長に招聘され又岡崎町會議員に選ばれたこともあり、大正九年には岡崎市會議員に選舉せられる等社會的に盡した功積も尠くない。されど醬油の醸造高くて最近三百石を出たすに過ぎないから差程眼を見はる程のものではないが、併し開業當時の四十石から七倍半の石數を上げつゝあることや、士族の商法にも擬せらる可き畑遠ひの商人と變じて地味な經營法を續けつゝ今日の地位を作つたことは成功の部類に屬すものと見做さねばならぬ。老年の故か近々少々耳遠くして應待に徹底は期せられざるも意氣は尙壯にして國勢調査員に選ばれたる十月一日等は蝗のように飛び廻つて若殿原を杲然とせしめて居た趣味は書、併し何の程度は知るよしもない。

## 三河織産株式會社

額田郡岡崎村  
電話二七八番

同社は明治四十二年七月、日露戦後の不況に腦まされた經濟界の局面打開策として、太田系作氏が經營せる三河浴布工場と、服部又助氏の織布工場とを合し資本金五萬圓の株式組織として創立された織布會社である。當時の重役は

取締役社長 鳥居吉藏、專務取締役 服部又助、



取締役 清水勝次郎、近藤菊次郎、深見龜三郎、

監査役 中根與七、烏居治一郎、工務主任 は太田治作、

氏等にして、最初原動機はコルニツシユ形蒸気々機及び汽罐五十万馬力と他に原田式木造織機、豊田式輕便織機木造タオル織機合計百台を設置してタオルと白木綿の製造に従つたものであつた。然るに此の時代から織機界には一大の改革が行はれて、其爲めに折角設備したる如上の諸機械は疾くも舊式に屬し到底新式機械の製作者と對抗するを得ず、不幸落魄の運命に陥る情態となつて了つた。而して毎年繰り返す欠損は、關係者の奮闘も物の用にたら難く最早獨力で以ては恢復の術が発見されなかつたのである。然るに大正二年七月深田合名会社の救援下りて、此に漸く血脈の進行は維持されしも、併し從來の形式では、双方再度の不祥を味ふこと必せりと眺めたのか、深田の援助あると共に内部の組織に大改革が行はれ、半額減資を試みると同時に優先株二萬五千圓を募集して重役の改選をも斷行した。即ち、取締役社長 烏居吉藏、専務取締役 鶴田督亮、取締役 清水勝次郎、監査役 花井島三郎、深田源藏、相談役 深田合名合會社、支配人 長瀬益三氏等の顔觸れ通り要所に深田係の實業家を据へて陣容を一新したものである。他方之れに伴つて機械類にも改新を加へ、原動機を吸入瓦斯機關七十五馬力に改めると共に熱風式糊附乾燥機の設置及び豊田エル式小幡織機二百五十台の据へ附けを行つて、銳意内容の改良増設に従事する傍ら能率の向上を計つたから此に漸く曙光を認めて今日

の情勢を生む基礎を作つたのであつた。されば一日の生産能力は滿洲大尺布にて八百五十反、内地向丸紡木綿にて千八百反の數字を融に産出することとなり、大正四年下半期には始めて優先株七朱舊株二朱の配當を行なふ情態となつたものである。爾後毎年一割の配當を續けて居るが大戦中の好況時代には一割五分以上三割を配當して、過去の苦境を一掃し、此に左打羽の涼味を取入れることも得たことがあつたのである。而して大正八年五月には資本金を五十萬圓に増資すると同時に職工の爲め寄宿舎を増設し、或は諸機械の改良を行ひ又大正十年には原動力を電力に改めて三相交流の導正十五馬力電動機二十馬力の二台に取替へて、矢作水力より供電を受くるに至つた。更に又時勢の變遷が小幡物を不況に陥れるを看取して大正十三年七月此織機百三十一台を廣幅に改め、同時に遠洲式廣幅四十四吋三十二台を購入したが翌十四年四月再び小幡織機八十台を廣幅に改造して織機改良の情勢に落伍しないよう努めて居る。

尙現在の製品は五枚縞子、天笠木綿の輸出ものにあるが前者に於ては一日一台にて一反五分、後者は同二反五分を能力あり、而して織機は四十四吋參十二台四十二吋二百十一台を有して居る。又目下の諸積立金は六萬五千圓にて基礎は次第に鞏固を加へるようだ。



## 製糸販賣組合 額田社

額田郡岡崎村  
電話二〇九番

養蠶が農家の収入に大なる關係あるとは殊更暇々するの要がない。併し折角得た繭を販賣するに當つて或時は奸商に欺れ、又或時は不意の入費に對手から肚裡を見すかされて相場以下に投げねばならぬ場合がある。更に又時間を一々金錢に換算する商人に接しては、よし奸商に非すとも個々蒐集に要する手数を差引かれるのは己むを得ない點である。此に於て附近の農家から繭を一ヶ所に集め、大商人に對して大量販賣を行ふことが利益であるとの結論を得て、最近各所に繭販賣組合が創立せられるに至つたのは、勞尠くして効多き時代要求の、慾望に答へた適當の手段である。信せずには居られぬ。額田社の創立も目的は此處にあるが、併し同社は繭其儘を以て販賣するより寧ろ之を製糸して賣る方が遙に有利であると解し一度集めた繭を専屬工場に廻して生糸を作り以て既定の目的に添はしめんと試みる加工販賣組合の形式にある。此種の組合は原品販賣組合より一段進歩したものにて事情が許せば向後の産業組合は等しく斯かる傾向を辿ることが必ず適好の手段であると考へるに至るであらう。ソは兎も角として同社の創立は大正十年二月、産業組合法に則つて組織せられたものであるが、當時組合員は三千人に及び之等が一口五十圓の出資をなして合計廿萬圓の資金で創業したものである

されど尙組合の意志が農民に徹底せず、ソレに天狗達の存在もあることなれば、單獨繭の販賣を行なふもの尠なからず、搗て、加ふるに奸商の甘言に乗せられて動ともせば此機關を利用せず、目前の利得を制せんと目論むものもあつた。けれ共役員の説破に漸次理解も出來て、最近では奸商の姿も消へ去ると同時に小なる製糸會社十ヶ處の廢業を眺める程組合利用の空氣が農家を覆ふに至つたのは等閑に附せられない。而して最初の年度に於て製糸販賣が繭賣に比し一貫匁二十錢のヨリ多き利益を得たのみであつたが、爾後次第に額を増して四年間の春蠶に對する製糸平均増額利益は六十錢に及ぶに至つた。若しソレ個々單獨時代に比する時は剩餘利得或は一圓を過ぎるものがあるかも知れない。否な昨年春の如きは、二圓の過剩利得があつたと云ふから、大したことであらう。一方金融上に關して同社は繭の委任を受けると共に組合員の要求ある儘に時價の八掛け迄無利息を以て融通する。然らざる者には委託を受けたる日より、時價に對して利子を附し、借否何れによつても可成りの利便を享有することの出來る規定を設けて居る。他方融通資金の不足は例の信用組合から日歩二錢三厘の利子にて借り受ける爲め委託人に對する金融上何の支障も構成するようなことはない。目下の組合員は三千百五十人、百五十釜を設置して盛んに農村販賣の音韻を續けて居るが年毎繁昌することは既定の事實にて甚だ結構な話である。



## 酒造業 近藤信造

岡崎市康生町  
電話 四三二、四九番

清酒『幸泉』と云へば左黨の垂涎を禁し難からしめる芳醇酒にて、全國酒類品評會に優等賞を得たる經歷つき、左すれば開催地の東京に於て、多數の幸泉黨を有して居るのは無理ではない。昨今の造石高は二千二百石、難酒は兎も角、中部六縣では押しも押されぬ良酒の金箔つきとして自他共に許される情態にある。而して其の醸造主は近藤信造氏、天性の研究好きと、販賣方面に恐る可き腕を有する点が、今日の結果を生んだものにて、ローマは一日でなつたものではない。氏は明治十八年額田郡米河内村に生れ、祖父の慶應年間、開業せる清酒業を踏襲して、其改良と、増石とに寧日がなつた。されば中部六縣の酒類品評會には出品毎に賞を得、取り分け優等賞でも前後三回を得て居るから品質の是非に至つては説明するだけ野暮であらう。

販路は縣下と關東方面、特に造石高の半分は東京に移出して愛酒家を喜ばせて居る。其爲めに月二三回の上京は欠すことなく販路開拓にも熱心にて販賣戦にも策を練ることを怠たらない。目下愛知縣酒聯合組合の相談役として重きをなすと共に酒類に關係せざる何ものにも手を出さない處に氏の長所がある。

岡崎市専任教醫

## 細井收平

岡崎市康生町

修學の完否が身体の強弱に懸ることは殊更暇々の要なきも、第二國民の優劣が、少年時代の保健に大なる關係を有する過程を思へば、校醫たるもの、責務も更に一層大を加へるであらう細井氏は岡崎市の専屬校醫として、小學校は固より市立中等諸學校の生徒に對して日夜保健の衝に當りつゝ、今日迄七年間盡し來つた功績は尠少でない。現に壯丁検査の成績が、過去に比して隔世の觀あるに徴しても判明するが、取り分け無分別盛りりの少年に纏り易い傳染病が、氏の綿密なる衛生思想の鼓吹によつて跡を絶ち來つた等は特筆大書に價す可き業績でなからうか。無論各學校の教師の指導も考慮外に置くことは出来ないが、併し慨して運動の奨励、衛生方面の事業等に直接發言を求めて、其可否を決するものが氏である限り成果の是非褒へんも氏を度外視して、論ずる事は出来ない筈である。本年五十一歳明治八年藤川村の細川家に生れ名古屋醫專を出でて帝大醫科に學びしが業を卒へると共に今村の細井家に養子となつて、姑らく同町に開業せしものゝ、四十二年岡崎に轉居して、匙加減宜しく名を馳せ來つたが、何の爲めか大正八年現在の地位を占めて少年保健の途に携ることとなつた。職業には極めて熱心なるも、家事には無頓着、只讀書と大弓を好みて餘暇を楽しむそうだが、後者の技量は何



の程度をか、聞き漏したのが恨みである。

耳鼻咽喉科 **萩 須 績** 岡崎市明大寺町  
電話四一二番

世に不得要領の態度を以て何もかも掴ましめない男があるが、此ようなものに限つて世渡りは仲々甘く、一氣に功をかち得るものである、萩須氏の如きも其の一人にして、對話しつゝ要点を握らうとするには非常に骨が折れる。併し一向に悪い感じを與へないのは不思議にして、今日の成功も蓋し此性癖が生んだ果物でなからうかと考へて居る。殊に貴公子然たる面貌と太してえらばらない性質とは一度氏の匙加減を閲したものの、忘れ難き印象にして、明治四十一年頃開業して以來數年前迄一代の黄金時代を現出したのも原因は此處にあつたのであろう、氏は明治十四年岡崎に生れ同四十年千葉縣立醫學専門學校を卒業して醫師たる資格を得たものであるが。千葉醫專が相當令名ありし學校であつたにも拘らず、何の爲めか之れを口外するを喜ばない。成程現在では博士、ドクトルと勿体づけることによつて聲價を高かめる陋習のある際、醫專出の得業士では肩身も狭かろうが、併しソは餘りに避見にして、自己其ものを輕視した觀察である。よし母校は大學に比して程度劣つても、二十年の尊き經驗は之を償つて遙に剩餘が生じることが等閑に附してはなならない。醫者は病者を治癒するが目的にて

此目的さへ忠實に達成するものは、大學以上の被教育者である。甲路を過ぎようと、乙路を辿らうとソんな事は絶対に問題ではない。

内科外科 **村上 一 學** 岡崎龍田町  
電話二八番

稱檀は二葉ながらに芳ばしく、蛇は寸にして人を呑むの氣慨あり……なんかんと講談本の一節を借用しては恐れ入るが村上氏も幼少の折から神童、秀才等と呼ばれたものらしく、十九歳の時未だ東京帝大の豫備門に通つて居る際疾くも醫師試験に登第して、試験官に舌を卷せたものである。氏は萬延元年の二月岡崎に生れ、先祖代々醫業に携つた關係上、學校に入らずして既に月並の病氣位なれば治癒せしめる程の腕があつた。されば大學豫備門の學生時代醫師試験に登第したとて氏には寧ろ當然の歸趨と眺めたかも知れない。而して十七年現在の處にて家業を手助けつゝ患者に接して居つたが、メヌの切れ味と、匙加減の見事なところが評判になつて、内科特に外科は村上サンに限る等との信頼を得、今でも岡崎市内は固より西三一圓に亘つて深き印象を殖へつけて居る。性温厚なれ共、勝氣にして、若殿原と何時でも四つに組む素質だけは作つて置かうものと、醫術に關する新本の耽讀を怠らないのみか、種々實際試験の研究にも餘念がない。故隈侯は死する間際迄我輩は青年であるんだと云つ



て居つたが、氏も肚裡では侯同様青年を氣取つて居るか何うか。

岡崎市 都築重作  
岡崎市明大寺町  
税務課長

國税の滞納者なれば遠慮なしやくも無く強制執行は出来るが、自治体に對する滞納者の所分は左様單純に行はる可きでない。六ヶ敷き難問を解決する可く都築課長は市役所の課長席にある間も、自宅で團樂の夢を追ふ時も頭を捻つて餘念がない。課税者悪きか、納税者悪きか、簡單には断定し難きも、市民の義務に等閑なるはよいことでないがさりとて、課税者も其由つて来る處を窮めず只袖手成行に委するようでも褒めた業ではないのである。けれ共前身が税務署長と云ふ掛線通りの路を踏襲して居た氏が、一度席を更ゆるや突嗟に此民衆的觀念を抱持したのは推賞す可き態度にして、市民も固より其点に十分の理解があらねばならぬ。氏は明治十九年三月、西加茂郡石野村に生れ、小學校を卒業したばかりにて、税務署入りを行ひ、不斷の勉強を續けて畢次進級し、四十一年文官普通試験に登第したる後は、直に任官して大正十一年には西尾町の税務署長となる迄に出世をしたものである。然るに十三年十二月退官同時に岡崎市役所に招聘されて税務課長となつたが爾後今日迄市税務の大綱を握つて善處するから成績は次第に上つて他の信望は非常に深い趣味は萬何でも御座いの多方面だが

中就カルタ取りは手に入つたものにて名古屋の中京カルタ會を組織した廿五六歳頃は氏に對して四つに組めるものはなかつた模様である。されど近頃日曜日等を選んで川邊に太公望を極めこむことが樂しみらしく斗酒をあふつてカツボレ踊りを行ふ次の道樂として釣竿尾籠の姿を見ることが頻りにある

皮梅科 長島市五郎  
岡崎市兩町  
電話二五八番

長嶋醫院へは何時行つても患者が黒山のように押し掛けて居る。何か秘傳でもと伺へば誠心誠意勉めるのみと稱して、一向に鍵を握らせない。けれ共如才の無き態度と、勞力をおしまない心掛けが一見して誰にも看取せられる爲め之等が永い間の結實となつて今日の繁昌をかち得て居るのでは無からうかと思はれる。何れにしても結構なことにて終日猫の子一疋訪れない醫師等は一度氏を訪ねて其呼吸を見習ふことが肝要であらう。氏は明治十六年九月の岡崎生れ、三十五年頃東京の濟生學舎に於て醫道を修めたが、學生改革の結果同舎が濟生學舎と日本醫學校に分裂した爲め、翌三十六年退舎して、専ら獨學の方針をとり三十八年醫師試験を見事にパスして免許を得たものである。免許を得た後の研究心は燃ゆるが如く、或時は娘の猫いらず自殺で有名な故濱田博士の經營する東京産科婦人科病院に勤務して其の指導を受けたり、又或時は北里傳染病研究所に入りて辛慘をなめたり、万事徹底を



期して研究を積んだ結果、遂に業成りて、岡崎市に開業したものである。而して冴へたる腕は患者の殺到する現状によつても知らる可く、又人望は醫師會及び衛生會の副會長となつて居るに徴しても判明する而して趣味は家庭的音樂特に尺八を愛好すると共に、時に休日を利用して河邊に太公望を極め込むこともあるらしい。

皮梅毒科 萩 須 文 平

岡崎市籠田町  
電話二五三番

花柳病と對社會的の抱負、ソレは一塵持ら合せて居るが、萩須氏一人の爲めにもせし本書ではないから略として、只梅毒痲病曰く何々と由來餘り世の中に有難がらない患者を進んで治療して居るのは稍仁術に近いと云ふ可きか。固より花柳病が文明病にて、統計上日々數字を増す過程を眺め、之れにさへ携つて居れば、金輪際喰ひはすしはないと極めて、皮梅毒の修養を行つたのかも知れない等臆測するものは御勝手たる可しだが、幾何儲けよう、ソレだけ多く或種の犠牲を拂ふなれば、何も岡焼半分に疝氣を病む程のことでもあるまい。氏は明治二十一年二月岡崎の産、四十五年京都の醫專を卒業して附屬病院皮膚科に入り後東京の須天堂病院に這入つて阿久津博士指導の下に泌尿方面の研究に従ひ、傍ら肛門病院にも通つて皮膚及痔疾各般の治療法を窮め大正三年八月現在の籠田町にて開業

したものである。お客大事に腕も冴へたれば來疹者も常に絶へず、相當繁昌して居る模様にて、此分で進めは、將來不自由を啣つ如きことはあるまい。趣味は謠曲にて觀世流を學び、實に堂に入つたものであるとは同僚から聞いた實話であるが實際は知るよしもないもの、御多聞通り天狗仲間に入るこゝだけは出來そふな噂である。

醫師 齊 藤 達 枝

額田郡岡崎村

岡崎村役場の隣りに舊き邸宅風のソレでも門構へだけは御影石で作られた家屋がある。此が評判のよい齋藤病院であるが、院主齋藤氏は玄關番から、藥局の調劑、施術の助手迄平氣で一人でやつてのける近時珍らしき氣輕な醫師として村民に馬鹿に氣受けがよい。斯様に人手を借りない日常故に患者が尠少かと云へば左様でもなく、後から後へ詰めかける多數の來疹者は廣い一室に一杯、黒くなつて居るから驚くの外がない。其癖次から次へと手捌き面白く、順次あくびもさせないで患者に満足を與へて歸へらすから、間口だけ廣い白衣の看護婦助手だけ形通りに整へて、然かも客人らしき影は藥にしたりくもない風呂敷醫師の存在が、非常に滑稽をそつて來る。何うせ一人より二人、二人より三人の白衣婦人を養ふ方が、何だか醫者に估券のあるよう思はれる、妙な現代の御醫者様達には、齋藤氏の



現状に對して或は冷笑を浴びせるかも知れない。でも筆者等はやせ細つた良家の主人より、頑強な土方が浴場でわらく見へる限疾あるめに齊藤醫院の空氣が面白くて耐らない。氏は明治十三年愛媛縣今治市に生れ四十年京都醫學專門學校を卒業して四年間京都府の療病所の助手を勤め、醫科一通りの研究を積みて四十三年七月現在の處に開業したものである。性極めて温厚にて威張つた態度等は少しもなく、謙遜自ら低く身を持してお醫者様もお商賣である今日其型に十分はまつた人のようだ。

岡崎村尋常高等小學校長 額田郡幸田村  
額田郡教員協會長 伊野鯉之助

岡崎村尋常高等小學校の体操と云へば近邊に鳴らす可成り立派なものらしい。筆者は未だ之を見ない故批評も出来ないが、只一つ体操は体育が目的にて其目的さへ達すれば、外形の美醜は第二次的のものど考へて居る。されど同校へは參觀者が常に詰めかけると云ふから手足の動が体育上に及ぼす影響他の行動によるよりも遙に有効にて、彼の二動が之の二動に匹敵せらる特獨の價置を有して居るのかも知れない。又殊更他の懲慥なく共、自ら進んで之を行ふ趣味的の感想が其の間に挿入されて居るのかも判らない。さすれば時即ち金の現在、まして擧手投足の不自然を續けて他を顧みない今日時代適好の大發見にして、筆者は双手を擧げて共鳴するものである。而して此の改革は伊野氏の發案に

なつたものらしく、其動機は氏が大正四年、此校の校長として赴任せる時壯丁の体格非常に悪しく、爲めに今後の丁年者には、立派な体格を與へんとして、先づ學童の体育獎勵に、志したのがソレである。爾後十年漸次目的を達して、他校との比較に於て、將た最近の壯丁検査に於て、統計上隔世の感を催すらしい好成績を擧げて居る。明治十五年二月額田郡幸田村に生れ、三十八年師範卒業後直に幸田小學校に入りて後矢作小學を經大正四年校長として現在の學校に轉じたものであるが、趣味は書、二回を續けて郡教員協會長に推された等より考察して、相當人望のあるらしい事を窺ひ知らる。

酒造業 岩附辰治 額田郡岩津村  
電話七二四番

清酒威光、葵が愛知縣下の優良酒として、上戸黨を相當に喜ばせて居るが、併し其醸造は明治四十年に始つたものであるから日も尙淺さく爲めに品質に對して愛用者の尠少なるは免れない。けれど其次第に業界の一角を切り崩して、最初の二百五十石より今日の八百石に至る釀出高を示したのは、假令石高は少しでも急速なる進歩と見做すことが出来る。畢竟品質の優秀が此進歩を表現したのもあろうなれど又岩附氏の果斷的經營法の然らしめたことも見通す譯には行かないのである。氏は明治十年十二月岩津村の城殿家に生れ、二十二才の時、大樹寺の先代岩附辰治氏に見込まれて養子となり、此に



始めて岩附姓を名乗つたが、性果斷にして思ひ切りもよく、女々しき念等は其間に毛頭ない元來同家は嘉永年間に辰治翁が味咄醜耐の醸造に従事して爾後數代此業を踏襲しつゝ今日に經過したのであるが、現主辰治氏に至つて清酒の需要無限に行はる可きを觀て明治四十年如上味咄醜耐に之を挿んで造酒しゝが姑らくは大平無事何の故障も生じては來なかつた。されど日を経るに従つて兩者の共營に不利なるを覺へたから大正十二年遂に嘉永年來歴史のある味咄醜耐業を廢して只清酒一兔を追ふことゝなつたのは氏の立場として相當に惱んだことであつたろう。併し燃ゆるが如き勇猛心は因習を打破して爾後專念清酒の改良と販路の開拓に努力しつゝあれば、必ず酬はれる日は來るであらう思はれる昨年村會議員に選ばれ又借家調停委員ともなる。趣味は繪畫、相當のものは保藏して居るらしい。

丸二製糸株式會社  
專務取締役

清水仙右衛門

額田郡岩津村  
電話四一三番

他人の情を受けたものは報恩の義務がある。然らざれば施恩者は漸次影を没して、社會の善良なる風習は地上に姿を隠し代るに冷たき人と人との接衝が表現するに至るであらう。清水氏は恩人田口三龍社長や故田中保九郎翁等の情を常に肝銘して須臾も忘れざるよう方めて居るのは人らしく看取せられて氣持がよい。氏は明治十六年岩津村百々に生れ隨念寺學校を卒業して農業に携り傍ら養蠶製糸

業を乃父と共に經營して居つた。然るに十八才の頃他の知友二人と合して合資會社を組織し此處に業務を移して専ら精勵を續けて居たが、日露戰爭中の不況時代に見舞はれて止むなく解散、又一人にて營業を繼續する身となつた。併し破綻に類する境遇は到底満足なる經營を續けるを得ず、涙を拂ふ折中保九郎翁は氏の熱心に感じて尠からざる出資をして大に之を援助したものである。後又三龍社長田口氏に後援を受け丸二製糸合資會社を創設して三十才を出でざる氏は之が、代表社員專務となりて日夜奮闘を續けたが、天運未だ廻り來らずして小康を得る暇が訪れない。併し至誠は必ず天に通づる折もある可く、筆者は氏に對して、切に自重を祈る次第である。因に同社は大正十二年六月組織を改めて株式會社となし資本金二十七萬圓、半額拂込みにて事業を繼續しつゝあれば今に過去の苦境時期を享樂する日が來るであらう。

## 明治銀行西尾支店

幡豆郡西尾町

商業は金を貰ふが、代りに品物を與へるから其處に危險は醸成され難い。只僅に暴利乃至は不正品を取締べる限度にて、他を考念するの要も無く、又假令其間に内容の貧弱なるものが生れたとて、殊更眼を光らすに及ばない。處が金融機關、或は保險業と云つたものには、金は貰ふも之と稱する價



値物件を代りに與へないから、前者の如く取締りを、緩にすることは出来ないのである。此に於て小銀行の濫設は許されぬが又假し既得権はあつても、當局は其内容をより鞏固にして、預金者に十分の満足と、安心とを與へる手段に、他との合同を奨励する。蓋し日夜頻々として銀行合同の報道を紙上に見るのは、目的の大部が此点にあるものと見て支障無く、他方又人々の安心も強く繋がれて、入らぬ杞憂を捨てる利益も生じて来る。

さすれば大正七年西尾銀行か、明治銀行に合併せられたのも其精神は歸する處如上の圈内を出でなかつたものと信せらる可く其爲めに西尾町民が救はれたことも尠少ではなかつたのである。然らば明治銀行とは如何なるものか等、尤もらしい説明を加へる迄も無く、資本金一千四百五万円、積立金二百九十万圓、諸預金一億一千万圓と云ふ素晴らしい大銀行にて、本店を名古屋に置き、東京大阪を始め名古屋と商取引の盛なる個所にはソレ／＼支店出張所を設置して其數百數十搦て加ふるに日本は勿論海外にも一流銀行と連絡をとりて從横に取引の出来るよう仕組んだもの位は誰にも知られて居る。特に我國銀行界のキリン兒と云はれる生駒氏が、本行に陣取つて採配を振つて居るから、鬼に金棒、信用の程度に至つては底の知れないものがある。

現に銀行喰ひの石井定七に幾分嘗められても、岩石に蚊の止まつた程の痛痒も無く、日々繁昌を重ねて居るに徴しても知らるではないか。若し之が他銀行であのたなれば何うか直ぐ取付營業停止と断

は進んではすれなかつたものを流石に明治銀行の重味は此に至つて十分金箱づけになつたと云はねばならぬ。

されば此本店の西尾支店だから、信用程度等は説明するだけ野暮の沙汰、只併し大銀行を氣取つて厭やに勿体振りはしないか等と懸念するものは一度行つて見るがよい。仕損ひした足輕が殿様にベコツク如く。僅の預金の引出しでも、氣持ちの悪ひ程親切だから驚いて了ふ。他行に信用する程度の者は、同行と同様の信用をする。確實株に八掛程度の貸つけ位は顔色一つ變へずによつて呉れるから嬉しい。されば西尾町に於て預金額は一番大であり、且つ町民の氣受も非常によいのは當然であろう。然かも斯くあらしめたものは合併當時の支店長水谷淳三氏と現支店長の山本新六郎氏の功勞に負ふものであろうが、本年名古屋銀行支店の設置に伴ひ強敵御參なれど大童に活動する山本支店長の肚裡は相當苦しいものがあると想像せらる。

幡豆郡長 安藤房太郎 幡豆郡西尾町

郡制廢止は目前に迫つて居るが、併し安藤氏は最後の一日迄、自己の職掌に奮勵すると稱して、河川の改修、治水の事業、扱ては農家の副業たる牛馬の飼育奨励等に至る迄、非常の熱心で盡して呉る



のは稀らしき心掛けである。殊に富と人の向上は不可離の關係にあると稱して。双者の併行を主張し其行ふ事業は一つとして之に基調せざるものはない有様であるが成程一切の動力が、金錢によらねば購はれぬ時、富を無視しては、只枯死あるのみ、向上は愚か、現状維持さへ覺束ないのは必然である其故か、氏は産業と教育とを異身なれ共、同体と眺め、生産事業の奨励を一日廢めないで孜々力めて居るのは産業を無視した教育が物の用に立ち行かない現在に於て其見解の大部は無條件に取り入れても支障あるまい。處が斯程迄の覺悟を常に把持する限り餘程の學修者だと感造ひするものがあるかも知れないが何ぞ計らん氏は明治十一年七月、大分敷大野郡長谷村に生れて僅に小學を卒へたのみ、只不斷の努力が現在の地位を齎したので被教育者としての外形は、熊公八公と異ならない。併し學校教育は入たる道の一手段であつて目的ではないから、氏の狙ふ目的が之れを達する爲めに他の方法を選んだとて不思議はない筈。されば愛知縣廳に屬官として勤務する間も、寸時さへ空しくせず大いに努力した爲め直ぐ地方課の主席屬官となり愛知郡長ともなつて經綸を施す身となつた。而して幡豆郡長となつたのは大正十三年一月、良郡長として一般の氣受が餘程よい。

渥美郡長

## 岩瀬勇八郎

豊橋市



氏は明治二十一年十二月岡崎市若宮町に生れ、帝大法科を出で直に文官試験に當第し、内務省地方課に入つたが、後愛知縣廳に赴任して、警部兼地方課屬になり出身國地方行政の事務に、手を染める身となつた。性磊落にして、書生氣分も旺盛なれば、僅の苦勞等は屁とも思はず、ソレに研究心も極めて盛んにて、精勵よく職責を完ふしたから、幾何も無くして警視になり、刑務課長にもなつて刑事上の難問題を解決したことは一再に止まらなかつた。其後豊橋市の警察署長にもなつたが何と云つてもお役人の頭株で一度は諸方面に顔だけなりと出す必要がある爲め此に氏も豫定の階段を踏んだ譯にて署長たるの選良であつたと云ふ理由ではない。されば其年數とても一年と數ヶ月に過ぎず、次は郡長の階段に進むと見るが吞象以上の八掛



にて果して十二年二月には幡豆郡長に榮轉したが始めて得意の仕事に携つた爲め在任一年半に拘らず三和村政の二年に亘る紛糾を解決するやら、又明治三十九年以來計劃する傍から、はずれて歴代の郡長を手古づらせた豊板村の官林を整理して山脇知事の双頬を解くやら、其間に残した事蹟は尠少でなかつた。而して十三年渥美郡長に轉任したが、部下は固より郡民の氣受けも非常によく到る處で人氣を集めて居る。

西尾町會議員 近藤清七 幡豆郡西尾町

西尾町に於ける唯一の策士として、氏を知らない人は稀であろうが、併し氏の活躍する處が常に政治的方面のみに限らずして經濟界にも及ぶのであるから凄じい。嘗て平阪電燈の常務であつた時之を岡電に合併せんとして、矢作水力を拉致し來り、此兩社を噛み合せて、恐る可き好條件に競り上げさせた等、今でも斯業者の舌を巻く處なるが其牙へたる腕は地方的の狹隘なるものではなさそうである特に歐洲戦乱中の好景氣を捉へて、企む事業は一再でなく、常に銀行に姿を現して、之を利用しつゝ、金儲けに腐心し其の手段の好妙なるに何人も眩惑せざるものが無かつた。されど西尾町の議員となること二回、時に表面に立つこともあるが、大部は裏面にリスの如く飛び廻つて活動するが常態なれば

其の手段を悉く知るものは尠なけれ共自身所屬する憲政會の爲めを計つて其地盤を開拓した功勞等は少なからざるものがある。

明治十二年六月西尾町に生れ、小學を出るや野心滿々、大に其の手を伸さんと目論見て居たが、二十六歳の時名古屋に行きて扶桑新聞社に入り、主として營業方面に携つて居る中疾くも尖端を現して幾何もなく營業部長に選ばれし經歷もある。目下虎視眈々何事かを爲さんとして居るが、容易に肚裡を表さない。因に氏の實姉は鈴置倉次郎氏の夫人であつたが今は逝ひて無い。幡豆憲政會の重鎮である

幡豆郡視學 井村鐸一 幡豆郡西尾町

小學教育が社會の空氣と相容れない資料に滿載されて居ることは、識者を俟つて知らる可きでない現に『正直なれ』と云ふ教へ然かも萬人等しく何の奇異も挿入する餘地なきものですら社會に出で、は、不正直なるものに敗者とせられて了ふ例がある。まして其他に於ておや。とは云ふものゝ義務教育は國民の基礎教育であり、都市も農村もあつたものでない原則の上に樹てられて居る關係からして這二無二課程の修得に全力を注げば可なりと井村氏は考へて居るらしい。筆者には別個の意見があるが併し氏の立場として、又氏の修養範圍に於てなまじつかな異端的意見を案出するよりも、現在把握



する主義方針が危な氣なくてよいであらう。だが氏に於て持に見る可きものは對教員の關係に於て嚴然綱紀を維持する点である。由來視學の鼻毛を讀むことが、教員進級の何より適当な方法であるものと解されもし、實行もせられて居つた例は尠くないが、氏には之かないようだ。殊に官僚的態度を排して一視同仁公平に接觸する爲め管下の教員も、何んのことだはりもなく意見を開陳する。されば人々が氏の許へ行く事を伯母様でも訪問する如くに考へて餘程親しみ多い感念を抱いて居るのも無理でない。明治十五年九月東春日井郡篠木村の産れ、三十七年三月第一師範を卒業して小牧小學を振り出しに宇山を経て故郷篠木の小學校長となり、之れに勤務すること十五年、大正十二年現在の位置を占めたものであるが専ら体育方面に力を注いで第二國民の養成に盡す方針らしい模様のような。

### 西尾高等女學校長 谷口 覺 一

幡豆郡西尾町

女子の終局の使命は何と云つても賢母良妻であらねばならぬ。假令古い思想、微臭い教化であると云つても、然らば他に完全な新しき主義があるかど云へば纏つた意見を吐くものが一人もない。されば幾何古くとも別に首肯す可きものゝ永年出でざる限り賢母良妻主義が眞理であると云つても支障はない筈、只實行上に時代を取り入れて之にもとらざるよう力めればよい。昔の女大學には出で、働く

ことを教へて無かつた。併し時代が女子の活動を懲逆し來れば結婚未婚に拘らず活動するものもよいであらう。だが如何なる場合でも家庭を考慮の外に置き、子供を放任して恬と收まる等は男でも恥ず可き事、まして何時かは内助の任に携らねばならない女子としては許し難き罪惡である。と谷口氏は積極的賢母良妻主義を把持して同時に完全なる人類生活の單位は男プラス女、即ち夫婦であると主張して居る。筆者も男女の優劣論はよく聞くが、男プラス女を單位として他の單位との優劣論を行ふことは成立つが、單位を二つに割つて優劣もあるものでないこと云ふ處論は寡聞にして初耳の事故意見の出し様がない。併し餘程興味ある論旨にして斯くなれば女子に婦道を教へると共に男子にも夫道を授ける要を生じ爲めに國民教育は大革命を招來しなければならぬであらう。されば氏が農村子女を教育する上に於て單位の一細胞に農業智識を授けて居るのも不思議でなく又賢母良妻の根源を爲す保健に盡すのも當然である。明治十年四月鹿兒島縣如良郡蒲生村に生れ師範學校を経て東京帝大教員養成所に入り國語漢文科を卒業、三十九年茨城縣立太田中學に教鞭をとり、後師範幼年學校に教諭教授となつたが大正十一年現校長に榮轉して今日に至る。趣味は謠曲と、文學誠に親しみ易き人士である。



## 面尾蠶糸學校長 清水 洌

幡豆郡西尾町

ヒスイにまがひあり、眞珠に人造ある世の中に、何ぞ絹糸に之なからめや……と稱して跋扈するのでもあるまいが、最近に於ける人造絹糸の鼻息と云つたら全く凄まじふして近寄れない。其爲めに天然絹糸の繩張りが何れ程荒されたか、或る者は現状維持が即ち荒れた何よりの証左であると云ふて居るが、斯んな筆法なればマルサスの人口論等、何も耽讀する必要がない。何故つて？我生糸の、生産を左様に無限と誰が保証して呉れるか。よし無限であつても需要に制限があれば何うなる。必要の程度を越した供給は反動的悲哀を受けるが落ちであると知れ。ソレに人造の愛好せられるは天然絹糸の存在を前提とした結果に過ぎないではないか。されば終局は依然後者に食指の集まるのは必然の數であろう。富豪の懐中時計はニッケルでも他の眼にはブランチナと映じて呉れるけれ共彼にはニッケルをブランチナに見せる可く何うも良心が許して呉れないから困つて了ふ。……なんかんと筆者が意見を吐露せば大体一致したとて清水氏は之を裏書きす可き人絹の本場フランスのメイドが外出には必ず天然絹糸の衣を纏ふ事實を教へて呉れた。けれ共氏はヨリ安値なる經費を以て絹糸製出の理想を畫きつゝ寡言沈黙致々と計畫して居るのは凡てに最善を期する証左であらう。道理で對話一時間輕々無責任の放言は一句もなかつたが、されど一度出でた言句は味ふ可き韻律が非常に深かつた。氏は明治十七

年九月東京牛込辯天町に生れ、早稻田中學仙台二高を経て帝大に入り農藝化學を専攻して四十四年卒業と同時に研究室に入る、一年後埼玉縣熊谷農學校に勤務したのが教鞭を握つた始まりである。其後福島縣立農學校に轉じ、大正二年校長に榮進して同縣技師を兼務し、八年群馬縣立置賜農學校長を経て十二年現在の學校に移つたが依然技師を兼任すること過去と變りがない。性温厚にして謙讓、キザな点は少しも無く誠に氣持ちのよい紳士である。

## 西尾町 福嶋 可鋪

幡豆郡西尾町

丁度今から二十年も前のことであつたらう。幡豆一の郡邑西尾町には、到る處に曖昧の料亭があつて、盛んに風紀を紊亂し、世の若人を魅惑したものであつた。而して之に巢喰ふ白首は、少く見積つても六十人を下るようなことはない。さればロンドン巴里の裏町か、それとも淺草千束町の十二階下か厭や／＼人口も少く、町も小さいだけあつて、人の目につくことは前者のソレよりも多かつた。其上私娼のはびこる處に、花柳病の慢延せざる理はないから西尾の青年中如上の病毒者たらざるものは實に稀有の情態であつたのである。然るに突如此倫落の花町に一人の救世主が天降つて來た。福嶋氏が之であることは、當時の發展家に未だ記憶する處ならんが、氏は此恐る可き病毒を驅逐する手段



に目廻るましき程の研究を續けて新薬の移入、新治療器の購入、警察との連絡病者の自發的診察等々、と席さへ温まらざる程の活動を行つたものである。其結果目を経るに従つて、賣女の姿も次第に隠れ、病者の數も漸次に減つて、今では之ばかりを専門にしては、到底生計の程も六ヶ敷いと云ふ有様となつたのは、氏の功勞の大なる点を實証したもにて、何人も其の恩恵を等閑に附してはならぬのである。併し氏は花柳病方面の治療のみに腕が冴へて居るのではない。外科一般何んでも得意なれば、患者の詰めかける數は尠少でなく、一日中來診者の影を見ないことは無いと云ふ有様である。明治九年十月名古屋に生れ、三十八年金澤醫專を卒業して、西尾病院の副院長となり四十二年辭して現在の處に開業したが趣味は謠曲と盆栽、囲碁も少しはやるらしい。

西尾尋常高等小學校長

山本芳太郎

幡豆郡西尾町

氏は明治十五年九月靜岡縣小笠郡川ノ村に生れ、三十八年靜岡師範を卒業して小笠郡内田小學校に教鞭を執つたのが教育者としての始めであつた。常に指導方針の研究を好み、仲間中一際頭角を現して居つたが、範校を卒業して三年ならざるに、疾くも當事者に認められて、四十年八月横地村小學校長になるに至つた。爾後大正七年周知郡視學となる迄には東山口、平田等の校長にもなつて、聲名を

獨りほしいまゝにしたことがある。されど觀學としての氏は餘りに生命が短くあつたが、八年森町小學校長となり、同時に森町實科高等女學校、農商補修校、及び幼稚園等の校長をも兼ね、九年には公立高女校長の辭令を得て高等官待遇を受ける身となつた。然るに何の原因か。ソレ共給料等の關係か、十一年愛知縣に來りて西尾小學校長となり、同時に西尾幼稚園、農商補修學校長等をも兼ねて今日に至つて居る。力めて自發的の教育を尊び、之に學習上の指導を行つて、双方相合した方針の下に兒童を教育し居るが、体育方面に於ても堪練を主に保護を従として、第二國民の基礎を着々と作りつゝあるのは一定見と云ふ可きであらう。

半田農學校長

渡邊兵造

知多郡半多町

大正十二年十一月小男で有名な清水氏が西尾蠶糸學校長として赴任せし時、當時の教頭であつた渡邊氏が之を生徒に紹介したのは固より當然なるが疾くも口善惡なき生徒共は二人を捉へて『ソマトーゼ飲んだ人と飲まぬ人』の批評宜敷く尤も下手な角力取り裸足の渡邊氏に比肩されてはソマトーゼの生き看板に嗜好とされたのも無理ではない。若く氏の巨体は教育者間に定評されて、無理から身を細くする人々の羨望的になつたのは當然なるがされど偉風堂々傍りを拂ふ様は幾何ひいき目に見ても



教育者と云つた柄ではなかつた。道理で柔道四段、孔孟の教へを金科玉條にする古典的教育家には異端者に、見へたか知れないが其癖圓滿なる性格の人として何の圭角もない處、單に表面ばかり勿体氣をつけた然かも内心毒牙を磨く月並者に比して優る点は幾何ぞ。されど一度驚異の眼を眺められるも接するに従つて相手のこたはりを解く邊りは誰にも豫想が容易につく。氏は明治二十三年十一月栃木縣下都賀郡新屋村に生れ大正五年駒込農科大學を卒業したが、卒業と共に徴兵に應じて七年退營し三重縣立農林學校の教諭となつたのが教育者としての皮切りであつた。而して九年三月西尾蠶糸學校に轉勤し、未だ創立間際の同校に於て前校長及び現校長を補左しつゝ善處した功勞は決して尠少でなかつた模様らしい。さればこそ十四年七月半田農學校の校長に榮轉した後、清水校長が恰も片腕もがれし如くに之れを惜しんで居るのも氏の器が非凡である証左でなからうか。

### 西尾町 齒科醫 小野田寅男

幡豆郡西尾町

嘗て明治天皇の待醫を勤めた高山紀齋翁を恩師として齒科の醫術を學んだ小野田氏が、開業したのは、明治三十六年檢定試験に登第せし直後であつたが、當時全國に於て齒科醫たるもの僅々二百と一人、

然かも氏は此末席を我ものとして同業者の無き時なれば其の門前が常に賑つたのも想像するに難くない。而して獨專的經營を續けること六ヶ年、全三河に被診察者を有して、其間に儲け上げたお金は尠少ではなかつた。けれ共氏はお金を以て墮落の一資料と眺め、方めて之より遠からんと心掛けて居るのは、殊勝の至りと云つて可か俄に斷定し難きも、只斯くして練つた腕の冴へは遠近に汎く知られて大正四年より七年迄、岡崎に出張の上治療に従事せし時等は、毎日患者が殺到して、目廻ましき活動に身體の健康を餘程害したと云はれるから手の裡の確なことも容易に窺知せられる。其後西尾町より一步も出でず、餘暇を以て佛敎書の研究に腐心して居るが、八十の手習ひ何のそのと一字一句もおろそかにせず十分にぎん味して行くから間口は狭くとも、奥行の深きには驚くの外がない。慶應二年正月元旦、西尾藩士の小野田家に生れ、年を経るに従つて人望も生じ爲めに町長に推薦せられることも二回に及んだが之れを拒否して書生の養成を樂み、又園藝にも趣味を有して、只管野心を壓へつゝ今日に經過して居る。目下東京大阪名古屋を始め各所に開業する門下は二十名にも及ぶ情態にて此一事でも凡て行ふ方面に不徹底のない何よりの証左であらう。



# 鳥山傳兵衛

嶋みそ本家 幡豆郡西尾町

鳥山翁は慶應三年西尾に生れ、故傳平翁の創始に係るみそ醤油業に従事して今日に來つたが、現在有する醸造所は二個所而して醤油に於ては三千石、みそに於ては十五萬貫の生産能力を有し、幡豆地方第一の醸造家として自他共に許されて居る。特に同家獨特の製造に成る『嶋みそ』は、斯界の權威八丁みその壘を摩して彼れの恐る可き一敵地となつて居るが、品のよいこと前者に優るとも劣



双方に於て迷惑を被つて居るが、併し翻つて考ふる時、多年名古屋人の愛好せし八丁みその味を彼等は忘れることなき筈なれば之及び嶋みその間に於ける品質の甲乙を定め難き立派な証左とも稱し得ら

らす、搗て加ふるに價格於にて四割安と來て居るから、羽をつけて飛ぶよきな賣行を示すのも當然であらう。殊に名古屋邊りの奸商は、嶋みそを八丁みそと稱して販賣するもの尠なからず、爲めに

れるのである更に最近白色醤油の製造に従事して、獨特の香氣と、文化的調味料をモットーに賣り出して居るが、近在に好評判を博する事、嶋みそにも劣らない。斯くて氏は斯業の研究に携つに技術神に入らんとする有様なるが、一方自治的識見にも相當研へて、明治三十一年以來町會議員に連續當選し又大正三年には町長に四年には郡會議員租税及び相續税調査員に迄推されたことがあつたのによつても知られるのである。同時に息幸一氏は名古屋商業學校出の新進實業家で親父と協力して、販賣戰の第一線に立ち、八丁みその強襲を庇とも思はず、逐次地歩を占領して居るが頭の新しいのと、熱心の然らしむる處に此成果を收めるものにて若し氏の代になれば、或は光輝ある八丁みそも其先途を危くするに至るかも知れないであらう。

## 代議士 近藤重三郎

岡崎市岡町 電話四七四番

岡崎市に於て、千賀、深田、早川家に次ぐ財閥が、岡電創業の杉浦、近藤、田中家であらうと想像しても、賣卜者程に不確實な感察ではなからうと思ふ。殊に近藤家は先代重三郎翁の早逝を姑らくでも取り止めた關係上、岡電の黄金時代も見たことなれば内部の整理も十分に盡されて、尙餘力を他の事業に注ぐ暇さへあり、爲めに杉浦、田中、兩家に比しては、幾分ながらより豊であると見ても支障



はない筈である。されど當代重三郎氏の未だ廿三才であつた明治四十三年に長逝せられた事は、同家は固より岡電を始め西三實業界の汎く不幸とする處にして、故杉浦氏の逝去と共に、惜みても尙餘りある恨みであつた。而して當主は明治十九年十一月の生れ、大正二年東大農學部農藝化學科を卒業した農學士にて、卒業と共に西三事業界に打つて出で、少壯實業家として當時新人を以て、鳴らし立てたのである。けれ共流石に大家の生れとて、凡てに應揚にて邪心も無く、他に担かれる隙はあつても、本心より野望を抱かないから、何處に行くにも敵はない。かと稱して財政上の識見には相當明く、經濟上の智識も豊にて各會社に關係しても今日迄誤つた經營法を採つたことが無い故、何れも繁昌して良好の成績を擧げて居るのは、萬人等しく認める處であろう。大正五年以來引續いて岡崎市會議員に推されて居つたが、大正十三年の代議士選舉には、他の二候補者と激戦の末、壓倒的票數を得て當選し、目下我黨内閣の憲政會に屬して、少壯議員たるの飛躍を續けて居る。而して此飛躍と岡電の後繼社長に當然据はる可き位置に居る因果性から、一時陰謀組の爲めに、岡電乗取りの盟主に担かれたこともあつたが、是非に盲目でない氏は、双方の顔を立て、何れにも傷を負はさない方法をとり遂に圓滿解決のクサビとなつた等、温情味にも豊富にして自然に頭の下る思ひがする。目下酒造業を營む外みそ醬油の醸造業伊勢屋株式會社の社長であり、又岡崎殖産株式會社社長ともなつて、西三一角の財閥を固めて居るが、尙岡電の取締役としては、杉浦現社長の隱退後、既述の如く當然据はる可き位置に

あり、更に服部鑄造其他の重役として、政治的にも經濟的にも將來を非常に囑望せられて居るのは、内外何れから見ても、一頭地を抜く素質のある爲めであらう。特に愛知縣下の代議士中、科學的識見を有するものは、年少議員ながらも、氏をおいて求め難く、若し當選數回に及ぼうものなれば、我政界の重鎮として、又政治家として其名を全國に知らしめるは容易の業であらうと思ふ。まして西三の實業界に千賀、深田、早川氏等の強敵たる壘を築くこと等は、此處數年を出でない中に實現しよう。

岡崎市會  
副議長

## 菅野經三郎

岡崎市連尺町  
電話一〇二番



角力は兎も角、理屈なれば誰とでも四つに組める自信のありそうな菅野氏が、明治十年霜月岡崎に生れて小學校を卒業すると同時に風呂敷包み一つ引つ抱へながら東京本郷の或吳服店へ小僧奉公に行つた。而して主人から先輩店員に至る有象無象より、盛んにコキ使はれて歸郷したのが徴兵適齡の明治三十年。固より智識階級の住む本郷の空氣に染つて軍隊に向きの理屈屋になつた爲めでもなからうが検査には手際よく不合格の宣言を申し渡される。よつて開



始したのが呉服の行商だが、然かも一年と二ヶ月を経た翌年には假令九尺二間の小店でも此處の主人公をキメ込める身となつたものである。何うせ難境にもまれた氏のことなれば、朝夕大童になつて活動したのもあろうが、ソレにしても開店して幾年にもならざる間に疾くも四万圓の賣上を示したのは天晴出来たと云はねばならない。爾後順逆兩面の潮流に渦巻かれながらも、屈せず精勵を續けた結果、遂に今日の地歩を占めるに至り、市會議員として當選も今度で二回に及ぶ情態である。當にソレばかりか、氏の功績として推賞す可きものに、呉服組合の組織と、門東、門西等と云ふ割據的舊弊を打破して高崎市は岡崎全市民の岡崎であることを徹底せしめた二つがある。性頑固なれ共、嘘言を憎み、悪行を排して餘す處がない爲め、人望次第に加りて最初の市會議員選舉には運動費、勿驚八圓八十錢を費したばかり、さすれば二千圓を費消する自選候補者の正に氣絶するものも最な話であらう。目下副議長として、重きに任じつゝ、市租税の公平賦課に全力を注ぎ殊は家屋改正は吾人の使命として常に研究を怠らない。市財政に就ては自から博士を以て任づるだけに其の研究も必死的であり。趣味又依然理屈であると稱して居るが、酒を飲めば根本から崩れて了ふ故に笑はせる。

### 眼科醫師 美甘式太郎

岡崎市傳馬町  
電話七四六番

醫師の繁昌と國民の保健とは昔から反比例の法則を樹て、居る。處で幸か不幸か一般に醫院病院では例年に比して患者が夥しく減少し、下手なお醫者さん等は他人の死を救ふは愚か、自分の口許が何うやら怪しくなつて來た。併し腕の冴へたるもの、お世辞の甘い處では病人の減少等。何處を吹くかと云つた体たらくに憎らしい程北叟笑んで居るのが窺はれる。美甘氏は内心微笑の禁じられない人か否かは保証の限りでないが同氏の經營する美甘眼科醫院では朝から晩迄患者の詰め切り、お影で助手と二人が汗みどろの大童とお目出度き限りである。氏は明治二十六年六月握美郡二川町に生れ、大正四年千葉醫學專門學校眼科を卒業したものであるが卒業と同時に東京の河本博士醫局で四年間同博士指導の下に研究を重ね、大正八年二月岡崎で開業するに至つた。容貌が女にもしてほしきやさしさど温厚なる性格が人氣を呼んで未だ三十歳を幾何も出でず、然かも開業して僅か六年と云ふ短日月なるにも拘らず疾くも岡崎市内に於て眼科の權威者となつたのは小氣味悪い程の成功である。趣味はなし、只必死に患者に接して寧日のない現状が氏をして微細も他に指を染めさせない爲めであらう。

### 辯護士 判治仙吉

岡崎市能見町

名古屋と岡崎を股にかけて辯護士家業を營む判治氏は磊落者として世既に定評あり、年齢四十を越



ゆるも氣持は今尙學生時代と異らないのが頼もしい。由來辯護士は其成功を策略と自己宣傳に正比例して得られるが、併し氏に於ては餘りに正直にして無策、特に自己宣傳が大の嫌ひと來て居るから頭角を現す可く機會が容易に來ないのを憫れとする。明治十八年幡豆郡吉田町に生れ岡崎中學熊本五高を経て京都帝國大學法科に入り明治四十五年同校を卒業したる法學士であるが此當時は志を實業界に向け住友總本店へ入社した。けれ共アノ元氣な身体で何う間違つたのた病氣が絶へず爲めに大正三年十一月先づ退社して東大に遊ぶ身となつたが程なく健康も恢復したれば大正四年八月藤田組大阪亞鉛工場に入りて文切型の事務に携ることゝなつた。何うせ實業界に投ずる程の氏だもの、金銭か嫌ひと云ふ理が何んであろう。大戰中世の好況に乗じて投機に手を出ししこたま儲けた金が勿驚百萬兩、併し根が正直にして柳の下には縮が極つて居ると考へた爲め彼の反動時代に逢著して元の木阿彌とは榮枯盛衰の例があつても餘りにもろくして氣の毒である。此に於て大正十年九月藝が身を扶くる不幸に陥没して辯護士稼ぎの現状沙汰とは痛々しいソレに就ても物事は相談づくめだが此正直者を聲援してやつては如何であらうか。

火防團長 鈴木 鉞次郎

岡崎市伊賀町  
電話八五九番



大正十二年二月岡崎の公設消防團に對して私設の火防團が組織せられたが、何を云つても消火思想の自發的涵養者が作つた團體丈に腕力辯舌に於ても一騎當千の猛者許り、扱て結構の企てとは思考せられるもお山の大将は吾れ一人と氣取る手合に閉繞せられた關係上何れを物色しても統卒者に適當者が無い。折角こんな結構な團體が出来たにも拘らず中心人物がなくては向後の活動上に支障を感ずる依て討議した結果鈴木氏なれば何人

も十分に服従すると決し委員は早速其旨を齎して越次郎氏の口説落しに従事したものである。併し氏は十二年前から絹糸製造の業に従ふも消防團長とか町總代とか市會議員とかの名譽職に擧げられて家業は一切夫人委せにした爲め他の同業者に拔擲せられる場合が尠くなく爲めに斯くては果てじと爾



後は自ら家業の先頭に立つて遅々たる過去の業績を挽回せんとした時であつた故一向に心を動かさしむるにしない。其爲めに動々ともせば同團は或は解散するかも知れ難き情勢を示すに至り前途は極めて樂觀を許さない模様に出たが爲め之れには流石の氏も弱らせられて了つた。而して遂に火防團長となつたが此一事を見ても氏の人望が決して御座なり物でないことを容易に知ることか出来る。氏は明治十一年岡崎に生れ若い時には大阪や大平の紡績工場に勤めたこと云はれる程波瀾のあつた人であるが岡崎最初の市會議員中氏も亦其一人であつたことは改めて説明する迄もない。趣味は何ものも無く只酒が一番好き蓋し英雄の一條件を確に持把する處が世の不思議を如實に示して居る。

### 材木業 前田 和五郎

岡崎市康生町  
電話一〇九番

大正九年の岡崎市會議員選舉に、二十九歳で當選し、市會始つての記録を作つて、大いに青年の爲め氣を吐いた前田氏が、其後再度逐鹿場裡に出ず、三代連綿たる材木業に携つて、自重保守、只管商賣大事と専念して居るのは殊勝なる心根と云はねばならぬ。氏は明治二十五年四月、岡崎龜井町に生れ、明治四十四年岡崎中學を出でた純岡崎つ兒にして、前きに習つた歴史から、三代目の輕舉が、兎角家運を毀ける因果性の纏はるのに氣ついたので、只大正七年に製材場を新設せし以外、舊套固持

の方針で進んで居る。けれ共積極的に發展策を講じない過程は、幾分身に緊張味を欠ぐ必然性を招來して、動ともせば商賣をやりつ放しの姿におく嫌ひが窺はれないでもない。其爲めでもなからうが、同家の店頭に入爲的明るみ以外、發辣なる新空氣の漲つて居る様子の無いのは遺憾である。けれ共流石に新教育を受けた氏丈あつて、今に何か事業を起さん計劃にあるようだが、未だ具体案が無いと云ふから、實際化するのは何時の世か知り難い。夫にしても既に三代に及ぶ確乎たる地盤を、殊更利用しないのは何んな者か。然し眼れる獅子は何時かは起きる時があるであらう。況んや豫備少尉なもの

### 辯護士 大崎 竹次郎

岡崎市康生町

辯護士と云へば、今でもお役人か特種權力の職業と解して、厭やに威張りたがる。又威張れば益々豪く見へると定めて、怪しむ處がない。けれ共内容を割けば、客あつてこそ、始めて暮らせる他の商賣同様、ホンの社會的分業に過ぎないから、當面者も、小しは思慮を廻らせて今後の善處に取り掛らねばならない。而して大崎辯護士は何時此處に留意したのか、力めて辯護士の民衆化を、實現せしむ可く、精勵して居るのは天晴れである。殊に平民的な顔の造作は、寧ろ滑稽を感ずる程に親しみ易く、若しアレで今一つお世辭を振り撒く手を覺へたなれば、氏の理想は幾日ならず達成せられること



を筆者は保証するものである。併し氏にお世辞を求めることは、或は無理な注文か。何故なれば、明治十二年の師走、名古屋に生れて、中學に通ふこと二三年、後廢して明治卅三年に裁判所書記となり此に自活の道を構せねばならない多忙なる日常を續り以て終日机との首つ引き以外に、世間の諸相と没交渉たらざるを得なかつたからである。更に稅務屬となり、又台北地方法院の勤務者となつて、社會の特種的空氣を吸收する事實に廿年の永きに亘つた事も、大なる原因として數へねばならない。されど後官途を退いて、大正十一年九月、氏が四十數歳の時辯護士試験を受け、之に當第して、以後辯護士業を開いた勇氣は、何人も之を買つてやる可き價值があろう。筆者も彼を男にしてやる可く努力する。と同時に斯んなオールドボーイを世間ら捨てるのは良い慣習を作る手段でないと思つて貰いたいものである。

## 醫學博士 渡邊

裕

岡崎市材木町  
電話二二八番

鼠の尻尾や海鼠の腸等を顯材にした博士論文が何かの氣まぐれにバスして天暗醫學博士で御座いと乙に澄まして居るものゝ、扱て對照者を人間に選びし時カラ駄目の疹察を行つて輕病さへ尙不治の難病に轉化して呉れる竹庵以上の先生達は尠くない。然らば渡邊博士も其仲間の一部屬か等と早合点す

るは、姑らく待たれよ。氏は明治二十五年岡崎に生れ大正六年大阪醫科大學を卒業して、京都醫科大學の研究室に衛生學内科學。及び微生物と微生物化學を研究する事七年餘、取り別け微生物及び衛生物化學は得意中の得意科目にして、大正十二年三十一歳の時『細菌と種々なる消毒濟との反應上に於ける關係』と云ふ論文を提出して醫學博士の學士號を得た一事に徴しても判明しよう。固より七ヶ年研究室にぞち籠るだけあつて醫學の研究修養は飯と煙草に次いだ大好物、さすれば今とて之を中斷するやうな不所存者でないことも知られるが、大正八年流感の猖獗後其豫防方法並に原因に就て大毎京都滋賀附録紙上に京大を代表して京都府衛生課と大論戰を試みたことや、大正十一年大日本醫學會總會の席上にて、細菌の拮抗作用を論議し以て疾くも青年醫學者たるの名を我學界に馳せたなどは、氏の修養も單なるお座なりでないことを立証して餘りがある。殊に野菜や果物に附着せる菌類が河川の水と不可離の關係にあるを摘發して東京京都の兩市に其洗淨場所を一定せしめた如き細菌學に對する見識は既に一家をなして居るのである。果して然らば其經營する徳光堂に日常患者が群集して、爲めに玄關は下手な下駄屋程にも履物の竝立せるを見たどて不思議でない。而して趣味は藝術品の觀賞だが此方面の見識眼が御本業程に冴へて居るかは怪きものにて又保証の限りでないのも當然の話である。



## 畔柳昇二

岡崎市傳馬町  
電話七二二番



畔柳氏は明治十七年知多郡大高町に生れ、名古屋の中學を卒へて慶應義塾に學びしが、在學中、畔柳八十次郎氏の養子となつて舊姓近藤を廢し、畔柳姓を名乗るに至つた。而して養父八十次郎氏は一代之して今日の富を作つた程の猛者なれば權謀もあり術數もあつて凡てに大膽なる行動を採つたが、昇三氏には之が無い。けれ共其地味なる態度は先代の放散したる諸事業を纏めて翁の死後畔柳家の動搖を防ぐに尠少ならざる効があつたのである。換言すれば八十次郎氏の引つ散らさせた各種の事業を整理して一先づ畔柳家百年の地盤を築き上げた点に氏の眞價があり功勞が窺はれるが此一事は先代當代の杉浦銀藏氏と其趣きを一つにするものがある。されば氏の經營する畔柳商店の事業は必ずしも華々しいと云ふことは出來ないもの、併し

其基礎は大石の如く月並の力を以てして貪乏搖さ一つさせようにも思はれない。斯くて此地味なる性格は次第に人望を蒐めて大正九年には岡崎市會議員にも選ばれ副議長にも選舉されたが正直なる氏は國道問題に意見を異にし議員を弊履の如くに打捨て、爾後専心業務に携はることゝなつた。趣味は無い。けれ共機械の取つけ、建築の設計等を他に委ねないで自ら之に當り然も何んの支障も起さないと云ふから下豪い隠し藝があると見做さねばならぬ。

## 齒科醫 竹村幸三郎

岡崎市康生町  
電話六七二番

明治二十三年刈谷に生れた氏が、高等小學校を出たばかりで、大年四年齒科醫檢定試験をパスし、天晴齒科醫の免許取りとなつた二十餘年間に於ける、苦闘振りには實に波瀾重疊を極めたものである。何うせ之れだけ腕があれば、開業した後とて、他に遜色す可き理なく、數年出でざる間に疾くも會長に選ばれて、今日迄重任を重ねつゝ三期に及んで居る過程を眺めても、凡輩に出色して居ることが立証せられるではないか。而して氏の齒科醫たる技術もさることながら、會長としての手腕にも、亦見道し難き非凡の力がある。今日同組合の總會に於て、殆んど出席者を見る稀らしき事相に接したのも氏の策謀に出でたものであつた。定刻より二三時間遅れることを以て常態とする名古屋時間を把持して、恬



と恥づ無き、名古屋の齒科醫に灸一本すへつけて、せめて岡崎の關係する會合だけには時間嚴守を斷行する証文一枚を入れさせたのも氏の策略から出た。更に、又岡崎小學校の囑託醫として、勞相應の支出を役所に致さしめたのも氏の力に出でたものである。されば若し、家情許して氏の進路に金錢を満足に投じたなれば、へつぽ博士位の上枚をはねることは、容易の業であつたかも知れない。負けず嫌ひで向行強く、趣味も多方面にて囲碁御座れ、繪畫御座れ、何んでも彼でも取り容れて居るが不思議にも、一つとして拙劣とけなし去るものは何ものもない。而して目下菊いちりに餘念がないが向後果して何んな花を咲かせるであらうか。

額田郡視學 村井猪作 碧海郡六ツ美村

小學教員の進級が、視學訪問に正比例することは、愛知縣にはなからうが、他縣にはザラにあるから困つたものだ。然るに村井視學が大正十年七月、現職に携つてからは、小學校令の遵守と共に、銳意此点に留意して、極めて公平なる態度を把持せんと、時に自己の見解を、先輩知遇に披見して、其誤れるや否やを、たゞしつゝ、專念惡弊の來らざるよう力めて居るのは頼もしき話と云はねばならぬ氏は明治十五年五月碧海郡六ツ美村に生れ、同三十七年三月、日露戦争の火蓋を切つた當時名古屋師

範を卒業して、直に第二の國民を養成す可く、同郡大濱小學校に這入つたものである。而して四十一年三月には疾くも故郷六ツ美村の小學校長として錦を飾り、郷土村民の養成に携はることゝなつた。而して視學に榮進したのは大正十年七月にて、日常物質的精神に捉はれざる決意を持つると同時に、他面菅公を崇拜して、配所の月を眺めし當時の誠忠に、あやからんと心掛けて居る。されば在職五年未だ世の非難を受けたることなく、又他を連想しての色眼鏡越しに見られる氣配も纏はつては居ないようだ。趣味は廣く淺く、教育上を資料に當はまる程度と云ふから押しして知る可きのみ、只職務に趣を持つて居る点が、他に求め難い性格と云ふ可きか。

皮微科 兒玉豊次 岡崎市門前町 電話四一〇番

醫者は患者に對して活殺の決定權を有して居る。然らば之に自由競争の商賣心を養はしめる時は其弊害實に恐るべきものが生じて來る。同時に醫者自身も商人的經營を欲せざる者が多いから何うしても醫業の國營を斷行をして向後來るやも保し難き醫術の墮落を未然に防がねばならないコンな意見を大正九年來固持して機會ある毎に主張する兒玉氏は本業の花柳病にも亦相當の定見を有しつゝ、社會の眺める對花柳病の精神を更改せねばならない事に研究を續けて居る。蓋し金儲け主義の醫業に墮する



最近の傾向を眺める時、筆者も斯かる精神的同情透視力のある醫師を得たことに多大の強味を覺へたのであつた。而して昨今の醫學雜誌に現はれて來る醫學國營論は必然將來に實現するの可能性を有し又同時に花柳病をも他の傳染病と同様に觀察する時期の來る可きを吾等は確信するものである。氏は明治二十四年額田郡常盤村に生れ大正三年名古屋醫專を卒業して附屬病院に研究すること三年、大正六年岡崎市に開業したのであるが社會に對して幾分の不平家であるらしく思考されるも併し病人に接しては同情心深く彼の關東震災に救護班を作つて出勤し身体綿の如くに活躍しても罹災者の感謝と喜を見れば直ぐ疲れが去ると云つた型の人だけに日常來る患者も尠少でないようである。

岡崎消防  
協會顧問

小野量平

岡崎市傳馬町  
電話七二八番

量平とは何時の世につけた名前か家業の度量衡商とは縁餘りに遠からずお影で家運平穩を常に保ちて今では岡崎市内一流の斯業者と自他共に評すの情態だが併し性格迄名前通り平穩を量つて居ると見てもは大間違ひ。其キビ／＼した向意氣、眉宇の間に溢るゝ滿々なる霸氣、若し戰國時代にも生かそうものなら一城の主は兎も角一方士大將位には結構なれたであらうと思はれる程雄々しき点がある。けれども如何にせん氏の岡崎に生れたのは明治二十一年六月のことであつた。故に維新の政變にも間に逢

はず日清日露の兩役にも年少の爲め揚卷の初陣を試みるよしもなかつたのは千年の恨みである。此に於て明治四十年三月岡崎中學を出て度量衡と獵銃の兼營に従ひ又趣味の遊獵にて僅に鬱憤を押し包んで居たものゝ、固より氏を満足せしむ何の効用もなさなかつたのは當然にして何時かは一旗擧げん機會もがなど虎視眈々する折柄、天は大正八年氏を以て公設消防組頭に任じ之に大改革を斷行せしむべく使命を授けた。よつて小野組頭は直ぐ組合の素質器具改良、水利の便宜を解決す可くムツソニー式の武斷政策を以て僅かの間に物の見事目的を成就せしめた者である。斯くして一躍名をなした氏は大正九年市會議員にも選出され參事會員にも推されて得意の活躍を續けたが一期にして勇退し目下愛知縣度量衡協會幹事西三市五郡度量衡販賣組長、愛知縣銃砲火藥販賣組長、青年團顧問、在郷軍人會幹事、消防協會顧問と一人で背負ひ切れない程の名譽職を平氣でかき裁ひて居る。趣味は銃獵但し窮鳥懷に入つた際は之を大事に手飼ひとする程の善人だから其点は讀者諸君の誤解なきよう豫め註を附して置く。

醫學士 山中貞三

岡崎市門前町  
電話一三四番

貧血病に『カルチウム』鹽を注射して赤血球の補給を促進せしむる實驗に功を奏し我醫學界に一躍



名をなした山中氏の醫院は何時行つても多数患者の絶へ間がない。氏は明治二十二年頃碧海郡の旭村に生れたが家代々の醫業は氏をして幼少より之に志を抱かしめ其結果小學中學を卒へて大正二年に大阪高等醫學校を卒業し一先づ目的を達成する身となるに至つた。けれ共醫者の學歷は患者を吸引する上に密接なる關係を有する爲めか卒業と同時に東京傳染病研究所に入りて研究を積むこと一年餘、後日本赤十字病院に勤務して傍々内科を研究したが大正六年久原鑛業株式會社に招聘されて同社の經營する沖繩縣鑛山醫院に赴任することゝなつた。赴任して然かも半年疾くも參事に進み同鑛山所長の空席生するや之が後任所長に選ばれて此に本業とは似ても似つかぬ事務をも兼掌したが、何うせ遙か離れた一孤島の鑛山所長だ者其方面に専門知識と云ふようなものは必ずしも必要でない。只鑛夫を使ひこなす腕さへあれば十分の成績が擧げられることを看取して全身愛嬌かと思はれる氏の天性は専ら對使用人に温情主義で接するよう力めたものである。さすれば其結果が前きに欠損せし額七萬圓を補填して尙五萬圓を得し以て士族の商法と云ふ厭やな法則を根本から覆へしたとて不思議ではないであろう。其後氏は久原の研究生として大阪高醫が單科大學に昇格するや、再度此校門を股いで病理學を佐多博士に學び大正九年論文の提出と共に醫學士となるを得た。而して大正十年退社と同時に岡崎で開業したが患者に對して親切であり且つ技倆も優秀なる爲め日常來診者で門前市を爲す仕末である。

神谷胃腸  
脚氣醫院

## 神谷 旬次

岡崎市康生町  
電話二四四番



眼が悪い爲めか、ソレ共眼を一層よくせん爲めか、神谷醫院主の神谷旬次氏は、アレキサンドル色の、色眼鏡を年中掛けつ放しにて之を透しながら患者も疹察すれば、社會の諸象相にも接觸する併し其爲めに未だ誤診をしたと云ふ噂のない處を見るとき、色眼鏡必ずしも、黒白を誤るとは断定し難い。さりとて内臓の治療上に、特別の手腕を有するかと反問されても筆者は答辯に窮するが只一つ脚氣に對しては、數年前獨創的の治療法を案出し、之によつて幾多の患者を治療せしめたと傳へられる故或は相當を自信を把持して居ると見て必ずしも間違ひは起るまい。氏は明治十六年一月生れ、出生地は安城町にして、明治四十二年の愛知醫學專門學校出身者、卒業と共に同校の研究室に入つて一年研讀の重ねたが後和歌山縣新宮町の東病院副院長



長として招聘され此處に勤務すること一年有半。期の満つると共に岡崎市に移住して自ら醫院を開業し、可成りの繁昌を示しつゝ、今日に經過して居るものである。性柔和、事を決するに煮へ切らざるも一度決したなれば何處迄も之れを遵行するの誠意を有する。趣味は文學と繪畫、特に和歌と俳句は脚氣の治療以上に手に入つたものであると云ふから豪い話だ。大正九年岡崎市の同好者が集つて光風會と稱する如上の研究を兼ねし交誼機關を組織したが現在會員は總數四十名、其中でも氏は總務格に位置す可きものであると見做されて居る。

岡崎米穀取引所理事長 **石原宗一郎**

岡崎市六供町  
電話四二六、五四六

米穀の標準價値を決する取引所と云へば乙に聞へるが、或者には之れが純然たる賭縛と見做される程、社會的に必要でもあり又不必要でもある謎の機關をせめて岡崎だけでも現物米穀の取引市場とせんと意向で飛び廻つて居るのが石原氏である。氏は須叟の間も静座するが嫌ひにして時計の振子と同様間斷なく活動を續けつゝ、蝗のように身軽く東西に敏捷な姿を現して仕事は固より劃策もする。ソレも平凡なものは人委せにして獨創的案出に寧日が無い。明治十年九月岡崎に生れ、同二十五年額田郡立高等小學を卒業して後は専ら力を祖先傳來の薪炭業に注いで居たが波瀾好きの氏に斯様な端座の商賣

が添ふ可き筈なく何時の間にか取引所の門をくゞる身となつて賣つた買つたの男商賣に味を占めつゝ、世の中を大きく暮さん計劃を樹てたのであつた。幸に何事でも達成せねば満足の出來ない氏の性格は米穀の取引にも寢食を忘れて携つた結果賣つて儲け買つて儲け始らくの間に巨万の富を作つて大正十年の一月には岡崎米穀取引所の理事に選ばれ又同十三年八月には遂に理事長となつて同所の盛衰を一人決する重任を續ける身となつたのである。趣味は金儲けと營業の發展を計る策案以外に何ものも無いが其癖日露戰役には現役下士として沙河附近迄進出し、天晴れ露助の心膽を寒からしめた今様武士としての經歷があるから不思議である。ソレにしても武士は喰はねと高揚子とは昔のことか……筆者は時代を忘れて居つた。

中村屋吳服店 代表社員 **谷口久次郎** 岡崎市六供町

谷口氏は明治十八年の岡崎生れと云ふから本年正に四十歳を男盛りであるが何う發心したのか其經營に係る合名合社中村屋吳服店を令弟と義弟に委せて悠々別荘に自適し、只々遠方より之を監視しつゝ、新刊書の耽讀に日常を過こして居る。生來の負けず嫌ひと、單刀直入に相手の肺臍を突く性格が、殊更頭を疊に叩きつけてお世辞の百萬べんも云はねばならない商人に不向きと自認したものか、さりとて餘りに呆つ氣のない話である。けれ共氏の好む論争は小學を出ただけとは何うしても考へられない



程の基礎の上に樹てられて居るから大正九年市會議員に出でて敵には大介嫌はれたが味方には相當崇敬を拂れたものであつた。殊に國道問題にて紛糾を重ねるや氏等は上町布設を支持して下らず、大勢にウント反抗した爲め他人は辭職の前提と迄思つた處、仲裁するものあつて無事に濟んだ當時未だ三十有七歳の青年議員であつた谷口氏等の先陣は實に物凄い程の活躍振を示したものと云はれて居る。後參事會員にも擧げられたが一期にして又再び出でず只管自己の知識を練つて居る模様である。書畫の玩賞に興味を有し悠々閑日月をてお送つる。

ドクトル  
村川正雄  
岡崎市十王町  
電話三四五番

醫者は病氣や傷を療すのが目的である。故に癒すこと其ものに就て研究でもすれば一廉お醫者様で御座いの風呂敷も擴げられると思つたら大間違ひ。然らば奈何？他なし病氣の由つて來る處をも闡明せねば投藥の施しようがないではないか……なんかんと脅かすのは先づよそう。諸事一つとして原因を知らずに結果へ善處することが何うして出来るか。此に於て村川氏が大正六年渡米後シガゴ大學に入學して其間腎臟の機能に關する諸現象並に其分泌の形体に就て各種の方面から研究し千九百二十一年目出度く卒業、大正九年歸省と共に尙島瀉博士の門に入りて技を練ること三年大正十年岡崎市十王町で開業したが流石に洋行歸りの新銳醫師を迎へること市民は極めて熱心にて扉を開くや患者は殺到し、此許診察治療に大童の姿とは美まじき限りである。氏は明治十九年五月岡崎に生れ大正二年慈惠醫專を卒業して専ら外科方面を研究したものであるが見かけの馴れ／＼しき態度は患者にも好感を與へて評判は頗る良い模様である。併しアノ如才なき面貌を以て、趣味は讀書、以外に何もものななく遊び事は全然嫌ひと云ふからアツサリして居る。

耳鼻咽喉科  
和田三郎  
岡崎市康生町

氏は明治二十九年十月静岡縣磐田郡掛塚町に生れ大正九年名古屋醫學專門學校を卒業した少壯醫師であるが學生時代から中村博士の許にあり卒業後も其指導を受けた關係上年は若くても腕は可成出来るらしい。大正十年岡崎市康生町に開業して後は何時も患者の絶へることなくお家繁昌家庭平和同業者の美望を集めて居るのはお目出度き次第である。性温厚にして殊に氏獨持の面貌は宛然昔の蛭子様を見る如き觀があり搗て、加ふるご日常ニコ／＼一寸も先生らしく振舞ない處に氏の價値に現れて居る。何うせお醫者様も商賣なれば今後餘り乙に澄すものが凋落するのは受け合ひ、ソレにしても若き身空で斯かる如才が無いのは益々繁昌するシンボルと筆者は十分に保証をして置く。



趣味は園藝併し患者の快癒を見る方が一層楽しみだと云ふからお百姓さん程に手に入つても居ないのである。

米穀取引所相談役 菅野 鉦治 岡崎市明大寺町  
東海製菓監査役 電話六一七番



年相談役の閑職に就く迄の十六年間同所に貢献した功勞も亦枚擧に暇がない。性温厚なれ共黑白を區

別する点には大膽にして、一度火蓋を切れば何處迄も突つ張るだけの勇氣を貯へて居る。而して此態度が未だ嘗て氏を禍したと云ふ風説さへ聞かないから主張は凡輩のソレと軌を一つにしない証左と見ることが出来るではないか。大正七年東海製菓の監査役に選ばれても、よし眞向から世の經濟界に打つて出ない身とは云へ之れとて相當の貢獻をして居ることは暇々す可くもない。趣味は八方何でも御座いの多趣味者だが特に俳句は手に入つたものにて近詠の左句を見ても濫蓄の程が窺知せられるであろう大正五年岡崎市制が施行せられるや、衆望を担つて、市會議員となり市參事會員に擧げられた。

春泥や今日の舞子の塗木履

× × ×

戯れ繪師や木槿花咲く上根岸

辯護士 澤田 鯉次郎 岡崎市康生町

内田辯護士と共に、岡崎市内少壯辯護士として未來を囑望せられて居るものに澤田氏がある。氏は明治三十年五月西加茂郡石野村に生れ、大正十年明治大學法科を出で、其年直に辯護士試験に當第し、一ヶ年間を民事辯護の權威高橋喜八郎博士事務室で研究、見習ひに費した。而して歸郷後、岡崎市



に辯護士業を開き、今日に經過する、新進智識の享有者である。性稍々温厚に似たれ共、永き書生々活の面影が残る爲め、乙に碎けて遠慮がない。故に此調子で進むならば今に先輩を凌駕して、名を獨りほしいままにすることが容易であらう。

禿頭を光らせつゝ、歳や感情で辯護の能事了れりとした時代は、日々展開する進化の浪にさらはれて行く。而して残るものが新智識の合理辯護に携るものとしたなれば、氏等の前途には光明が彌やが上にも輝いて居ると云はねばならぬ。

昨近囲碁に趣味を持ち始めた云ふが、ザル碁の域を果して脱せるか奈何。又旅行が好きならすが、之ばかりは、金の有無で上手下手を決定するから批評の限りでもなからうでないか。

婦人科醫師

西尾

進

岡崎市康生町  
電話三六八番

秀吉が出るか家康が生れるが何れにしても尊き人間一人を完然に沙婆へ出そうとする仕事は産婆と共に産婦々人科の醫師が担ふ天使であるが西尾氏も與へられたる使命を了得して日々訪れ来る患者に接して倦まず努めて居るのは忠實な職業人と云はねばならない。而して四六時中の診察に於て僅か一分の差で嬰兒を明るく此の世に出した欣びにより終日愉悅に彩られることもあるが、又一分遅れた爲め

にあたら暗から暗へ葬らねばならない不快を思ふこともある。何れにしても他の醫師と違つて完全に生かすか殺すかと云ふ危機一髪の重大な職業に携つて居る爲め日常油断も隙も無く爲めに心配も非常なものであるらしい。其爲めではなからうが明治二十五年四月岡崎に生れた氏が疾くも頭を禿がして居るのは氣の毒の感を催して来る。明治四十年岡崎中學校に入り大正五年京都府立醫學專門學校を卒業して、直に京大に入學婦人科研究室で研究すること一年有半、學を卒へて越前三國病院に招聘され此處に勤務すること五年餘大正十一年岡崎に歸郷して開業したものである。性質直にして他に對して餘り厭な感じを催さしめるようなことはないが、無趣味只使命遂行の最善を計る点に之を求めんと力めて居るのは殊勝と云はねばならない。

醫師 山本敬三

岡崎市十王町  
電話一三三番

敬三氏は明治二十二年一月寶飯郡國府町に生れたが豊橋中學を卒業せし頃岡崎市十王町山本醫師の養子となつて京都の醫專に入學した。卒業せしは明治四十四年の初夏にて直ちに養父の業を襲つたが親の光は七光のたどへ通り固定せし得意の數も尠少でなく家運も日を追ふて隆盛に赴いたのはお目出度き限りである。性小心にしておとなしく蓄財の能に至つては他の醫師の遠く及ぶ處では全然ない。



研究心の有無如何は知らざれ共御商業大事と夜に日に次く活動は氏の身体に何の影響も齎さないと云ふから凄じい話である。でもお商賣がお商賣だけに十王町の衛生組合長は何時も氏の處に廻つて来る何うせ損の行くことでない故、敢て拒まないが氏の立場としては迷惑も時に生ずるであらう。醫業の營利化は今更始つたものでないものゝ、氏等にはモンキリ型にはまつた制度として日常拍手を打つて居るかも知れない。趣味は何ものもないが金儲けには三日四日不眠不休で居ても平氣の平さ。蓋し岡崎醫師の中變つた人の一人であらう。

## 奥津製糸株式会社

幡豆郡平阪町  
電話 七番

世の中の事業中、製糸業程波瀾万丈を極めるものはない。故に其決算も十年を一期とせねば、眞の利益、欠損が出て来ないこと云はれて居るのも尤ものこと、然かも此中にあつて平常一割を永年に亘つて配當する奥津製糸株式会社等は、業績の特に良好なるものでらう。同社は明治四十二年、五萬圓の資本金で創立されたものなれど、前身は奥津製糸合資会社と稱して、明治二十九年、中村平左衛門郷忠三郎杉浦茂左衛門氏等の發起で未だ縣下に製糸業を營むもの少き時、設置を見たる歴史に彩られて居る。されば昨今眺められる隆昌の三河製糸業に先鞭をつけた先覺者として尊敬の念を拂はねばな

らないが、土地が交通不便の避村であつた爲めに、株式会社となつても、生産販賣兩面に進捗の度合薄く、業績は遅々として積まれるに過ぎなかつたのは遺憾である。其中に我事業界にはカーテル、トラスト等が盛んに行はれて、遂に三龍社の飛躍となり、奥津製糸会社も其爲めに大正三年十萬圓の増資を以て打ち止めとし、七年三龍社系統の人々に買収せられて了つた。併し奥津の名稱は古き歴史を飾る爲めにも、存続せしむる要ありて、依然同社の上に冠せられて居るが、内實は田口百三翁、田口東一氏等の把握する處にて、曩きの發起者も多少關係がある。而して田口東一氏は之が常務となり、慶應理財科に學びし新智識と、勝野製糸会社で練へし實際事務、經驗に織り交せて、透明なる頭腦で大勢を看取しつゝ活躍したから、業績は著しく上つて、其ケンネン式百五十釜を廢し、筒井式六條繰り百釜に改める勇斷を敢行した向後は能率に於て十割昇昂の成果を示す等、少壯實業家としての面目を發揮して遺憾はないのである。されど氏が三龍社の専務を兼任するに及んで、營業上の一切を本多峰夫氏に委ねた。同氏は多年製糸界にありその濫蓋も亦廣いので、大正七年勝野製糸から無理矢理に拉致して來り、田口常務の謀將となつて、日夜獻策を續けて來た、實務に田口氏去つて本多氏が留守師團長となつても、危険等のあろう等は勿論無く、少なる機關を以て、大なる業績を勝ち得んことに没頭し、其一滴／＼と絞る頭腦が、同社の莫大なる資財と化するのだから凄じい。斯く常に其人を得て同社の根幹を維持せしめる爲め、内容の鞏固なることも他に比すものなく、附近の銀行等は行内の



遊金を持ち込んで使用承諾の膝詰談判を続けることは、全く嘘のような事實である。配當は時に七割を行つたことあるも、平常は既記の如く一割を續けて其間何の苦慮も生じない。因に現在の重役を示せば左の通り。

社長 田口百三、常務取締役 田口東一

取締役 加藤友三郎、勝野新三

監査役 大谷榮一、中村耕造、杉浦茂左衛門

### 糟谷縫右衛門

幡豆郡横須賀村  
電話一八番

横須賀萩原の郷に、廣汎數千坪の宅地に生垣を廻らした城廓の如き邸がある。之が幡豆一の名門糟谷家の住宅であるが、同郷が殆んど糟谷姓を名乗る現情より押して、其宗家が同家であることを、容易に窺知し得られるのである。而して始祖は、三百八十年前伊勢の大庄屋から分家して、此處を永住地と定めた關係上、名字帯刀は疾くより許されて、十三代の當主に至る間、餘程の尊崇を拂はれたものである。けれ共當主縫右衛門氏は、徒に因習を固執して此孤村を護る可く、餘りに進守的であつた爲め、三十餘歳の時有志と共に西尾銀行を創立して之が頭取となつたこともあつたが、後小銀行の整

理を必要とする空氣に逢着して、同行を明治銀行に合併せしめ株主の利益を計ると共に地方金融界の基礎を鞏固にし自からは常に中京實業界に在り神野、富田、材總の諸氏と結んで貢獻する處が多かつた、而して現在福壽生命、福壽火災の兩保險會社の取締役となり明治銀行の監査役に押され本據を名古屋に据へて、目下盛んに飛躍を續けて居る。斯くて得たる收穫を同家の資財に重ねる一方、公共的方面にも相當大金を欲し氣もなく投げ出して居る。然し恒産日に増して、背景の美と合しつゝ、屋上の光は一入鮮明を加へてつゝあるのは同家が萬代榮ゆる証なのである。本年六十三歳の文久三年生れ、温厚にして流石大家の主人たる面影は、何處に置くも變りはない。

### 大竹彦助

幡豆郡横須賀村  
電話一四番

氏は明治十五年生れの四十五歳、岡崎中學第二回の卒業生にして、岡崎市の知名實業家中には相當知己が多いようである。同家は赤穂義士の復仇で有名な元祿十四年、岡崎明大寺の六所神社に在つた神主から系累を引いたものらしく、當主は其八代目の孫、二十一才にして一年志願兵となり、日露戰爭に参加して功を擧げ、除隊後成績良好の故を以て中尉に昇進された、中尉となつて後幡豆在郷軍人分會長に推されたこともある。而して先考の長逝せし後、西尾銀行の監査役を承繼せしが、三十歳の



時横須賀村長に選ばれて、村政に善據する傍ら、當時西尾鐵道の延長を一色か、吉田かに極める可く考慮しつゝあるを知りて、早速吉田村長、小太郎氏と謀り、猛裂なる運動を起して、吉田線を布設せしめ、我田引水ながらも一色を尻目に横須賀地方の開発に成功したのは、同地方民の忘る可からざる恩恵であらうと思はれる。斯く策もあり、戦争にも従事した経歴より推せば、或は無類の強か者と揣摩せられるも、實は温厚にして、人格も備はり百万長者の主人としては外部の何れから見ても、踏み様じはありそうにない。久しく子女の産出なくして、可成悲觀の態であつたが、數年前から三兒を擧げ、夫人と共に琴瑟相和す様つたら、他の目にも羨しきものがある。

## 深谷太助

幡豆郡幡豆村

中等程度の農業學校は決して農村振興の資料とならない。よつて實地本位の公民學校を設立し、本科三年、研究科一年の實務教程を授けんと深谷氏は盛んに計劃を廻らして居るが、其實現は既に目捷に追つて、近く創立の運びとなるは確定的の事實にある。併し氏は教育家でなく、幡豆郡一の村長とし由來々々の論陣を張り、明治四十四年以來、幡豆村自治其他の地方事業に貢獻して功を積んだ経歴の方、遂に前者よりも光輝を添へて居るのである。明治十年二月幡豆村烏羽に生れ、三十六年収入役と

なつたが、續いて郡會議員に選出されて二期繼續、大に年少議員としての氣を吐いた。而して四十四年村長に推されて、大正七年迄八ヶ年間其職に携つたものゝ、縣議と代議士選舉とに參謀長となる爲め、之を辞したこともある。けれ共選舉を終れば又、村長に選ばれるのだから、人望の厚きも知られるではないか。更に八年には無競争にて縣會議員となり、政友會に屬して第一線の闘士に任じつゝ、名を馳せたが、政友分裂の結果、目下本黨の有力者として幡豆郡に活躍して居る。因に同家は二百年來の舊家にして、氏は七代目の孫、現に擧げれる名譽職は、郡水産副會長、縣聯合水産會評議員、幡豆郡消防會長、郡教育會副會長、郡農會長、町村長會長等々、數へ来るに目まぐるしい程である。

## 株式會社 碧海銀行

安城町 電話九番

同行は明治三十二年二月の創立であるが、當時安城町は鐵道の便こそ開けたれ、産業は尙幼稚にして、加ふるに明治用水の開鑿に連れ、耕田矢鱈に増加せるも、人口稀薄にして土地の尨大に伴はず、よつて産業の振興に俟たねば、同町の將來は何の樂觀も許されない情態にあつた。然かも此振興を期するには、地方の事情に精通せる、金融機關の必要を痛切に覺へて来る。固より同町には既に、中京其他の銀行支店或は出張所と云ふもの、二三あるにはあつたが、目的は單に預金の蒐集に緊がれて、



肝心安城町に於ける産業の啓發等には等閑視勝ち。何のことはない他市町村發展の爲めに、資金を貸與して、忠實なる婢僕に甘ずると云ふ筆法なれば、心あるものが、之に悲憤の腕をやくしたのも無理ではない。斯くして出來たものが、當時資本金十五萬圓、四分の一拂込みの、如上碧海銀行其ものであつた。而して創立者は太田佐兵衛。岡本八右衛門、近藤垣平、加藤新右衛門、築山重一外十氏の先覺者にて、其年、四月一日開業せしもの、營業所は、十疊敷きの店に机の二三台を据へつけたと云ふ体裁にて、行員も支配人から、給仕に至る迄が悉くの前垂れ姿、然かも其數五六名と來て居ては先づ中流處の六一銀行を聯想せず居られない。併し使命が安城町を中心としたる地方産業の啓發にあれば、住民にもよく之が徹して、人々は競つて同行と取引を結ぶに至り、其年の預金は二十一萬五千圓數へて、豫定以上の成績を收めることが出來た。續いて二十五年には四三五、三十九年は八四七四十四年は百萬圓を突破すること九萬六千圓又第三十八期の大正六年は二、二八〇。十二年には五、〇六三、而して十四年の前半期には無慮七百三十餘萬圓の預金高を示すに至つたのは如何に同行が、區域狹隘とは云へ其地方に不斷の信用を得て居るかを立証して餘りがある。さすれば資本金も次第に増大して、四十四年には五十萬圓となり、大正九年の四月、好況時代の頓挫を來たす間一髮に、一躍三百萬圓に増資して、多數のプレミアムを殘し愈々強く信用を把握に力めて他の恐慌を尻目に掛けつつ、獨り餘融釋々經營に従ふことの出來たのは、一方天の與へし賜とは云へ、又地方幹部が經濟界の

先途を透察して善處した恵みであらう、斯くて銀行業の使命を十分に体得して、堅實を心するも固陋一編に走らず、時代の風潮に準じて伸縮妙を得る爲め、其結果が安城町及び附近の産業振興に何れ位ひ資したかは知れないのである。殊に重役は力めて、他の事業に手を染めない故、不合理の貸出しも行はれず、又行員一同も家族的によく執務するから、能率も上りて、毎年配當を一割以上に緊いで居るのも必然の勢であらう。現在の積立金は六十萬圓。支店は、知立、新川、刈谷、大濱、矢作、高濱の六ヶ所に設けられる外、代理店十二、派出所の十一が西三の各所に散在して潤ひ多き營業を續けて居る。而して目下烏居支配人の腹心山崎清作氏が、之に代理人となりて多年愛知銀行で練へし腕をやくしながら總配を振つて居るが業績と信用とは逐年増大して、地方銀行たる將來を餘程囑望されて居るようである。因に重役は左の通り。

頭 取 太田佐兵衛、專務取締役 原田鈞太郎、

取締役 神谷八郎、岩田以手紙、岩間新右衛門、

監査役 眞野丈、堀尾要、藤井清七、



醤油醸造業 榊原豊三郎 電話 七番

幡豆郡に於ける大實業家として、榊原氏の堂々たる風彩が瞳に映するが、假令氏を知らなくとも『分銅富』の溜醸造家と云へば誰も成程と肯くであろう。こと程左様に同品の聲價は縣下に汎く知られて居るが、起源も遠く、文化七年今より百五十五年前の創業に係るのだから、馳け出し品と幾分質を異にしたとて仕方がない。而して氏は明治二年十二月の生れ、徳川三代家光の寛永年間に榊原權右衛門が業を起して爾來三百年を経過する今日、同家の戸主として由緒の身を以て村會議員に擧げられて後は、村長、町長、郡會議員、營業稅調査委員、所得稅調査委員、



幡豆醬油醸造組合長等、有るとあらゆる名譽職を持ちかけられて、忙しき中にも之に携りつゝ、地方公共に盡した功勞は尠少ではないのである。而して目下西尾鐵道の取締役となり、百萬の富を擁しつゝ、家業の彩配を振つて居るが、趣味は囲碁以外になく、それも何うやらザル碁の部類を脱して居ないらしい。

碧海郡長 根來長太 碧海郡安城町

氏は山陰島根の産、本年五十一歳と云ふ脂の乗つた働き盛りなれば、碧海郡長としても、内部外部に對する信望は益々加はりて、縣下の郡長中では筆頭格を占めて居る。故郷の松江中學を出る早々、島根縣廳に入り、卵の殻を破つて任官したのは、何でも明治の末葉であつたようだが、而して大正二年縣屬として愛知縣廳に赴任するや、土木課に籍を置き次席屬として聲名を馳せたが、四年北設樂郡長に任せられて、郡政の司となり、相當の治績を擧げたものである。其後海部、渥美の郡長を経て、十三年十月現在の位置を擁し郡制廢止の跡仕末に水面の清澄を保たん任務に服して居るが、努力は最後の五分間迄繼續せん決意を以て、這般の風水害の時等卒せん泥水膝迄没する中を右往左往に、駆け廻つて被害の實情を調査すると共に又災害民を極力慰めて、周望を集めたことがある。早起は兎も角早



寝は大嫌ひ、と云ふのが日中の事務に忙殺せられる爲め、氏の欲する讀書及種々の研究事を夜間ならではなし難く決して成金輩の遊蕩を真似る爲めに斯くするのではない。されば何れの會合に於ても望まれる儘に、得意の辯舌を弄するが、一々委しき數字を擧げつゝ、まくし立て、對手を三嘆せしむるのも、此故であらうと思はれる。愛知縣下の郡長中、板津氏と共に二大雄辯家ともてはやされて居る以外、趣味としては未だ筆者の耳に接しない。

前安城高等  
女學校校長

## 塚原常之助

碧海郡安城町

女子は如何なる時代に於ても賢母良妻であらねばならぬと塚原氏が教育界に足を踏み入れて三十有餘年、此教旨を奉じて只一直線に進んだが、流石に長年月専心教育されたものも無數なれば、今でも恩師大事と訪づるもの、音信するもの日に絶へないのは無理もない。けれ共最早老齡でもあり且つ後進の爲めにも十分目的を達した今日が退職の潮時であるか、昨年七月遂に永年勤めた教育界を退き、目下安城町外に閑居して老後の永住地を千葉縣下に求めんとオサ／＼準備を進めて居る。固より正六位勳四等、相當の恩給もある故に徒食しても差したる障害も起らないが、人間一生に無爲袖手は禁物と眺めて著作其他の教育方面に手を染めんと目算を立て居るも、果して如何なる地点に歸着

するかは今より豫斷が許されない。氏は慶應元年四月福嶋縣會津に生れ明治二十六年東京高師の博物科を卒へると共に廣島師範に教鞭を執つたのが教育家としての最初である。其後埼玉師範、群馬師範等に轉じて明治三十五年東京府立第二高女に入り此處にて二十年間勤務したが大正十年安城高女の校長に榮進して當時の町立學校を縣立に移管する傍ら動もせば虐榮に啣がれ勝ちにある同町近在の子女に實質質素の氣風を布殖した等相當の功蹟を収めたものであつた。

趣味は謠曲、書等にて可成穿つた技をもつて居るらしい模様にある。

安城高等  
女學校校長

## 北野喜祥

碧海郡安城町

農村の女子に農業の趣味を興へねば、農村男子の一生は不快生活と化して了ふ。而して其結果が農村忌避と迄進んで來るは地を打つ槌よりも尙はづれつこなき大問題であると眺めて北野氏は大正十四年七月安城女學校校長となるや同時に此方面へ専ら力を注ぐことになつた。氏の看察は常に斯くの如きものであつて何人が見ても妥當合理であると解されるが、併しソレで居て岡崎師範の教頭であつた當時等は生徒に總スカンを喰はされて大分弱つた經驗がある。蓋し自己の主張を是と考へる点に餘りに忠實にて生來の負けず嫌ひが強い他の順守を要請した爲めではなからうか。ソ兎も角として物事に



對する研究心は極めて盛んにて文字通りの多知多能を具有する結果講演が同毎同一のものを反覆せず  
に堂々ましく立てる爲め鐵砲講演の名を得て居る等其大体を窺ふことが容易に出来る。氏は明治十七  
年二月の静岡郡盤田郡天龍村生れ、濱松中學校を経て東京高師數物化學部を四十年に卒業したもので  
あるが松本又太郎博士の心理學講座が面白いとて之をも在學中に修得した。而して卒業と共に山形師  
範に赴任し四十三年愛知第二師範へ轉じて本年七月迄約十年間を同校の爲めに盡したのである。當に  
天分に應じて互援せしめる教旨に則りて熱心に指導するから、安城の女子も遠らず氣持よく自己の進  
路を選定する日が来るであらう。

### 山中從天醫館主 山中泰造

碧海郡旭村

岡崎万圭界に於ける内科の一權威山中醫學士の令兄泰造氏は明治十六年九月碧海郡旭村平七の産、  
明治四十年千葉醫學専門學校を卒業して岡崎病院長河村醫學士より二年遅れ東京醫科大學の近藤外科  
醫局に入つて後東京養育院病院に勤務しつゝ傍々醫學の究研を續けたものである。明治四十三年亡  
兄の承繼せる山中從天醫館へ入るに及びて共同診察に従事したが逝去の後之を襲ひて同院主となり今  
日に經過して居るが眉目秀廉態度温厚手腕も相當に冴へて居るから評判の良いことは一通りでない。

目下村醫として囑托され村衛生にも貢獻する處尠少でなく、特に保健と衛生の見地からと云つた譯で  
もあるまいが、小學兒童の運動獎勵に資す可く旭村小學校にテニスコートを設置せしめ其費用一切を  
寄贈した等公德心の厚き一端も知ることが容易に出来る。更に村治に對しても一家の定見を有して同  
村顧問となつて居るが併し氏は決して表面に立つような天狗を續けるものではなく只内部に於て指導矯  
正の任に携り以て文化の進展に遅れざるよう力めて居るのは假し智識階級に必然來る可き傾向とは云  
へ又徳望の無きものでは決して出来る業でない。斯くして村治に衛生に多忙なる日を送つて居るが閑  
暇を盗みて園藝を味ふことが餘程の樂であると云ふ。明治維新の勤王家山中信天翁の血を受けた名門  
の出であるだけに凡者と異なる處は尠くない。

### 醫師 神谷穗作

安城町字今

氏は明治十二年二月碧海郡今村に生れ、嚴父が醫業に携つて居た爲め當然之を世襲せしめねば時代  
の因習に對しても申譯のならない筈に拘らず何を發心したか、最初氏を百姓とす可く、命名するに穗  
作を以てした。處が何う匙加減の間違ひか、穗作氏は長ずるに従つて文學特に、和歌、俳句を作つて  
田を作らない。更に下手を打つと、土地を見限つて上京の上、新聞記者にも、なりまじき氣勢を示さ



れたから、面喰ふのも當然である。よつて其好む學びの道に携はらしめるが代償として、志を醫者に抱かしむ可く妥協成り、遂に收まる可きところに氏は收さまつた。斯くて三十二年六月名古屋醫專を卒業して得業士となり後又論文の提出によつて愛知醫學士ともなつて、新智識の濫蓄を傾倒しつゝ、患者の脈搏を握つて信望を得た。けれ共氏の欲する本心は、病者の施業に非ずして、國家或は自治体の手術にある。さすれば大正四年郡會議員に推されて、副議長となり、同六年選舉の違反によつて失脚せし縣會議員岡田、磯部兩氏の補欠選舉にも出馬して當選、爾後十二年迄、愛知縣政に參劃して、或時は參事會員となり、又或時は得意の雄辯を以て縣當局を盛んに手古づらせた等も必然のことである。目下憲政會に屬して、今は時めく文部省政務次官鈴置倉次郎氏の腹心となつ居るが、同黨地盤の守護者としては郡下に可成りの權威がある。性熱し易く敵前に詰め寄つて對手の肺腑をえぐる第一線の闘士としては縣下切つての適任者。されば松井元知事が氏の足蹴に掛つて、もんどり打つ等、何も珍らしき事ではない。かと云つて其癖平常は平和を好み、紛糾の塵へ役を引受けて居るなんざ、何れが本性かお釋迦様でもヨモ御存じはなからうでないか。

## 山丸製糸安城工場

碧海郡安城町

同工場は長野縣須坂町の、越壽三郎氏が經營する、山丸製糸場の支工場にて、明治四十四年六月爾取引の緣故から、安城地方に望みを囑して、設置されたるものである。原料は固より、附近農村から買ひ入れて、養蠶業の發展に資して居るが、女工は大部信洲から移入し、縣下の募集はホンの僅かにて、單に欠員を補ふ程度に過ぎないようだ。設立當時は釜四百個、生産額は、千二百捆内外であつたが、爾後擴張に次いで擴張を絶たず、今では釜數七百を數へ、其他の機關を完備して、三千捆の生産は容易である云はれて居る。之等の製品は悉く横濱を經由して、アメリカに輸出され、品質の優良と相俟つて、需要と均衡を脅かされることはないが、東京支店を始め其他の支店數ヶ所より生ずる總生産額は、極めて莫大の數に上りて現在では信洲有數の製糸所として、山丸本店の存在は業界から非常に囑望せられる情態にある。

本支店を通じて女工の待遇は、略ぼ同様なるも、安城工場に於ては、勤績三年にて針箱、五年にて鏡台七年にて箆笥、而して十年勤績者には布圍一揃ひを與へ、以て嫁入りの道具にせしむる由なるが男女工の現業員合して一千百、此中十年以上勤績者は二十餘名を算して居ると云ふことである。



## 帝國製糸株式會社

碧海郡安城町

同社は大正六年開業せし杉板製糸所を、十年五月更改して、資本金五十萬圓、四分の一拂込の株式會社にしたものである。組織變へを行つた當時の、生糸は一ヶ年の産額八十萬圓であつたが、百二十釜の完成と、諸機關の整備成つた昨今は、僅に百萬圓を擧げるの成果を收めて累次發展の情勢を緊いで居る。而して生品は殆んど神戸を経て、紐育のエリオット、ダブリュー、ロー社に送附して居るが同業者中には動ともせば、如上イ社より受ける叱言のある中に、獨り同社の生品のみは、未だ嘗て一回も此種の不滿を買はなかつたのは、品質の優良なること、又常に信用の確保によつて、其間に狡猾を加味せざる証左とも云へるであらう。凡て荷造りは縣下に珍らしき、直輸、特有の洋俵装置、其爲めに發送の時等は他と趣きを異にして、尠からぬ洋風味の漂ふを何人も容易に看取が出来るのである。配當は毎年八朱であつたが、本年第四期の決算には、外に特別配當八朱を出して、都合一割六分の利札を切らしめ、財界不況の中に大に氣を吐いたが、積立金は二萬六千七百圓、重役の氏名は左の通り

社長 杉坂竹治、専務取締役 近藤菊次郎  
取締役 太田玄作、岩附周、大見安太郎、

監査役 岡田菊次郎、加藤勘藏

## 酒造業 竹内倉次郎

碧海郡知立町

愛知縣會で一時飛ぶ鳥でも落とそうかとする迄に名をなした前きの縣會議長故竹内清兵衛氏の令弟である倉次郎氏のことなれば、多少でも政治的色彩があると早合点したら大間違ひ。さりどて同じ同胞でも斯うも毛色の變つて居るものは餘り澤山ない程、しかく倉次郎氏の性格中に何處を尋ねてもそれらしき色のないのは珍らしいこと、云はねばならぬ。氏は元治元年知多郡の東浦村産れ。幼少の頃より家業の酒造に趣味をもち、明治廿一年分家をするや、直に知立に來つて獨立開業と進捗したのは當然である。けれ共當時は造石高三百石に過ぎず、未だ酒造家と云ふ程の域には到達しなかつたが、好きこそものゝ上手なれ……研究と改良とを毎年の醸造に適用せしめたから文字通り品質の聲名は四海にとゞろいて『御寶櫻』は上戸黨に無くてはならない位置を占めるに至つた。而して現在の造石高は約千石、名古屋を姑め遠洲方面にも出荷して、相當其存在を認めさせて居る。性内氣にして堅實商賣大事にする以外職期に獵銃担いで獲物を追かけるのが何より樂みだと云ふ。されど寄る年並みに昨今は家業を息汎氏に委ねて之を監視するのみ。因に汎氏は三河毎日新聞社の社長として酒造の傍ら



叔父故清兵衛氏の如く政治的論陣を張つて居る。

味噌溜商 間瀬 仲吉 碧海郡知立町

間瀬氏の醸造に係る味噌溜は品質優良にして、日本全國は固より朝鮮、台灣、樺太の新領土に於ても、時々開催せられる共進會、品評會等に出品して、其都度貴ふ褒賞は決して尠少ではない。されば今では之等の仕末に窮して捨てるに勿体なし、さりどて額にするには數餘りに多くして置き處に苦しむ云ふ情態にある。斯うなつては一枚二枚の褒賞を後生大事に保管する身が羨ましく思ひに餘つて考へついたのが屏風の作製。繪や書の代りに褒狀を貼りつけた、古今獨歩の屏風と來ては珍妙も少々度を通り越して居る。若く優良な製品を出す迄には間瀬氏の努力苦心も並大抵で無かつたようだ。現に全國的聲價を有する商品の製造者として、内情も豊富なるに拘らず、商賣以外に何の趣味も無いことが立派にソレを裏書きして居るでないか。氏は明治二年九月の碧海郡藤松村生れ、長じて小糠が三合無しと稱し、間瀬家に養子となつて舊姓酒井を捨てたが、二十六歳の時現業の有望なるを感じて大濱に行き、不眠不休の態を續けて味噌及び溜の醸造を學んだ。而して明治廿八年知立に開業したが、最初は百石内外の造出高に過ぎなく、醸造家としては知れたものであつた。併し利口な氏の研究は日

を追ふて他の追従を許さない生品も製出したから耐らない。爾後販路の擴張に連れ昨今は二千石内外の造石高を示して天晴大醸造家の仲間入をするに至つた。同時に人望も加りて、所得税調査委員、町會議員、郡會議員に選出せられしことも一再でない。ニコホン主義、されど厭や味の無い處氣持ちがよい。

醫師 松井 巨 碧海郡知立町

知立町に於ける醫師中一番の年長者として、仲間にも崇高され又患者からも尊敬せられる松井氏は秀才とか、天才とかの名を幼時に獨り占有したものであつた。氏は明治六年七月東加茂郡阿摺村に生れ、十四歳の時疾くも醫師を志して刈谷の穴戸奄一翁に師事し此處にて二十歳の春迄六年間を醫術の修養に委ねたが、其歳前期醫師試験に合格して、郷土の先輩共を驚愕せしめたものであつた。後東京に遊學して濟生學舎に入り、學ぶこと二年、直に後期試験にパスして、二十二歳の時押しも押れもせぬ青年醫師となつたが、生地を開業すること數年日露の風雲險惡なるを見て直に從軍して三等軍醫の腕前宜しく病兵傷兵を治療した功によつて正八位、勳六等旭日章を授與され又外部の光彩を添へるに至つた。斯くなりては最早何時何處で開業しても、估券を疑はれることがない。よつて戦後退營し



て明治三十九年現在の處に居を移し、此處を永住地と定めて熱心に患者を診療し、相當に名をなした者である。性無口、お世辞は尠なけれ共、忍耐力強くして單純に匙を投じないかち死屍回生の放れ業を行ふことも珍らしくない。趣味は骨董、囲碁、特に前者は好同會を設けて毎月一回同好者と會合し持參の品々に對して批評の交換を行ふ。されば下手な鑑定師位ひのことを結構にやつてのけるに手間は取らない模様のようなだ。

岡崎師範學校  
附屬主事 幸田 甫 岡崎市康生町

岡崎師範附屬主事の幸田氏は、至つて無口、然かも氷の如き冷い性格のように窺はれるが、大正六年東京高師範數物化學部を卒業した合理的判斷力の涵養による結果と眺むれば、假し當らすとも遠くはあるまい。併し一尺は鯨尺だけでなく、曲尺でも計る可きを知つて居るから頑迷、の學者氣質でも無いのである。凡て合理的、科學的に觀察を行つて、輕々事を決せず、よく現下の社會情態を考慮して、相對的の觀察も必ず加味する故に、冷たき中にも人情味はある。附屬の主事として、兒童の行かんとする方面も知つて居る。時代と教育の併行による日々の變化も數字的に、氏の頭には先刻反映して居るから不安はない。斯くて大正十二年現職に携つて後も、凡てに善處を絶たない故生徒の成育に圓滿の把持せられるも當然であらう。明治二十六年十二月、鳥取縣東伯郡下北條村に生れ高師を出で、福島中學に教鞭を執り、此處に居ること二年半、九年來岡して岡崎師範の舎監となつたが、生徒の起居一切に注意して、何等餘念がなかつた。而して後三年現在の位置に据つたが、岡崎市民の温かき人情味に打たれて、他への轉勤を欲して居ないらしい。

梅園小學校長 石田利作 岡崎市康生町

岡崎市内は固より、西三の各小學校長中、才子で文筆に長け、それに手も八丁口も八丁、只出來ないものが子を妊むこと、尼僧の髮結位ひ等定評のある石田校長の存在は、梅園小學が獨り有する誇りであらう。氏は明治十九年六月碧海郡矢作町に生れ、四十年岡崎師範を出で、前後二回通計十ヶ年間を附屬小學に、訓導として勤務した。又大正三年より五年迄奈良女子高等師範附屬にも、教鞭をとつたことがある。而して小學校長となることも三回、南設樂、知多兩郡視學ともなつて轉々數年を経過せしが投小學校長を経て、十三年五月現職に携り、『良き目當てを正しき仕方、出來る迄やれ』のモットー之を教養の精神として、自分も行ひ、子供にも實行せしめて居るのは、月並を脱して仲々に面白い。同時に卒業生に對しても『卒業生諸子のために』と云ふパンフレットを出して、卒業証



書は社會に入る入場券だと教へて居る邊り、卒業其ものを目的にする一般風潮に冷水三斗を浴せた趣きがして痛快である。自ら忙がしく暮すことを樂みに、教育、口演、讀書、思考、研究、談話討議と目廻ましい日常を續けて居るのは變つた性格の把持者として一際出色して居るが、雅號を鳳邨と稱し藝術作品の記名に用ひられて居る程、此方面の智識にも相當豊かなものがあるらしい。

廣幡小學校長 福若壽一 岡崎市伊田町

廣幡小學校の花園や、植物園は餘程手入れが行届いて居るが、ソレも道理福若校長始め教職員が、暇さへあれば、如露や鍬を手に草むしりから、注ぎ水迄行ふて、一つ／＼に愛の抱擁を惜まない爲めである。然かも花を愛するものに惡人はなしと古諺に教へられては、福若氏の小學教育も略ば想象はつくが、其温厚なる性格は、他人の言を俟たずとも、兒童少年に愛情の瞳を投じて居ることが容易に看取せられる。氏は明治十三年九月愛知郡日進村に生れ、三十七年第二師範學校を卒業して、千種高等小學校に勤務したのが教育家としての始めであつた。而して三十九年第二師範の附屬に訓導として轉勤し、居ること九年、大正三年に舉母小學校長として榮轉したが、何れに行くも其人格に崇高の念が拂はれて、村民に惜まれたことは一再でない。後大正六年五月、現職に携つて今日に經過すること

約十年、流石に永續の勤務に親子を教へるの感興を味はされて、内心愉悅の禁じ難いものがあるようだ。体育も差して積極的には出でない模様なるも、夏は裸体、裸足によつて訓練する方法を採り、其向上にも資して居るから、生徒の体格には反撥的素質に富みて、赴任當時とは隔世の觀を齎す程の健康を表現することになつたと云ふて居る。徳望極めて高く職員は固より父兄にも評判が非常によい

投尋常小學校長 野澤保千代 岡崎市若宮町

石田氏が投小學に校長であつた當時、野澤氏は首席訓導として、補左宜しきを制し、前者をして積極的仕事に携はる可く、後顧の憂を絶つたものである。特に藝術教育を鼓吹して、兒童の人間らしい成育に力めた空氣は、石田氏の去つた後も之を是認して、同校の周囲を彩つて居る。固より進取的の野心は無けれ共總べてに堅實にして、妙な謀反氣等を起さない處、危険がなくて都合がよい。氏は明治十九年額田郡福岡町に生れ、四十年岡崎師範を卒業して、故郷福岡小學に教鞭をとつたのが教育者としての皮切りであつた。何うせ波紋は極近くから漸次擴大する過程に照し、氏も故郷の小學校に在勤した關係上、日夜不斷の努力を之に注いだことは當然であろう。而して勤続六年、後中島郡起小學を経て、大正四年投小學に赴任した。校長となつたのは十三年六月、性温厚にして、謙讓、各方面の



新智識を吸収すること廣汎に渡り、吸収の程度がエスベランド語に迄及ぼしておる点を見ても明かである。氏は之等を繰合したのより一つの價値物を誘引しよつて以て教義の根幹としつゝ、教育に携つて居るらしい。最近三島小學校が設けられて、運動競技の選手連を失つたと稱して居るが、同校の傳統的運動の奨励は今も尙存して氏も亦新規時き直しに多數の揚卷平助を作らんと準備オサ／＼怠らいうである。校長としては處女であるが然し、同僚の多くが生徒五六百人の校長でおさまつて居るに反し、一千人以上を收容する同校の校長に選ばれただけ信頼される處も多いと云はねばならぬ。

### 齒科醫學士 八田辰雄

岡崎市康生町  
電話八五四番

齒を削る時之に水分を與へないと強い摩擦が起つて齒牙を毀けるばかりでなく、神經を刺戟して非常に辛痛を感ずると云ふことである。ソコで今日迄の齒科醫は摩削機械を動す時に間斷なく水にひたした齒刷毛を以て局部を潤はしたものであるが、然かも兩手を綿密に働かす爲めに受くる身心の疲労は尠少でなく此許大分困惑の態を續けて居たもの、ようであつた。處が最近八田氏は此欠陥を除く可く如上機械の活動と共に水分の浸出する摩削機を發明して、之を應用して居るが、其成績は案外良好にて遠がらす全齒科醫の採用する處となるかも知れない情勢にある。併し氏の發明は決して之だけで

ない。コツ／＼氣眞目に機械いぢりをして何かと改良新案を目論む邊り一寸小發明家のようであるが大發明を生む階梯として小發明の馬鹿に出来ない点を思つたなれば、氏も或は後日何を仕出來かすか計り難い怪物の一人と見ても支障はない。此小發明家にして齒科醫たる氏は明治二十八年九月岡崎に生れ岡崎中學を経て東京齒科醫學專門學校に入り同校を大正六年三月卒業して一ケ年間同附屬病院に勤務し大正七年遂に岡崎に開業したものである。未だ歳が若いだけに相當の野心もありて何事かを胸中に目論見て居るが外部の忖度は今以て許されない。けれ共袖手傍觀して只管來客を待つような符醫者よりも未來は確にあると見るもの獨り筆者ばかりではあるまいでないか。折角努力を希望する。

### 辯護士 藤浦纏平 岡崎市材木町

良家の息子は始めより目的通りの學校にも行れば仕事にも携はれる。又自然時間を欲する方面に注がれる爲めに餘程短縮することが出来る。けれ共貧者に生れたものは左様單純には參るものでなく、其大部は生活方面に費されるから堪らない。藤浦氏も御多聞通り貧家の生れ、併し辯護士として今日岡崎市内に令名あるが、此地位を勝ち得る迄には尠なからざ



藤浦辯護士



る苦辛を味つたものである。氏は明治十四年五月碧海郡旭村の高等小學校を卒へたばかりにて、直ちに親父の營む織物業に携つたが、何うせ小資本の悲哀は常に絶へず、遂に廢業の運命に遭遇しては周圍の關係上己むを得ない次第である。此に於て氏は明治四十三年岡崎裁判所に勤務し、五年任官して大正十年名古屋裁判所に轉勤する迄、生活難と苦闘する傍ら日夜法律書の研究に従事し、法的知識を練つたものであつた。而して十一年辯護士試験に易々登第したのは十年の苦辛の然らしむ處にして、寧ろ當然の婦結であらう。殊に研究が詰め込み主義のソレとは相違して、銳意自發的精神に據つた爲め、民事、刑事共に間口も廣いが奥行も可成り深い。特に民事には大家の範に列せられる趣さへあつて益々研究を積んで居るようである。性温厚にして謙讓、平民主義にて頭も低く、如才もない故に此呼吸で進んだなれば今に愛知縣の法曹界に名を博するは容易のことであらうと思ふ。

丸ト製糸株式會社  
專務取締役

中川彦三郎

額田郡岩津村

氏は明治十八年七月知多郡野間村に生れ、小野浦商業補習學校に學んだと云ふから、祖先代々の農業には何の未練氣もなかつたのであらう。併し商賣に志して其選別には迷つたものと見へて、色々考へ抜いた結果電氣業か蠶糸業と稍色彩の鮮かになつたのは二十歳頃であつた。けれ共アレも可愛いが

之も捨て度くなしのデレンマに引掛りて此許姑らくは困惑の態。ヤット了見極めて蠶糸業に携はる可く三十七年三龍社に這入つたが、好きこそ物の上手なれ、殊に眞面目で正直で熱心と來て居るから調子がよい。疾くも尖端を表して着々と地歩を固め四十五年には清水健太郎の堂々製糸工場を買收して合資會社丸ト製糸會社を經營し其代表社員となる迄に至つた。併し三龍社の下請けが目的であるから賣買上より來る利害は尠少にて大なる浮沈は彷彿ない。只定つた利得を制しつゝ、經過したが大正十二年之を資本金二万圓の株式組式に変更し、自らは專務となりて大いに力める爲め今日迄一割の配當は絶対に欠かさず、殊に氏自身も其手腕より幸運が今日の位置を作つたと自認して居る故、極めて大らしく誇りがましい振舞等は尠少と雖も外部には漏さない。さればこそ大正十二年の關東震災前五日に商品代二万餘圓を成算して、東京の滞荷をスツカリ洗ひ去つた手際等顧客の方から附與されるのではなからうか。

大樹寺尋常高等小學校長

稻葉正治

額田郡岩津村

小學教員より外交官にでもなつた方がヨリ以上國家的に或功したかも知れないと云はれる程稻葉氏の外交上手は既に定評がある。田中政友會總裁を捉へて立憲治下の小學教育に政黨首領の手蹟は生き



た資料だとましく立て一枚書かせる位は朝飯前の仕事だから手の冴へも略々想象が出来る。氏は明治十年三月寶飯郡長津村に生れ卅三年師範卒業と同時に三谷小學校で始めて教鞭を執る身となつた。爾後八幡南部、額田郡山中小學校等を轉々して、卅七年疾くも寶飯郡市田小學校長となつたのは破天荒の出色か、さりとて下手な仲間より十年も速に他の視目を引いたのは凡人でない何よりの証左と見ることが出来るのである。大正八年五月現在の太樹寺校長となり、額田郡互助會長に推されると共に教員協會長にも推薦されて相當に人望を蒐める傍ら最近には青年會處女會又珍らしき少年赤十字團等を組織して地方青年男女の堅實なる思想向上に資して居る。更に少年赤十字團創立の紀念事業として村經營の寄生蟲驅除に志し職員校醫と計つて八十パーセントの恐る可き蛔蟲其他の所有學童に施薬し以て保健の目的を十分に達したのは特筆す可き功蹟と云はねばならぬ。因に同校の職員は何れもゆとりある教鞭を續けて、學童にも父兄にも亦第三者にも非常に氣持よき響きを與へて居るのは他の學ぶ可き價值がある。

### 醫師 永田清三郎

碧海郡知立町

知立町の醫師中一番の醉人、酒も飲めば歌もやる。繪書も好めば、骨董もいちぢる。尺八寫眞は固よりのこと、何でも知らないものはないと云ふ器用人のことなれば本業の醫術に於ても手の冴へに定評があるのも無理ではない。殊に交際上手で、患者にお世辞の一つも云ふことを忘れない爲めお家は日を追ふて繁昌する。實に民衆的醫師の生へ抜きか、ソレ共知立の空氣が斯くあるを要請した結果の己むなきに出たのが。厭や、生來前者の性格を有したものが、ピツタリ知立の空氣に合つたと認めるのが妥當であらう。氏は本年四十三歳、けれ共樂天的性格の持主たる故でもあらうが五六は割引しても他の疑惑を買ふようなことはない。知立山屋家の生れにて、安城町の宍戸病院に副院長を勤める事八年に及びしが其間匙加減宜敷くして病者を救ふ事無慮、既に聲名も上つたれば之を機會に獨立旗上げを見論見んと大正二年現在の所に開業したのが經營者としての始まりである。でも根が八方美人の特性ある故經營上の手腕も決して醫術に劣らず、今日の繁榮を招いたのも偶然と云ふことは出来ないであらう。

### 齒科醫 野村鐵司

碧海郡知立町

知立町に於ける齒科醫は、其數尠少にして、野村氏等の中でも相當申を利かす一人である。併し鳥無き里のコーモリと笑ふ易れ、假令氏を知立に置かないで岡崎に拉致して來ても、容易に現在の地位



ひはかち得たであらう。事程左様に氏の技倆は他の信頼に價す可き牙へありて、患者をインスパイヤすること可成り大であるのである。明治二十二年七月碧海郡高岡村に生れ、型通り小學を卒へるや、ボツ／＼志を齒科醫に抱いて將來を、保健の鍵、齒牙の健全に盡さんことを目論見たものであらう。斯くて大正五年日本齒科醫學校を卒業して、直に現在の處に開業し所定の目的を此處に果すに至つた而して日々繁昌することは御多聞通り、何の變調もなく今日に經過し來つたものである。趣味は何でも御座れの多方面、されど中でも運動と煎茶、抹茶、謠曲、刀劍等に大なる興味を覺へて暇ある毎に玩びて餘念がない。それにしても若人の好む運動、老人の愛する茶飲み、風流人のたしなむ謠曲而して武骨者の意を満す刀劍、之等を合して清濁併せ吞む氏の持前へには只々驚くの外がない。

## 丸一製糸合資會社

碧海郡矢作町  
電話三三〇番

同社は現在資本金三萬圓、積立金一萬九千五百圓と云ふ小會社ながらも基礎の極めて鞏固な製糸會社にして毎年の配當一割を下らず、經濟界浮沈の時にも尙順潮を辿つて餘さないは一つに後藤前々長田前及び小倉現支配人の手腕に俟つものにて、斯かる人々を常に得る同社は又恵まれたる一個の幸運者と云はねばならぬ。されど製糸が悉く三龍社の貸びきである故、固く引しめて居れば三龍社の到産

せざる限り現在の業績を續くる事は、凡事である等と云ふ易れ。現に其前身なる鈴木製糸工場が同様の経過を追ふて居たに拘らず、遂に失敗せし事蹟がある。然かも當時の工場主查太郎氏は又固き点に於て從來の支配人に弟たり難い。けれ共創立の明治四十年から同四十四年に至る五ヶ年にして、抜きさしならぬ破綻を生じて了つたのは單に硬い軟いの問題ではなからうでないか。ソは兎も角として十四年の六月に退つ引きならぬ破目に陥つた爲めどうも三龍社長始め同社系の重鎮連に買収されて、資本金一萬五千圓の合資會社となつたのである。爾後毎年豫定の成果を收めつゝ、大正六年資本金を倍加して三萬圓となし、今日に經過して居るが目下二百二十釜の設備なつて、千個の生産を優に行ふ迄に發達した。而して現在の代表社員は勝野俊介氏、支配人は小倉捨次氏にて何れも三龍社系の奏々たる實業家である。

## 伊那製糸矢作工場

碧海郡矢作町

西三の製糸工場として一番古いのは何と云つても三龍社であるが、併し之に次ぐものが伊那製糸矢作工場であることは餘りに知られてない。けれ共同社の始源寶珠製糸合資會社の創立は、日清戰爭に凱歌を奏して祝盃の酔未だ醒めやらぬ明治二十九年のことだから極めて古い話と云はねばならぬ。其



後盛衰交々來つて、杉山製糸に買収され依然古い歴史を維持したが、大正八年資金に窮乏して、遂に原料仕入上の緣故を辿り信洲の飯田町に本店を有する伊那製糸會社の救を求めて、矢作製糸台名會社と改稱し僅に虎口を遁れたものであつた。當時伊那本店からは支配人として白子重介氏を派遣して専ら業務上の一切を掌握せしめたが、何うせ資金の大部は伊那會社から出て居る關係上、外形は兎も角内實は同社の支店とも云ふ可き状態にて、只僅に後日合併の成る時其解決を要する條件を有利に引入れんと、始らく如上の外形を維持したものである。されど白子支配人の悠々迫らざる思慮と、胸にたくらむ策略は遂に大正十四年六月に至つて發露し、此に全く同社を伊那の藥籠中に入れて了ふこと、なつたのであつた。併し支店となつても營業は固より會計も獨立して方針は過去と何等異なる處がない。主として輸出もの、製産に従事し、現在では二万五千斤の製品を出すは容易の業である云はれて居るが大正十二年度迄不況續きに困惑せし如く云ひ觸らせるも果して何うか。

齒科醫 足立恒平 岡崎市康生町

家豊かならざりし爲めに、學校へも十分通ふを得ず、苦學奮闘檢定試験に當第して、康生に堂々たる診癥所を設け、助手二人を抱へながら可成りの患者を吸収して、昔の苦しさを何處吹く風かと眺める足立氏の生立ちには、立志傳を飾るに十分の資格がある。明治十七年六月岡崎に生れ、小學校を出るや彼方此方の齒科醫に師事して、技を練ると共に、暇さへ得れば如上醫學の研究に腐心し身体の過勞も厭はず、只管勉勵を積んだ結果、大正三年見事檢定試験にパスして、同時に開業、他が學理に據れば此ちらは實地で行くと云ふ意氣込みに、患者も次第に殖へて今では十指に數へらるゝ位置を制して居るのは苦の酬ひの然らしめる處にて天道様も決して不公平ではないようだ。何うせ實地で叩き上げた人だけに、何をやらせても無難であるが、取り別け技工術は得意中の得意にて、義齒の作り方等に至つては其牙へ既に定評がある。性負けぬ氣に満充し、忍耐性も可成りに強く意志も鞏固であるが趣味に特筆す可き程のものがないのは、過去に於て之をとり入る餘融がなかつた爲めであらう。果して然るか否か。

岡崎市立 商業學校長 竹内富太郎 岡崎市六供町

氏が明治十四年茨成縣眞壁郡眞壁村に生をうけて同四十二年三月、神戸高等商業學校を卒業する迄は、世の一般子弟と同様、何等取立てる程の特長は見當らなかつた。殊に學ひし處が商道だもの、卒



業直後に生絲業に携つたとして、珍奇も不思議も更でない。然るに何う發心したのか、此生絲業を一ケ年そこひらで、奇廉サツパリと見切りをつけて、翌四十三年六月には志を商業教育に抱き以て滋賀縣立八幡商業學校の教諭となつた。氏の教育界に投じた皮切りは此時であるが、併し教諭としての腕つ振りは可もなく不可もなく、極めて平凡であつたこと、尙書生時代の情態と異なるものはない。されど流石にお里が商道の専門知識を教ふる處だけあつて、此處より這い出して來た手前、實は教ふるよりも、學校經營の腕を振ふ点に大なる特技を有し、疾くも其存在を示したのは、然もあることであつたらう。故に大正六年七月、未だ三十二歳の年弱き身であるにも拘らず、現在の岡崎商業が尙乙種制度の時、コ・の校長として招聘され、自己よりヨリ年長なる他の職員の上席にごつかと腰をおろして得意の經營上に於ける一般抱負を行ふ時が來たのである。而して其第一の使命は、當時の乙種を甲種制度の學校に引直すことであつた。

斯くて氏は赴任と共に時の市長千賀氏と策應して、此目的を達成す可く發辣たる青年の意氣を以て東奔西走、座席の温まるをも知らず、熱心努力の結果、遂に酬はれる日が、僅に八ヶ月で來る好成績を挙げ、以て大正七年四月の新學期から愈々甲種商業の科程を施行することゝなつた。蓋し現在の制度の生みの親として、會心の笑を絶たないのも無理からぬ處、同時に年毎繁昌する過程を眺めて氏の得意は益々加ふるに至るようである。

趣味は囲碁と謠曲、併し前者はザル碁にして、後者は豫め聽取者に茶菓饗應の必要を呼ぶ程度、只テニスだけは若殿原對手に何時でも四つに組めると噂するものがある。

### 岡崎市議員 嶺田信次郎

岡崎市花崗町



今戸焼に布袋があるか何うか、筆者は、記憶を呼び起さないが若しありとすれば、嶺田氏の如きタイプであろうと想像する程、氏はデツブリ肥つた、眼の細い平和の波が四時訪づれて居るような面貌の持主である。明治九年の生れ、本業は石材調刻然かも開業が文化年間五代前の祖久兵衛翁に始まると云ふから相當古い話だ。此時代から同家は石佛像の調刻に従事して名があつた。固より祖先傳來お家の秘術は、一寸他に眞似の出來ない点がある。ソレかあらぬか、終始一貫此佛像を調刻して、他の何ものも混へない。又混へなく其石佛と



云へば嶺田を聯想する程に藝術上の價値があつたのである。然るに平和なる當主信次郎氏に至つて、餘りに其正直がたつた結果此に五代連綿の家憲を破りて、石佛と共に石燈爐の調刻を始めることゝなつた。其原因は斯うだ。

既に述べたる如く、同家の石佛は、世に定評ある出來榮へを有して居たが、如何にせん何れの業にも、模倣、模造者の出現するを免れず、よつて石佛獨り此圈内を脱することも出來ざれば、勢ひ調刻上の競争よりも値假の競争が始まつて、同家に素見をする客が漸次増加するに至つた。之を眺めし氏は氣が氣でない。他店の如き調刻なれば如何にも安く渡そうが、素人では氣づかれない点に技工が加へられて居るを考へた時、客の値引きにも應せられず、かど稱して、幾何商賣でも祖先傳來名を爲した藝術上の破壊を謀むことも出來ず、此に兩立困難のヂンンマに陥つて、泣くに泣かれぬ日を過した。が畢竟ソは他に模倣を許して、自己は恬と收つて居る爲め此事の生ずるを思つたのと、今一つは石燈爐なれば幾何素見されても何等痛痒を感じない爲め、此精神を石佛にも移譲す可く試験せんと決意して、遂に如上の石燈爐調刻を挿んだものである。併し石佛に加へし技術は、石燈爐にも容易に應用せらるれば、假令遅蒔きでも、未だ不評判を買つたことはない云ふ。何れにしても時の流れは餘り家憲に拘泥することを許さない。現に石調刻人が市會議員になれる世の中でないか。心配は身の毒速に水へ流したり〜俟

## 醫師 成瀬傳十

碧海郡知立町

人間は無くて七癖、あつて四十と幾つか癖、一人として大少癖の無いものはないが、成瀬氏にも一分間談話をすれば氏の性癖が遺憾なく現れて面白い。等と今頃事新しそくに感心する方が野暮の親玉知立町民は左様な事先刻合点承知の介にて、此上重ねて聞けば耳タコ物と思はれようが、本書の名前が西三の事業と人廣い西三河には未だ知らない方々もあろう故に一寸小聲で紹介する。ソれは氏の事に關して質問せば答への冒頭に必ず『私ですか』の四文字をくつつける一事、成瀬さん貴下の御生年は？ 私ですか、私は明治二十一年三月の知立生れ。愛知醫專は何年の御卒業？ 私ですか、明治四十四年。御卒業后住友總本店に勤務して四阪島、新居濱等に行かれたそうだが御意に叶つて？ 私ですが、餘り感想はありませぬ。等々 併し氣前は仲々よくて、斗酒さへ尙辞せぬ一事が証明する。なんかんと大酒家に悪人無し等云へば、奈良潰喰つてもフラ〜する方には、得てして申譯が無ないがソは免も角脈縛數へることには十分の技倆があつて評判も又馬廉によい。特に小兒の病人を担ぎ込む處は、成瀬醫院と極つた如くに行つて居るから、此方面には特別の手腕があるのであろう。

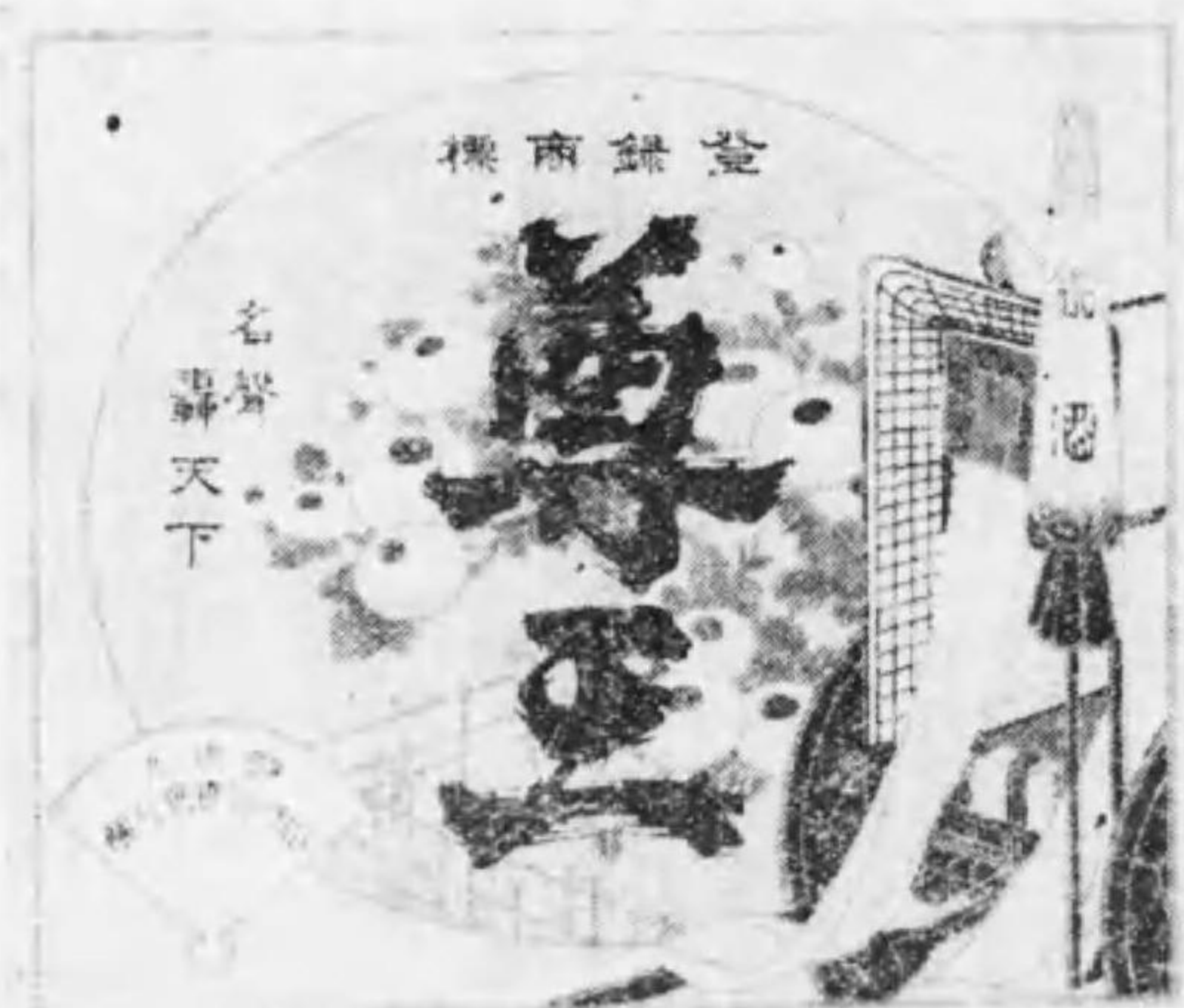


清酒「尊王」  
醸造元

### 山崎合資會社

幡豆郡幡豆村

酒は灘に限ると、左黨は疾くより極めて居る。成程一般的に灘酒が、清酒界の覇權を握つて居ることは、殊更嗚々の要なきも、併しソは全体の平均數字を示したもので、地方にも、個個の清酒を吟味した時、絶對的に遜色せざるものは尠くない。山崎合資會社醸造の「尊王」も其一つにして、一杯傾けて陶然たる酔ひ心地は、一度口にしたものゝ、忘れ難い印象である。若く同酒が酔人の享樂に、無くてはならない



ものゝ一つと數られるに至つた過程を見れば、其間に相當の歴史を繰返して居ると思はれるも、實は明治十六年の創業に成つたもの故、「何百年前人皇何代何々の年間に」と云つたものには遜色するが、骨董ではあるまいし、左様な箱が冬期三十日で作られる清酒に、何で入用だろうぞ。然かも明治十六年と云へば、今よ

り四十幾年前のこと、四昔も經驗を得ての造出なれば、昔も相當について居る筈故に、他と比し何も左程の弱味もなからうではないか。而して、現在の造石高は八百石、けれ共別に一千石醸酒の新倉が竣工したから十六年度には一躍一千八百石を造出して縣下の上戸黨を賑すに至るであろう。販路は幡豆郡と、豊橋支店を中心に寶飯郡一帯に亘つて居るが、若し三河鐵道の海岸線が成就せば、又更に、多大の需要家を累加すると思はれる。尙代表社員の出だけに温厚にして研究心も非常に深い。

### 丸三生系株式會社

碧海郡矢作町  
電話一三五番

今を去る二十年前、矢作町の三浦三五郎と云ふ人が、三龍社の賃びきを行ふ目的で一つの工場を作つた。ソレが丸三生系株式會社の始祖だから相當古い話である。けれ共此工場は常に失敗續きにて利益をあげるよりも、寧ろ損をする方が多いと云ふ厄介もの故明治四十三年にも最早動きがとれず、遂に救済を三龍社に求めて僅に機械の運轉を維持せねばならないと云ふ破目に陥つたのも無理ではない當時三龍社の旨を奉じて此處の目附役となつたのが即ち現在常務水田長之助氏であるが、放蕩息子の監視は親でも出來ない如く、流石の水田氏も傾く柱の支ようがない爲め、己むなく之を合資會社に變